

### 70-O P (第293図)

第8地区の南東端部の、B03PVで検出したピットである。円形状を呈し、径0.44m、深さ0.03mを測った。内部から瓦器がごく少量出土した(図版54)。

### 70-O P 出土遺物 (第294図1484)

70-O Pからは瓦器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

1484は瓦器の小皿である。比較的丸みを持つ底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。外面に横ナデのために段が二段生じている。

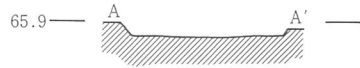
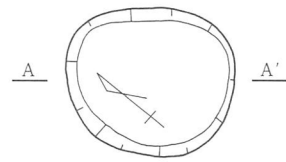
### 71-O P

第8地区の北半部で検出したピットである。円形状を呈し、径0.3m、深さ0.18mを測った。柱痕は確認できなかった。内部から土師器がごく少量出土した。

### 71-O P 出土遺物 (第295図1485)

71-O Pからは土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

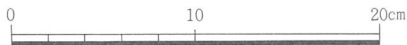
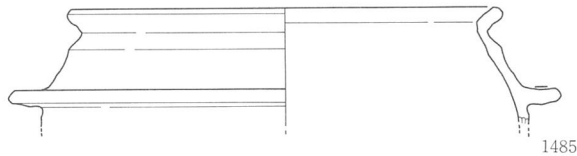
1485は土師器の羽釜である。体部上半以上の破片で、体部上半は内傾する。口縁の立ち上りが短く外反する。体部上半外面に幅の狭い肉厚の鐙を付す。



第293図 70-O P 平面図・断面図



第294図 70-O P 出土遺物



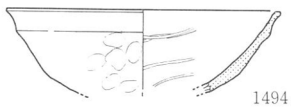
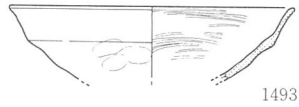
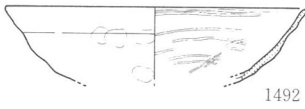
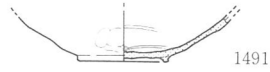
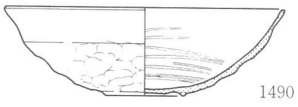
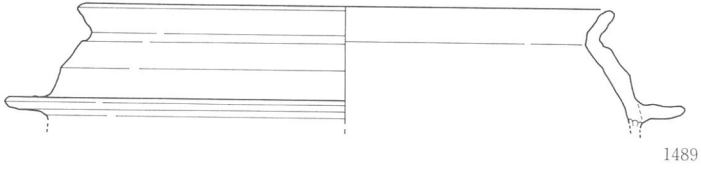
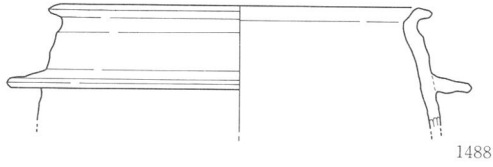
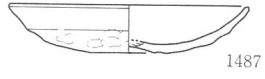
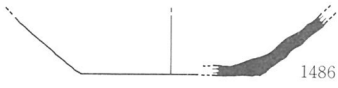
第295図 71-O P 出土遺物

## 6. 自然河川

第8地区では、鎌倉時代に比定される自然河川を3条検出した。

### 2-O R

第8地区の北半部の、B03GS・GT・HS・HT・HU・IT・IUにまたがる地区で検出した自然河川である。調査区東壁付近から弯曲しつつ北方へ走り、第7地区へ向かう。検出長12mで、幅4mを測った。部分的に約1mまで掘り下げたが川底には至らず、



第296図 2-O R出土遺物(1)



完掘できなかった。埋土は5 Y6/  
1灰色の荒い砂である。内部から  
須恵器・土師器・瓦器などが少量  
出土した。

2-O R出土遺物（第296図1486  
～第297図1497）

2-O Rは完掘していないが、  
その割には多くの遺物が出土し、  
須恵器・土師器・瓦器など11点を  
図示できた。

1486, 1495は須恵器の鉢である。そのうち1486は底部の破片である。平らな底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。

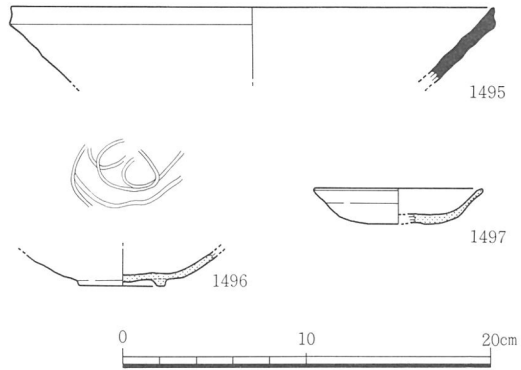
1495は口縁部の破片である。口縁の立ち上りがまっすぐ外上方にのび、端部は外側に面をなす。面の中央に凹みが生じている。東播系の須恵器である。

1487は土師器の皿である。丸みを持つ底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。口縁部外面に横ナデによる凹みが生じている。

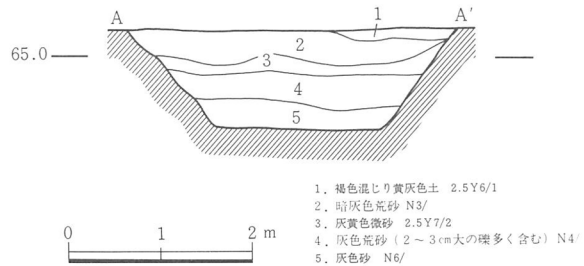
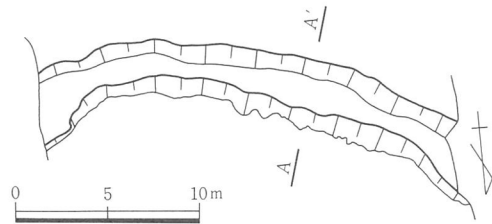
1488, 1489は土師器の羽釜である。ともに体部上半以上の破片で、そのうち1488は体部上半がまっすぐ内傾し、口縁の立ち上りがごく短く、外側に折れて終る。

1489は体部上半が内弯気味に内傾するもので、口縁の立ち上りが短く外上方へのびる。

1490～1494, 1496は瓦器の椀である。小片がほとんどで、全体の形状を復元できたのは1490のみである。平底の底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。比較的深い形状を呈する。底部外面に断面三角形の低い貼付高台を付す。器面の調整は、内面が簡略化されたヘラ



第297図 2-O R出土遺物(2)



第298図 3-O R平面図・断面図

ミガキで、外面にはわずかに荒いヘラミガキがみられる。見込みに連結輪状暗文が施されるものがある。尾上編年のⅢ-2型式に含まれるもので、13世紀前半に比定される。

1497は瓦器の小皿である。小さな平底の底部で、口縁の立ち上りがわずかに内弯しつつ外上方へのびる。

### 3-O R (第298図)

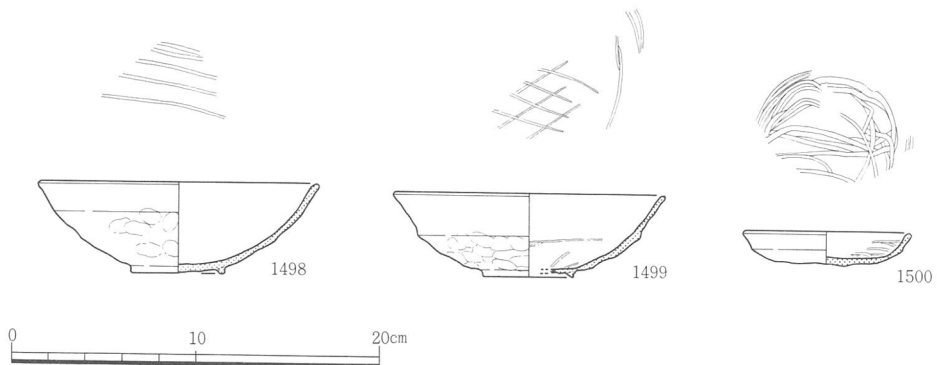
第8地区の中央部の、B03MQ~MU・OR~OUにかけての地区で検出した自然河川である。ゆるく弯曲しながら調査区を東西に横断するもので、西端付近で後述の1-OLに上端を切られている。検出長28mで、幅3.6m、深さ1.2mを測った。埋土は5層に分層でき、上より2.5Y6/1褐色混じり黄灰色土、N3/暗灰色荒砂、2.5Y7/2灰黄色微砂、N4/灰色荒砂、N6/灰色砂となっている。埋土のほとんどが砂で、比較的淀みなく流れていた事を示している。内部から土師器・瓦器などが少量出土した。

### 3-O R 出土遺物 (第299図1498~1500)

3-O Rからは土師器・瓦器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは3点である。

1498, 1499は瓦器の椀である。平底の底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。深い形状を呈する。底部外面に比較的高い貼付高台を付す。器面の調整は、内面を荒いヘラミガキし、外面には上半のみヘラミガキを施す。見込みには平行線状暗文(1498)、斜格子状暗文(1499)が施されている。尾上編年Ⅲ-1型式に含まれるもので、12世紀末頃に比定される。

1500は瓦器の小皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。内面に連続圏線状にヘラミガキを施し、見込みには幅が広く規格性のない暗文がみられる。



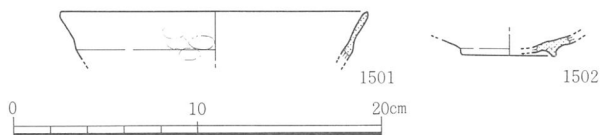
第299図 3-O R 出土遺物

#### 4-OR

第8地区の南半部の、B03NP~NS・PR・OP~OR・QR・QSにまたがる地区で検出した流路である。南東から北西方向にゆるく弯曲しつつ走る。検出長12mで、幅4mを測った。深さは0.5mである。埋土は1層で、N4/灰色の荒砂である。内部から瓦器がごく少量出土した。

#### 4-OR出土遺物 (第300図1501, 1502)

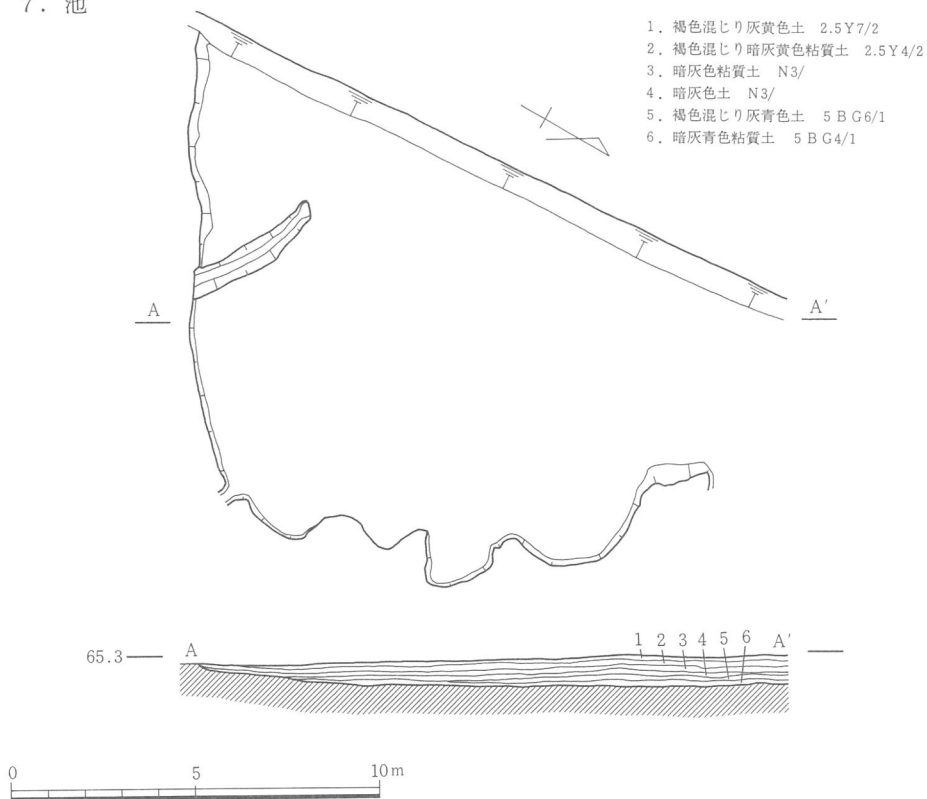
4-ORからは瓦器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは2点である。



第300図 4-OR出土遺物

1501, 1502は瓦器の椀である。ともに口縁部のみ、あるいは底部のみの小片で、全体の形状などは不明である。

#### 7. 池



第301図 1-OL平面図・断面図

第8地区では、池状の遺構が2ヶ所検出された。

#### 1-O L (第301図, 図版54)

第8地区の北西半部の、B03IP~IR・JP~JR・HP・KP~KR・LPにまたがる地区で検出した池状の遺構である。検出した範囲でみる限りは方形状を呈するものと思われ、19m×10m以上の規模を持つものと思われる。深さ1.6mを測った。埋土は6層に分層でき、上より2.5Y7/2褐色混じり灰黄色土、2.5Y4/2褐色混じり暗灰黄色粘質土、N3/暗灰色粘質土、N3/暗灰色土、5BG6/1褐色混じり灰青色土、5BG4/1暗灰青色粘質土となっている。内部から須恵器・土師器・瓦器・磁器などが比較的まとまった量出土した(図版55)。

#### 1-O L 出土遺物 (第301図1503~第302図1535)

1-O Lからは須恵器・土師器・瓦器・磁器などが比較的まとまった量出土した。そのうち図示し得たのは33点である。

1503~1505は須恵器の鉢である。ともに口縁部のみの破片で、そのうち1503、1505は口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。端部の外側に面をなす。東播系の須恵器と思われる。

1504はわずかに外反しつつ外上方へのび、端部はわずかに肥厚する。

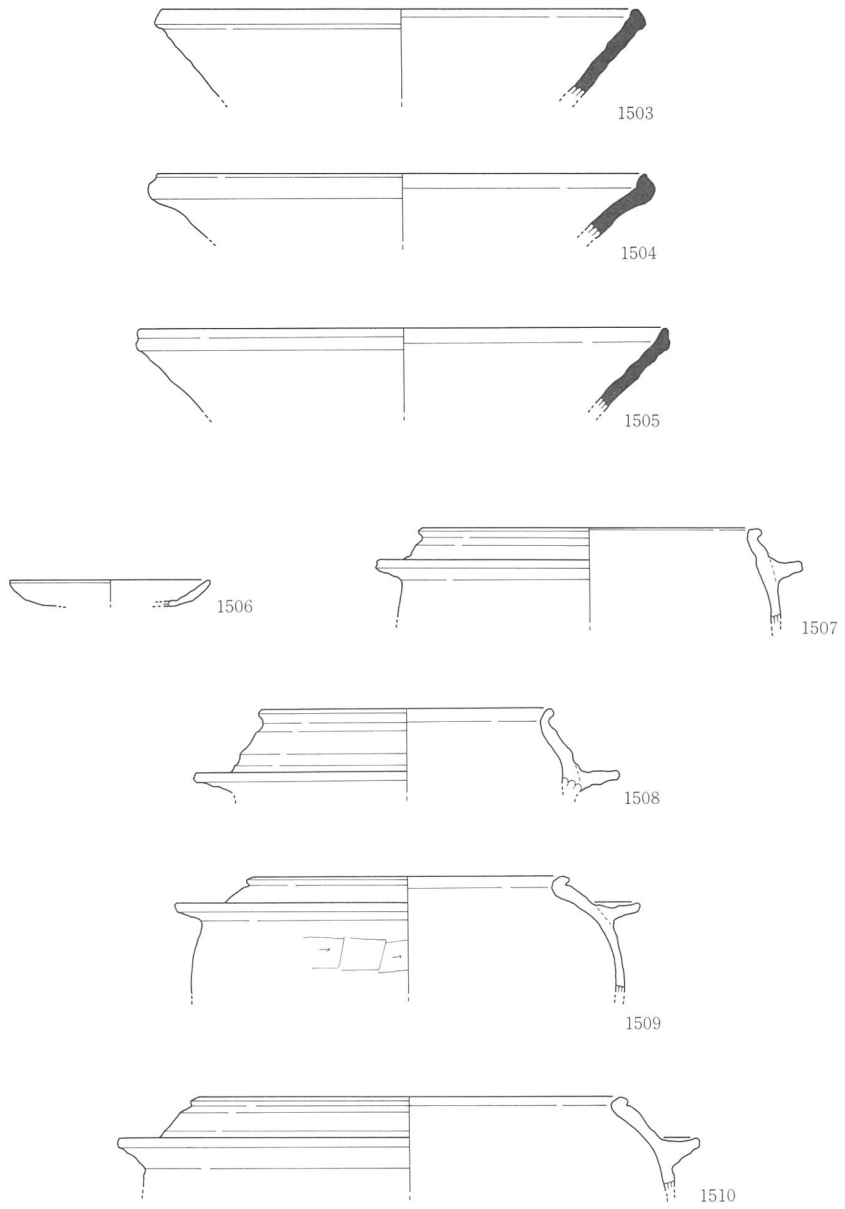
1506は土師器の小皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りが低く、内弯しつつ外上方へのびる。

1507~1510は土師器の羽釜である。すべて体部上半以上の破片で、端部上半がわずかに内傾するもの(1507)、大きく内弯しつつ内傾するもの(1508~1510)がある。口縁部はごく短く、外側に折れて終る。

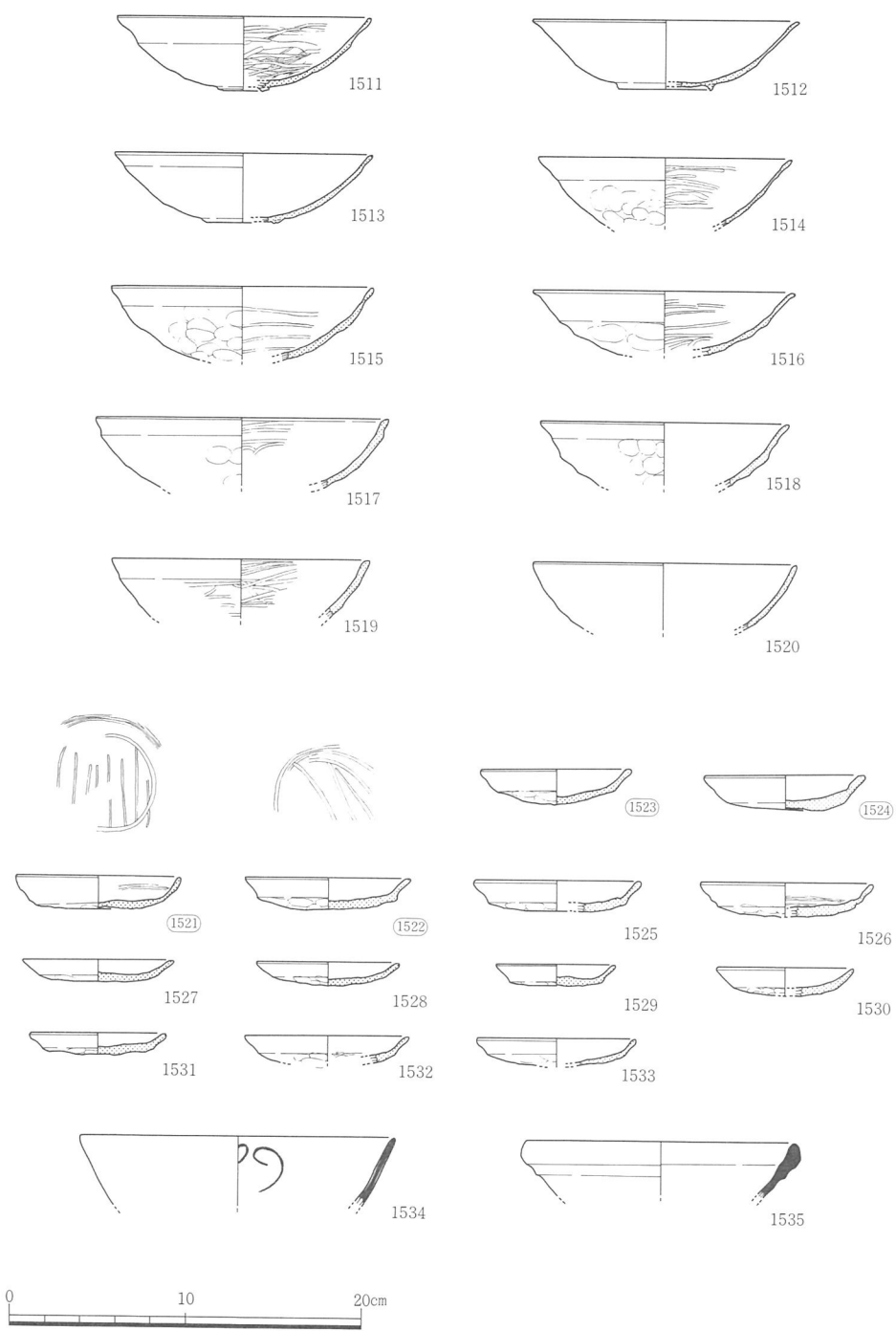
1511~1520は瓦器の碗である。平底の底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。内面を荒いヘラミガキし、外面には上半のみに荒いヘラミガキがみられる。尾上編年のIII-2型式に含まれるものである。

1521~1533は瓦器の小皿である。底部は平らなもの(1522、1529など)、丸みを持つもの(1523、1528など)、その中間のもの(1526、1533など)に分類でき、口縁の立ち上りはいずれも低く、短く外上方へのびるものである。口縁部外面に横ナデによる凹みが生じるものが多い。見込みに平行線状暗文を施すもの(1521、1522)がある。

1534は青磁の碗である。口縁部内面に花紋と思われる紋様を配している。竜泉窯系の製品と思われる。



第302図 1-O L 出土遺物(1)

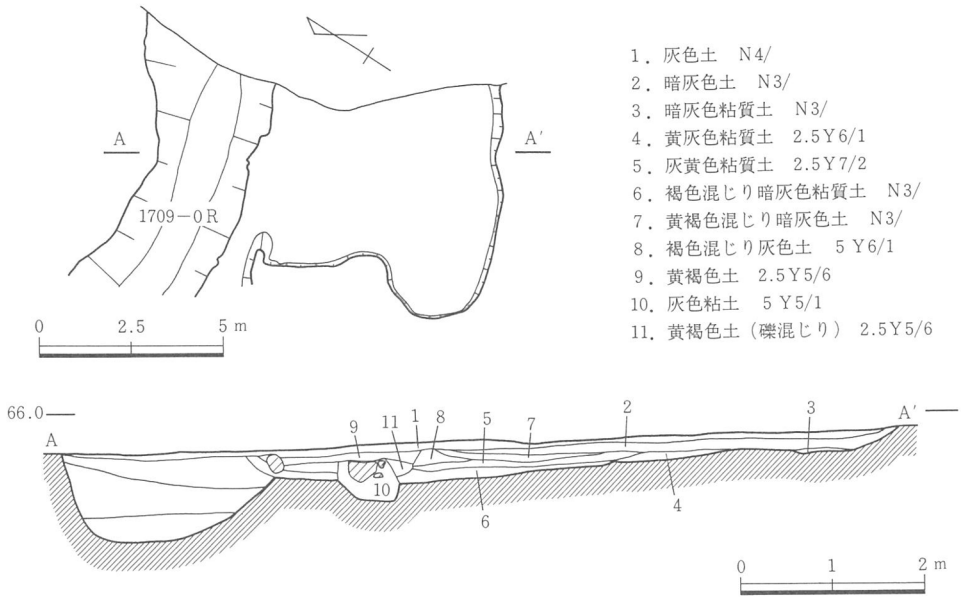


第303图 1-O L 出土遺物(2)

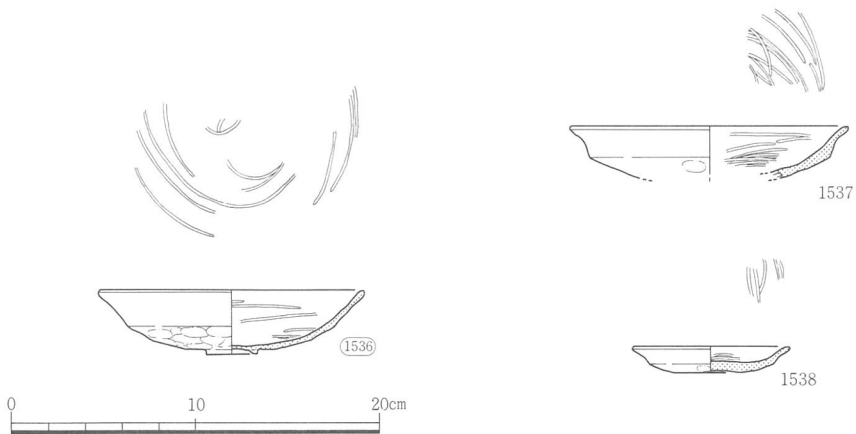
1535は白磁の碗である。玉縁状口縁を呈する。同安窯系の製品である。

2-O L (第304図)

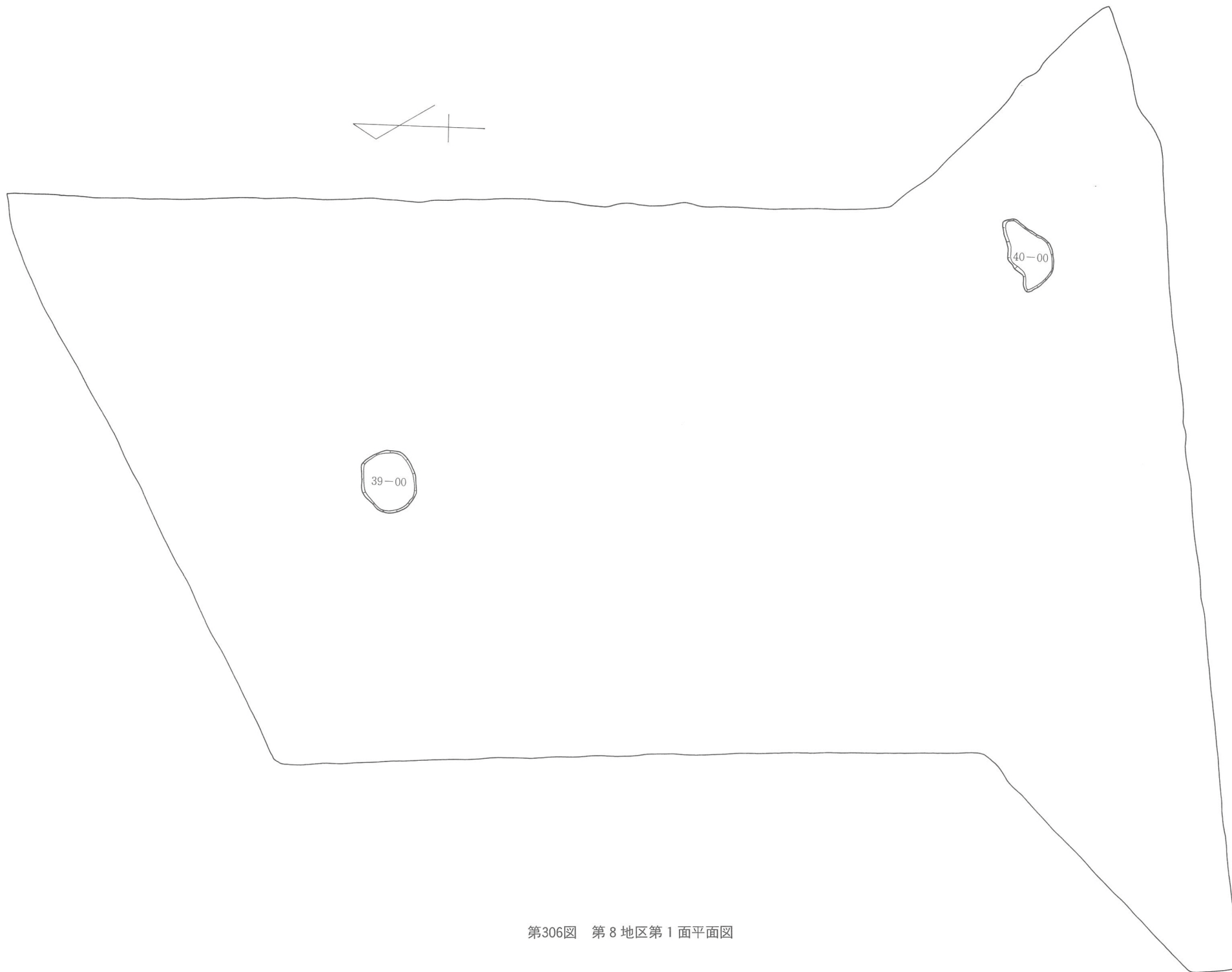
第8地区の南半部東端の、B03NU・NV・OU・OV・PVにまたがる地区で検出した池状の遺構である。3-ORと重複しており、断面観察の結果、2-O Lが3-ORを切っている事が判明した。又、40-OOに南端部を切られている。遺構の東側は調査区外にあり、全体の形状、規模などは不明であるが、四角形状を呈するものと思われ、検出長は南北約7m、東西4m以上である。深さは0.5mを測った。埋土は9層に分層でき、上



第304図 2-O L 平面図・断面図



第305図 2-O L 出土遺物



第306图 第8地区第1面平面图



よりN4/灰色土，N3/暗灰色土，N3/暗灰色粘質土，2.5Y6/1黄灰色粘質土，2.5Y7/2灰黄色粘質土，N3/褐色混じり暗灰色粘質土，2.5Y5/6黄褐色土，5Y5/1灰色粘土となっている。池内には30cm～50cm大の礫がみられる部分があり，2－〇Lは農耕用水の溜め池と思われる1－〇Lとは異なる性格を持つものと考えられる。内部から土師器・瓦器などが少量出土した。

#### 2－〇L出土遺物（第305図1536～1538）

2－〇Lからは土師器・瓦器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは3点である。1536，1537は瓦器の椀である。平らな底部で，口縁の立ち上りが内弯しつつ低く外上方へのびる。浅い形状を呈する。底部外面に，径が小さく低い断面三角形の貼付高台を付す。器面の調整は内面を簡略化した荒いヘラミガキし，外面にはヘラミガキがみられない。見込みに連結輪状暗文を施している。尾上編年のIII－2型式に含まれるもので13世紀前半に比定される。

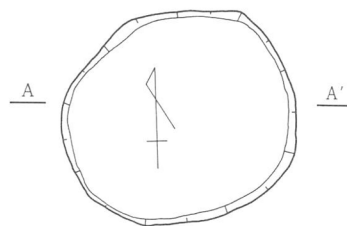
1538は瓦器の小皿である。平らな底部で，口縁の立ち上りが内弯しつつ低く外上方へのびる。口縁部外面に横ナデによる凹みが生じている。見込みに平行線状暗文がみられる。

### 第2項 鎌倉時代

鎌倉時代の遺構は第5層上面で検出し，土坑が2基確認された。又，平面的にはとらえられなかったが，調査区西壁断面でも溝ないしはピットと思われる遺構がみられた。

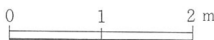
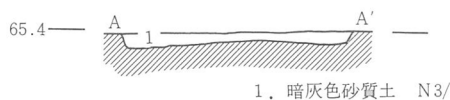
#### 39－〇〇（第307図，図版56）

第8地区の北半部の，B03J Sで検出した土坑である。不整形円形状を呈し，径2.5m，深さ0.2mを測った。埋土は1層で，N3/暗灰色砂質土である。内部から須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・磁器などが多量に出土した（図版56）。

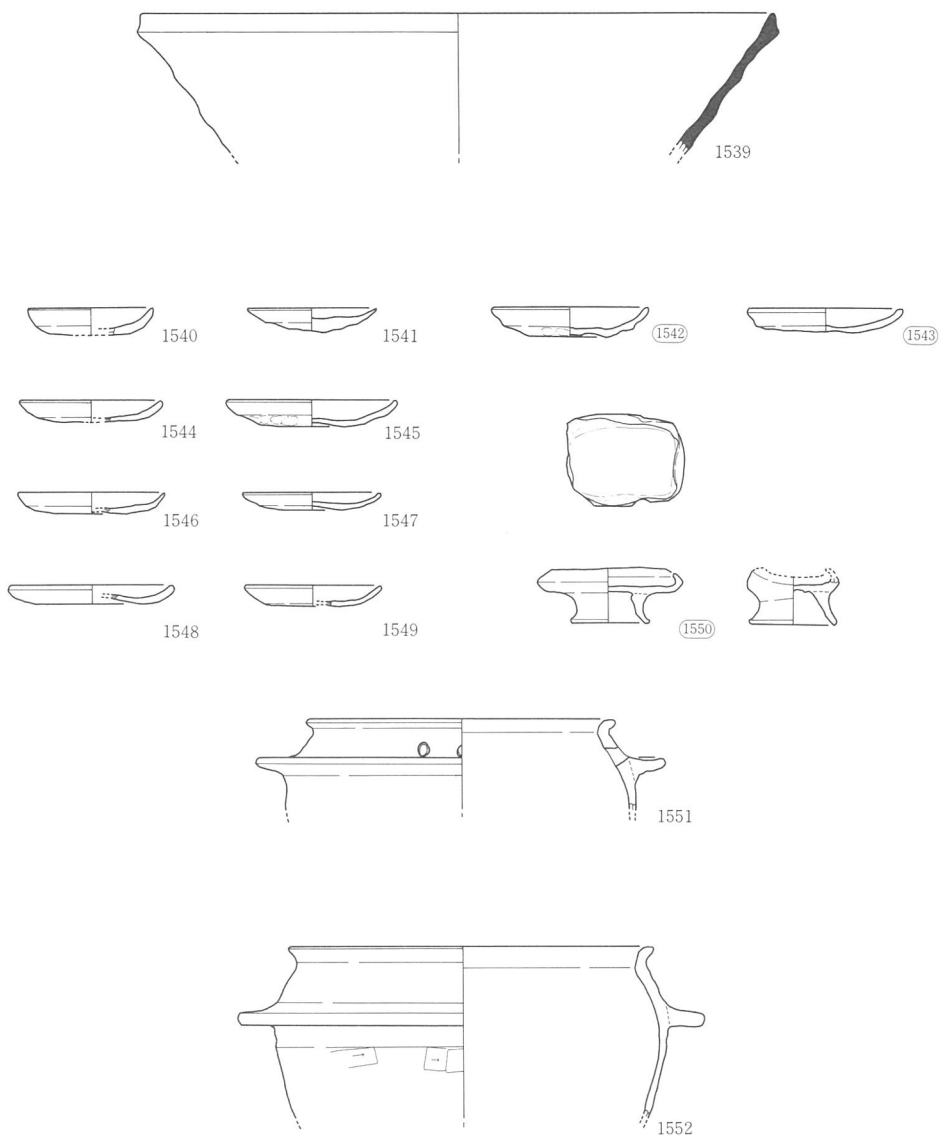


#### 39－〇〇出土遺物（第308図1539～第318図1635）

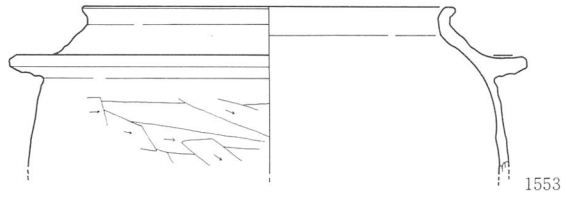
39－〇〇からは須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・磁器などが多量に出土した。そのうち図示し得たのは97点である。



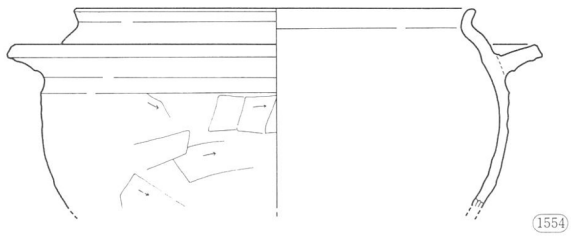
第307図 上面39－〇〇平面図・断面図



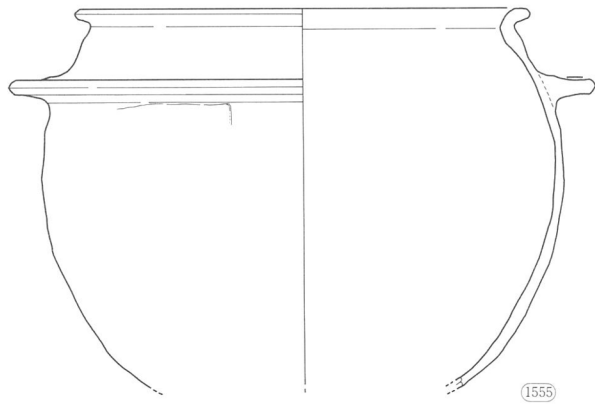
第308図 39-〇〇出土遺物(1)



1553



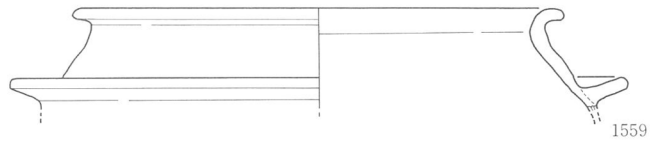
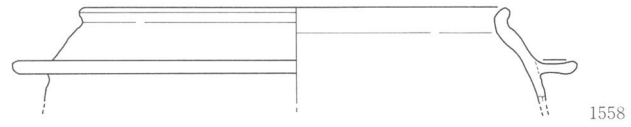
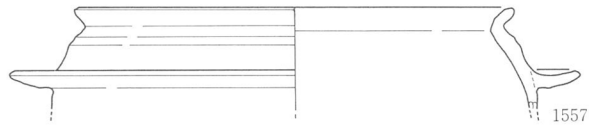
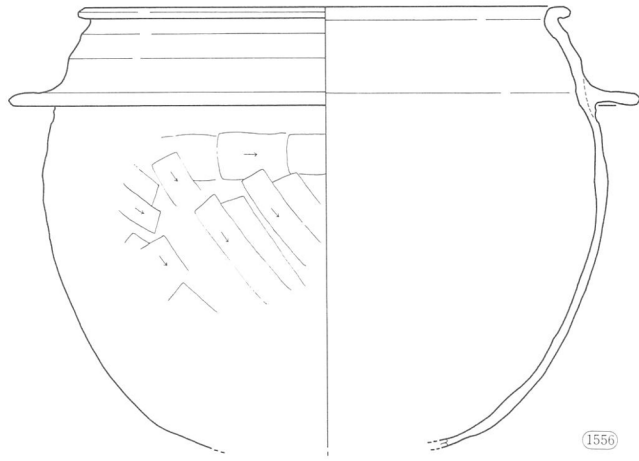
1554



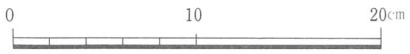
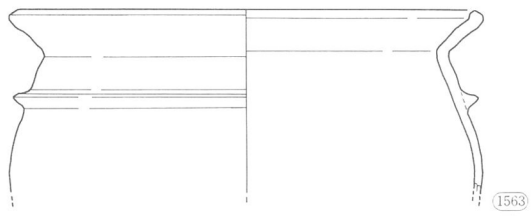
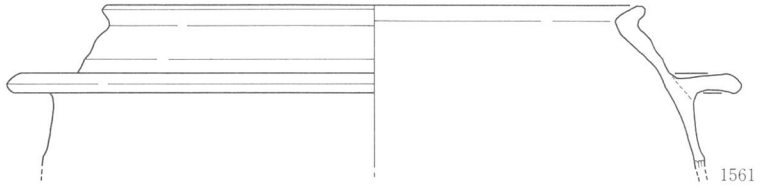
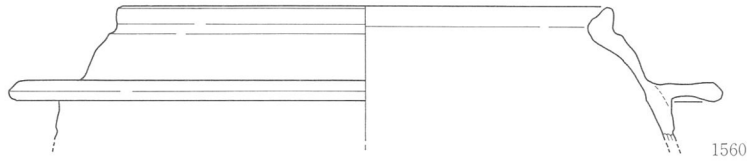
1555



第309図 39-〇〇出土遺物(2)



第310図 39-〇〇出土遺物(3)



第311图 39-〇〇出土遺物(4)

1539は須恵器で、鉢の口縁部である。口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。端部は外側に面をなす。面の中央に凹みが生じている。東播系の須恵器である。

1540～1549は土師器の小皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ低く外上方へのびるもの（1540, 1547など）が多いが、1541は肉厚の円板の周縁を外上方につまみ出したような特異な形状を呈している。

1550は土師器の耳皿である。長方形の平面で、周縁を上方へ折り曲げて口縁を作り出している。底部外面中央付近に「ハの字」状に開く高い貼付高台を付している。

1551～1561は土師質の羽釜である。体部は中位でふくらむ球形状を呈しており、短く外側に屈折する口縁部が付く。体部上半に幅の狭い肉厚の鏝を付している。体部外面にヘラケズリを施すものがある。口径20cm前後の小型、25cm前後の中型、30cm前後の大型の3種類がみられた。1551には体部上端に2個一対の円孔がみられ、この円孔は対角の2ヶ所にあるものと思われる。

1562～1565も土師質の羽釜で、上記のいわゆる和泉型の羽釜とは形状が異なり、紀伊地方でよくみられるものである。今回出土した紀伊型の羽釜には2つの形態がみられた。

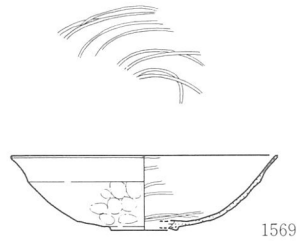
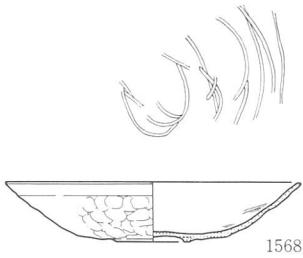
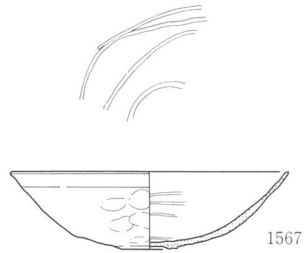
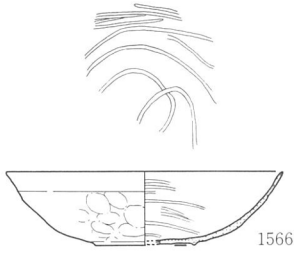
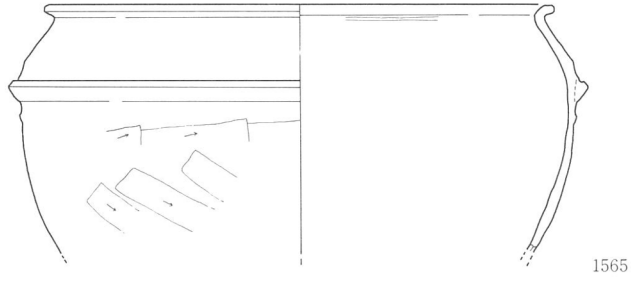
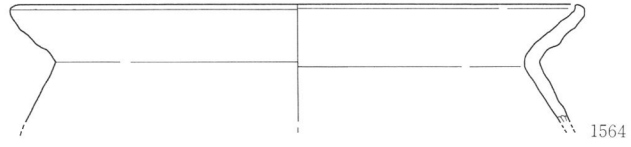
1562～1564は、体部下半は球形状を呈し、体部の最大径は中位にある。体部上半はまっすぐ内傾し、口縁部はくの字状に折れて大きく外上方へのびる。最大径は口縁部にある。体部上半に断面三角形のごく低い鏝を付しているが、これは実用性がほとんどないものである。

1565は半球形に近い体部であるが、体部上半にふくらみがあり、その上位は短く内弯する。口縁部はごく短く、外側に屈折して終る。体部上半に断面三角形のほとんど退化した鏝を付している。

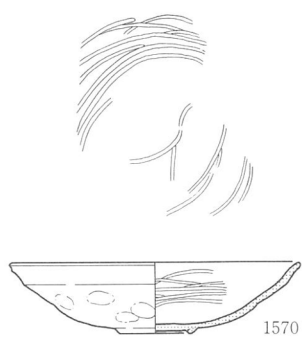
1566～1617は瓦器の椀である。小さな平底の底部で、口縁の立ち上りがわずかに内弯しつつ外上方へ低くのびる。浅い形状を呈する。底部外面に径が小さく低い断面三角形の貼付高台を付している。器面の調整は、内面に簡略化した荒いヘラミガキを施し、外面は指押さえのみで、ヘラミガキはみられない。見込みに連結輪状暗文を施すもの（1574, 1581）、連続圏線状暗文を施すもの（1599, 1601）、平行線状暗文を施すもの（1590, 1591）などがある。

1618は瓦質土器の羽釜である。体部上半以上の破片で、体部上半から口縁部にかけて内傾する。口縁端部は丸くおさめている。体部上端外面に幅の広い肉厚の鏝を付している。

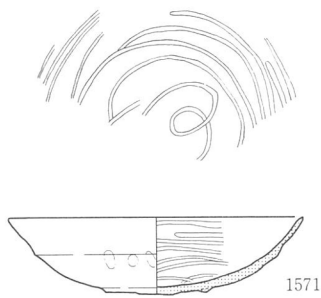
1619～1633は瓦器の小皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りが低く外上方へのびる



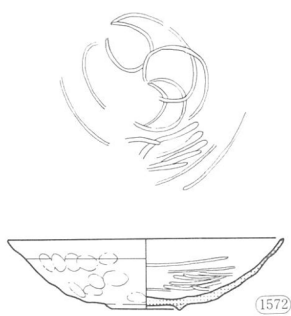
第312図 39-〇〇出土遺物(5)



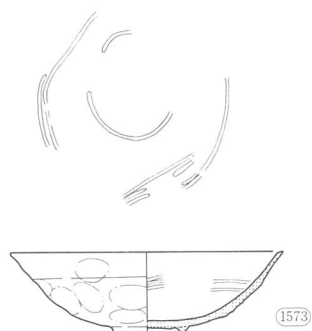
1570



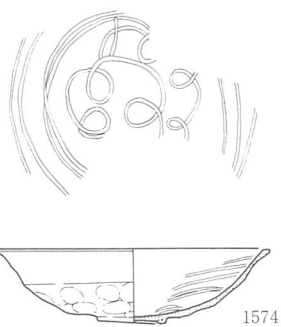
1571



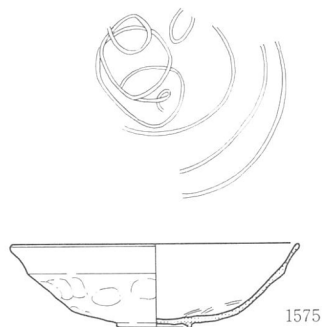
1572



1573



1574

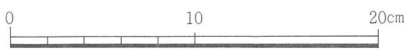
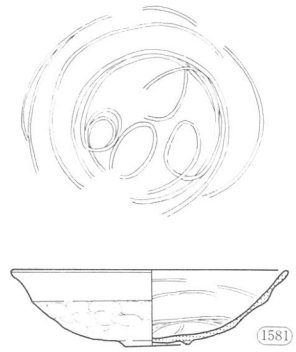
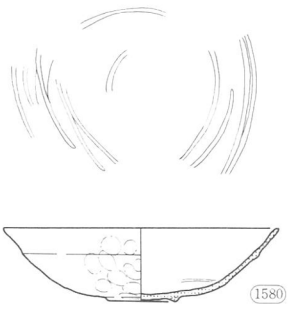
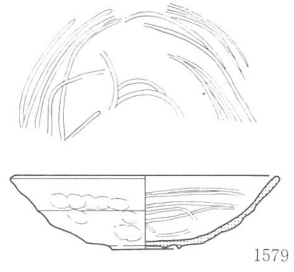
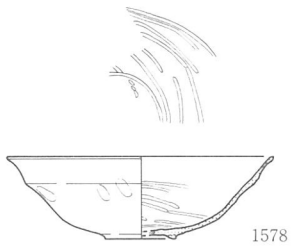
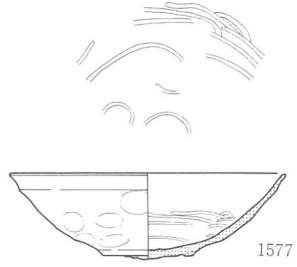
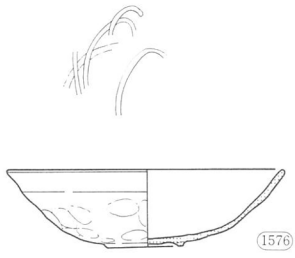


1575

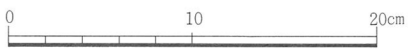
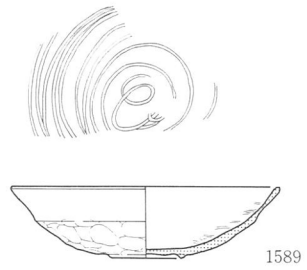
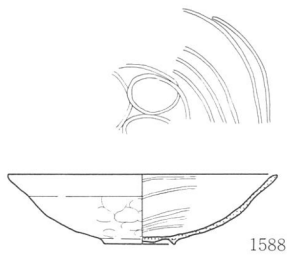
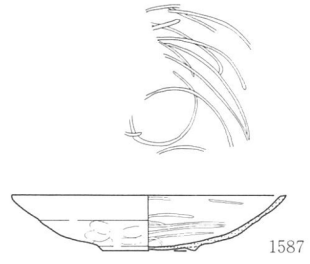
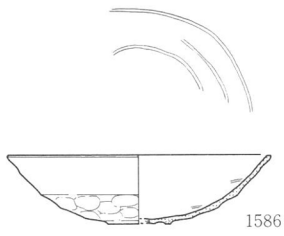
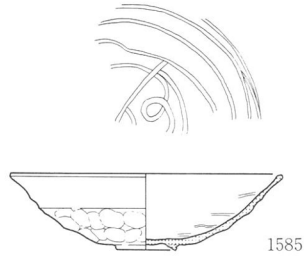
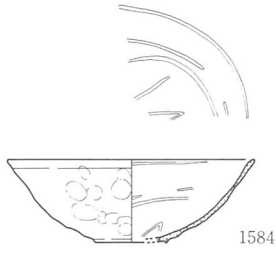
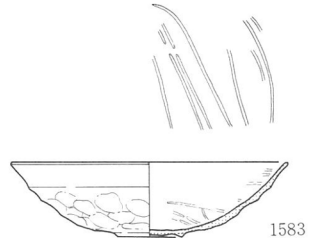
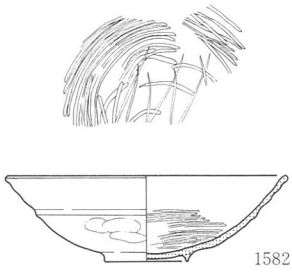


第313图 39-〇〇出土遺物(6)

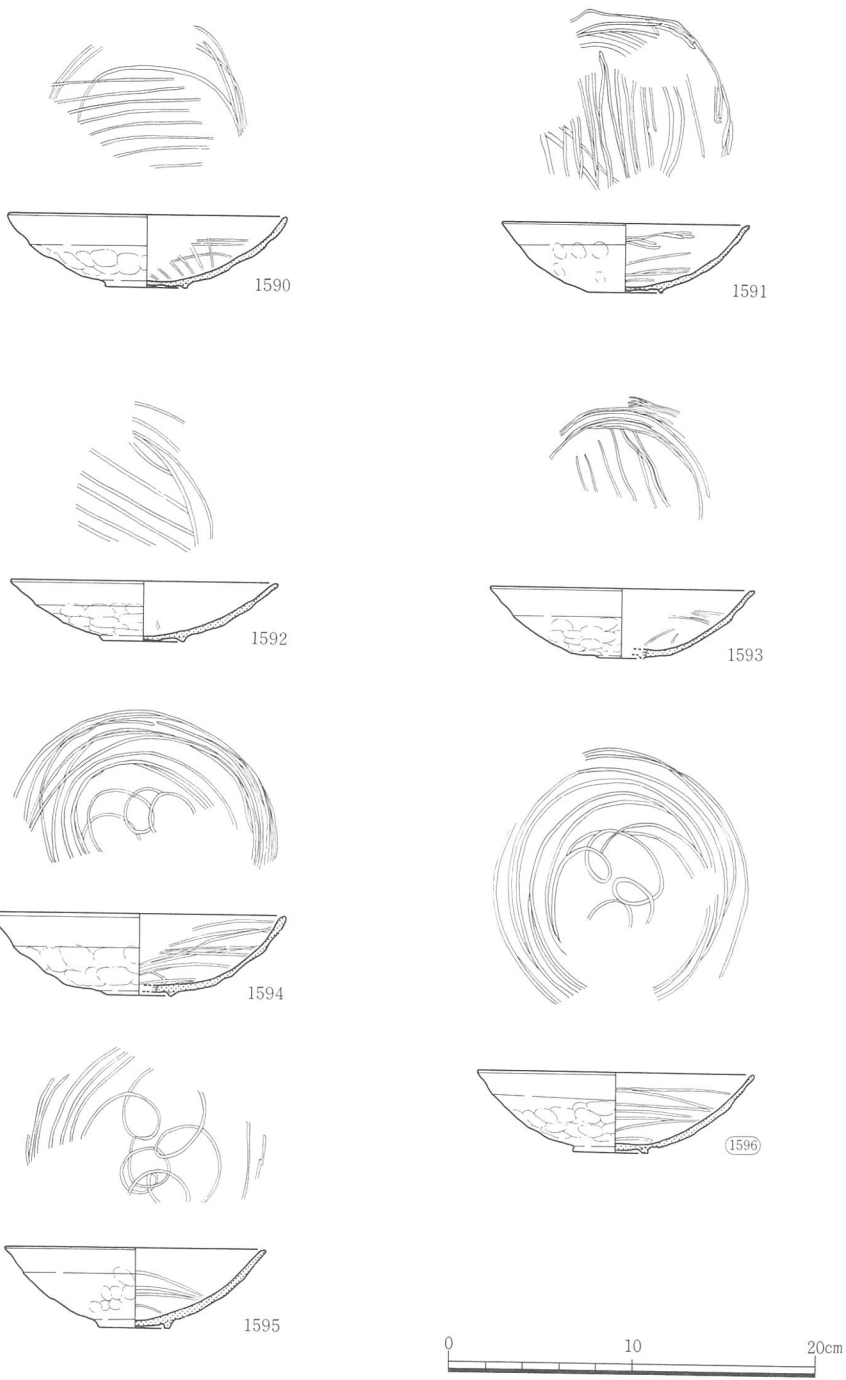




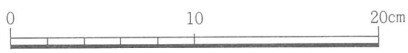
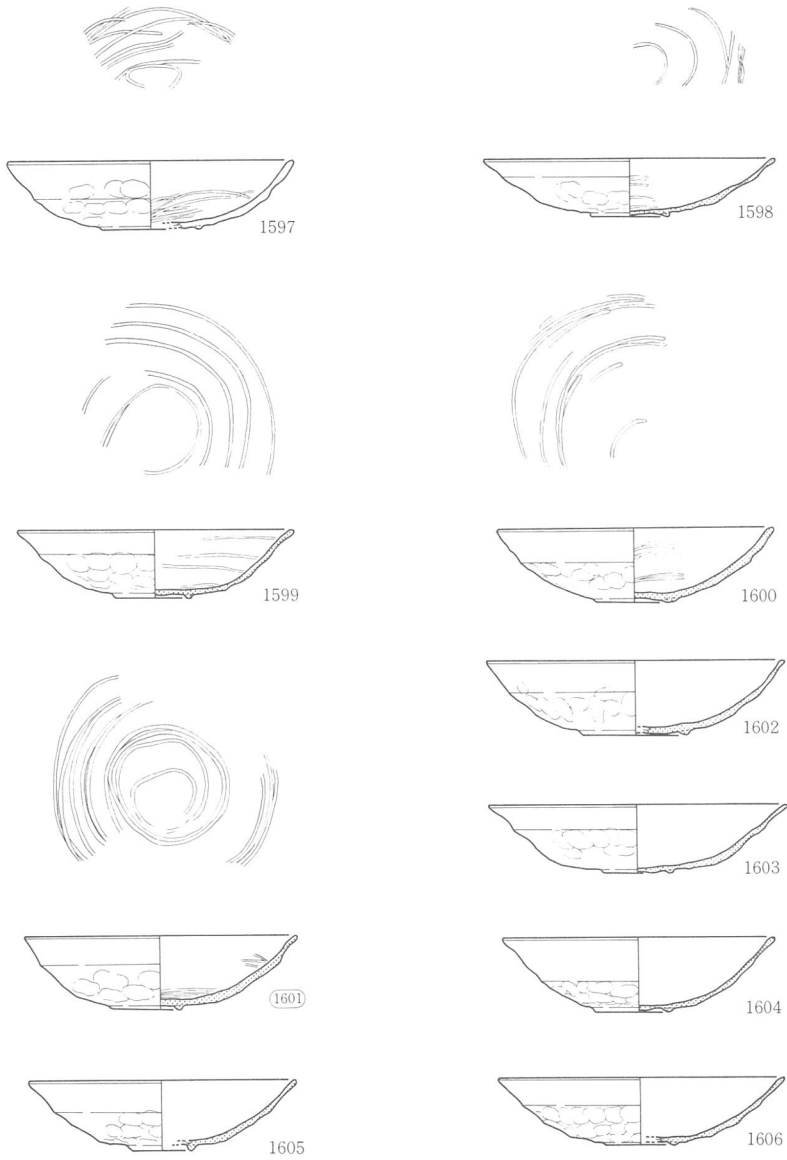
第314図 39-00出土遺物(7)



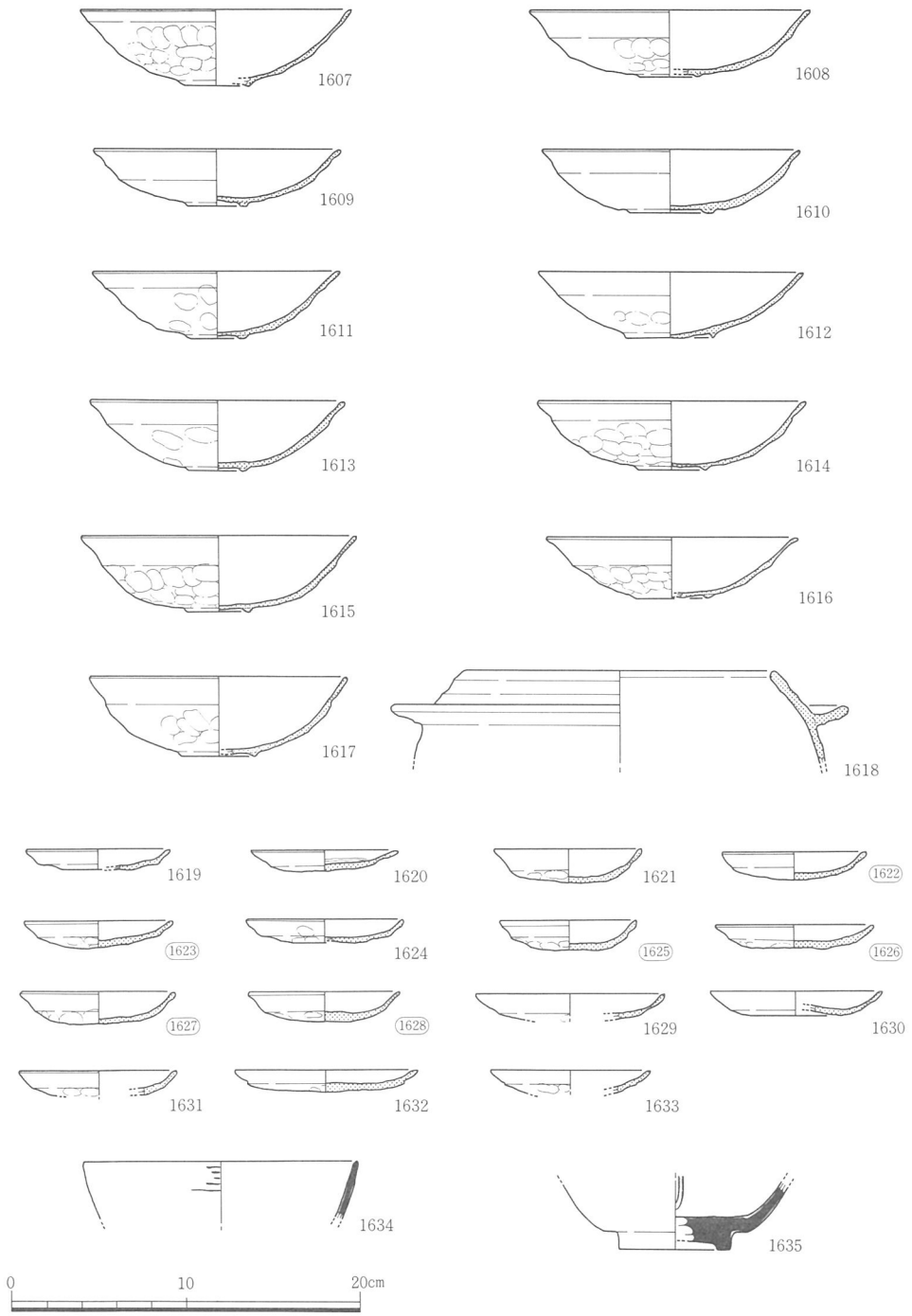
第315图 39-〇〇出土遺物(8)



第316图 39-〇〇出土遺物(9)



第317图 39-〇〇出土遺物(10)



第318図 39-〇〇出土遺物(11)

もの（1619, 1620, 1632など），比較的丸みを持つ底部で，口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびるもの（1621, 1625など）がある。調整は指押さえおよびナデによっており，ヘラミガキ，暗文などはみられない。

1634, 1635は青磁の碗である。そのうち1634は口縁部の破片で，外面に雷紋と思われる紋様がみられる。

1635は底部の破片である。肉厚の削り出し高台を持つものである。1634, 1635はともに竜泉窯系の製品である。

#### 40-〇〇（第319図）

第8地区の南半部東端の，B03PU・PVにまたがる地区で検出した土坑である。不定形状を呈し，長径3.1m，短径1.8m，深さ0.2mを測った。埋土は2層に分層でき，上より2.5Y7/2灰黄色砂質土，N3/暗灰色土となっている。内部から須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・磁器などが比較的まとまった量出土した（図版57）。

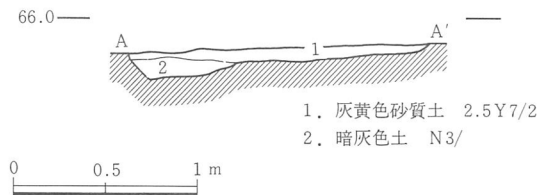
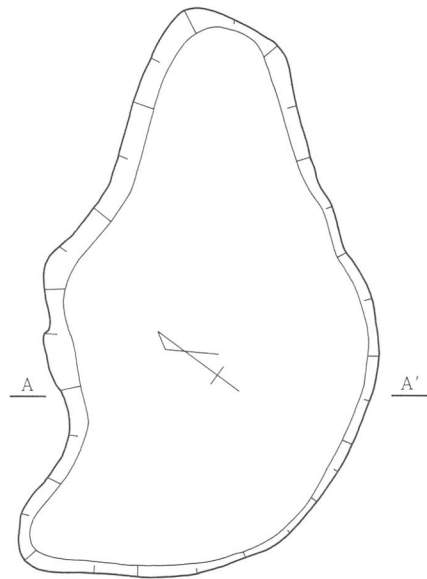
40-〇〇出土遺物（第320図1636～第323図1663）

40-〇〇からは須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・磁器などが比較的まとまった量出土した。そのうち図示し得たのは27点である。

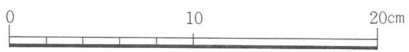
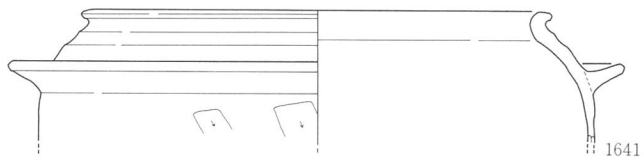
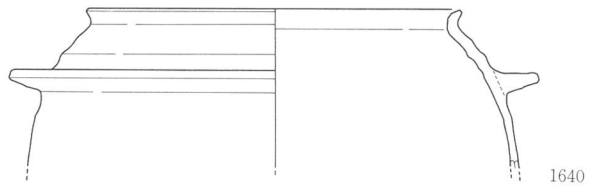
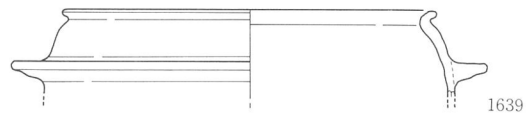
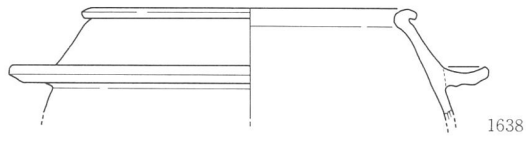
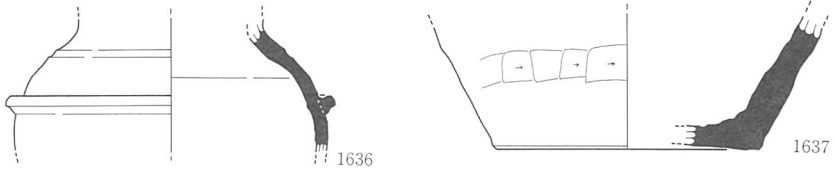
1636は須恵器で，壺と思われる。体部みの破片で，球形状を呈し，体部中位外面に，台形状の断面を持つ突帯を付している。

1637は須恵器で，甕の底部と思われる。平らな底部で，体部下半がまっすぐ外上方へのびる。

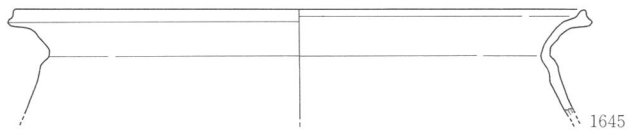
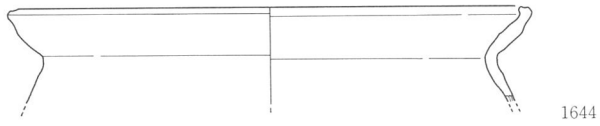
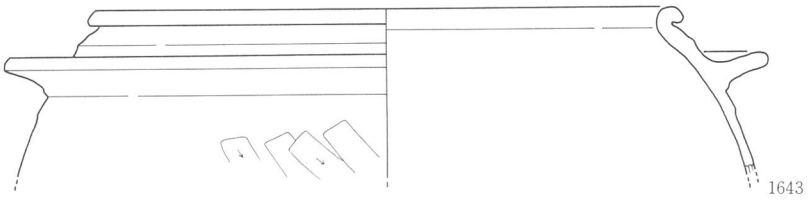
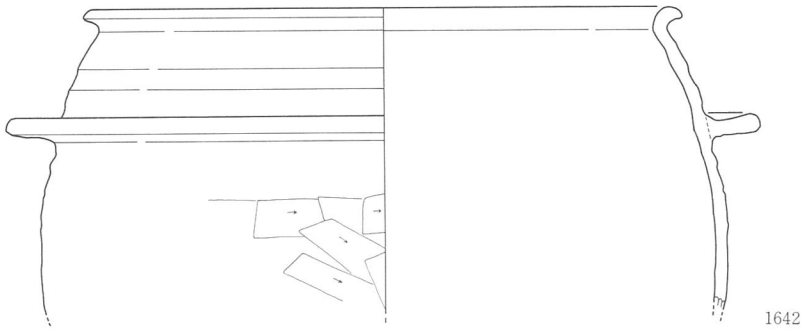
1638～1643は土師質の羽釜である。いずれも体部中位以上の破片である。体部は中位でふくらみ，上半は丸みを持って内傾する。口



第319図 40-〇〇平面図・断面図

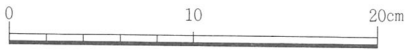
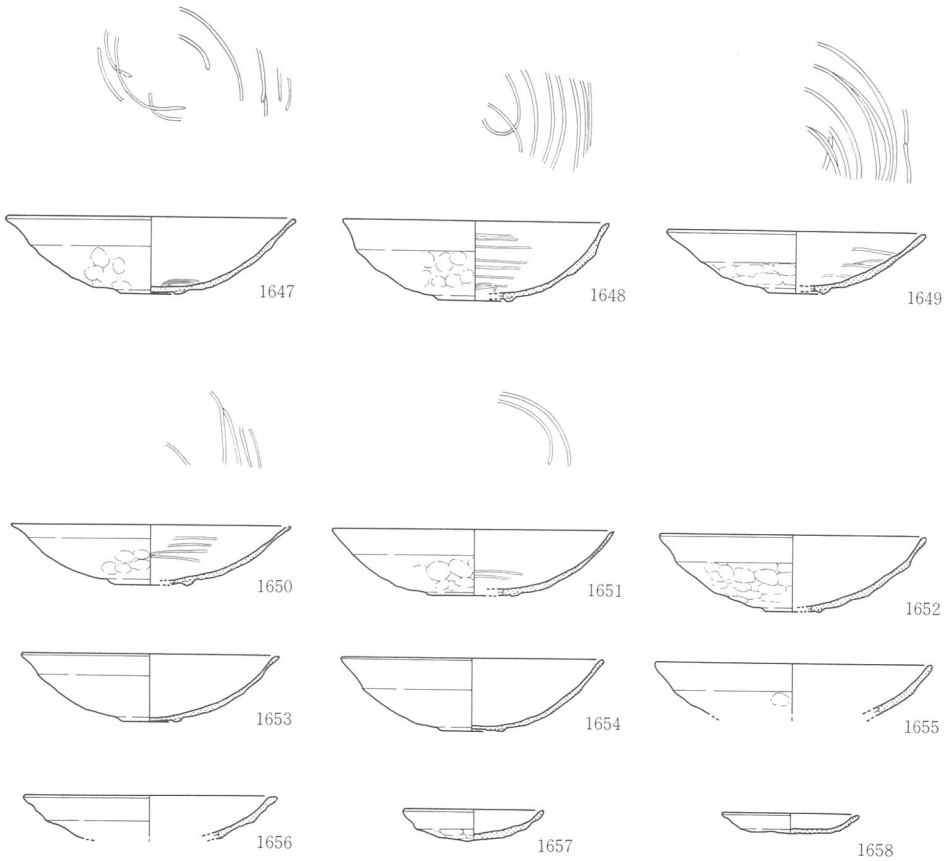
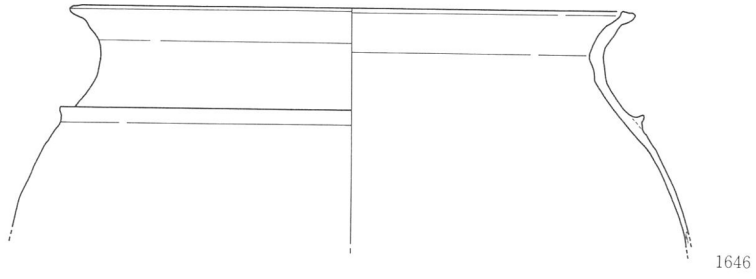


第320图 40-〇〇出土遺物(1)

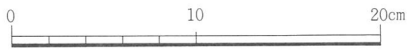
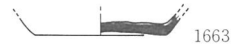
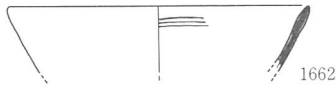
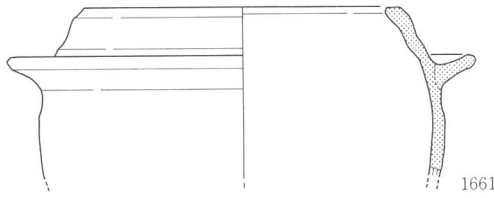
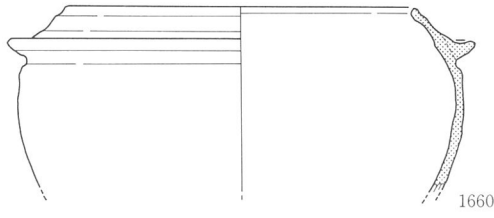
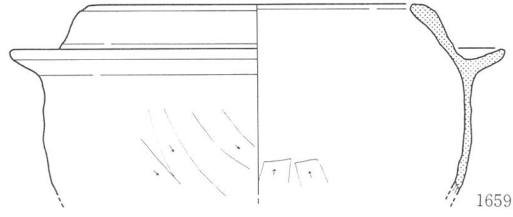


第321図 40-〇〇出土遺物(2)





第322图 40-〇〇出土遺物(3)



第323图 40-〇〇出土遺物(4)

縁部はごく短く、外側に屈折して終る。口径20cm内外の小型（1639～1641）、25cm内外の中型（1641）、30cm内外の大型（1642、1643）がある。

1644～1646はやはり土師質の羽釜で、いわゆる紀伊型のものである。そのうち1644、1645は口縁の立ち上りが大きく外上方へのびる。

1646は口縁の立ち上りが短く外反するもので、体部上端外面に断面三角形の退化した鏝を付している。

1647～1656は瓦器の碗である。小さな平底の底部で、口縁の立ち上りがわずかに内弯しつつ外上方へ低くのびる。浅い形状を呈する。底部外面に、径が小さく低い断面三角形の貼付高台を付している。器面の調整は、内面に簡略化した荒いヘラミガキを施し、外面は指押さえのみで、ヘラミガキはみられない。見込みに連結輪状暗文を施すもの（1647、1648、1649など）がみられる。

1657、1658は瓦器の小皿である。そのうち1657は比較的丸みを持つ底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。

1658は平らな底部で、口縁の立ち上りはまっすぐ外上方へのびる。ともに内・外面にヘラミガキ、暗文はみられない。

1659～1661は瓦質土器の羽釜である。中位でふくらむ球形の体部で、体部上半は内傾して口縁部に至る。口縁部はわずかに肥厚する。体部上半外面に幅の狭い肉厚の鏝を付している。

1662は青磁の碗である。口縁端部内面に紋様がみられる。竜泉窯系の製品と思われる。

1663は白磁で、鉢の底部と思われる。

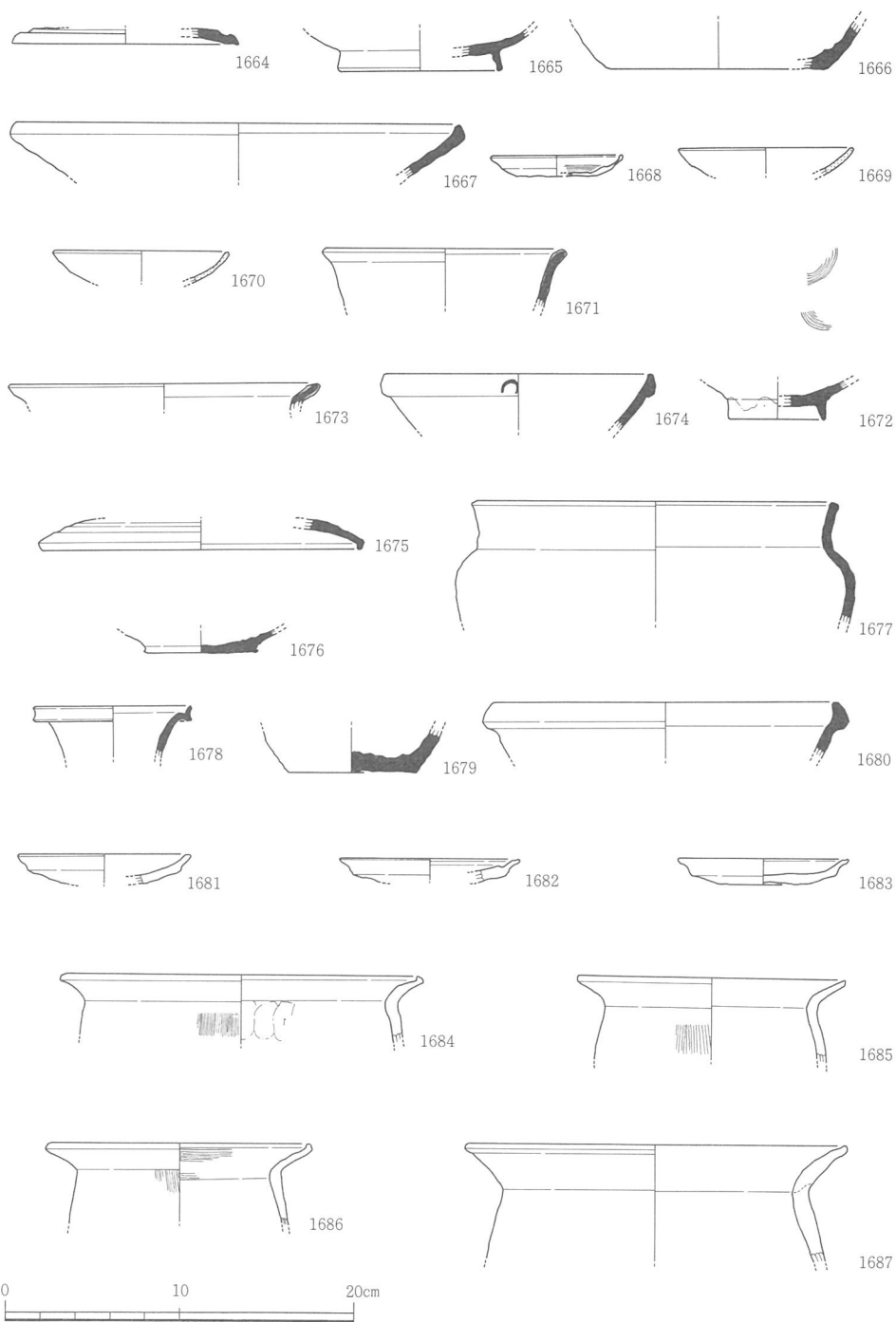
## 第10節 包含層出土遺物

### 第1項 第1地区

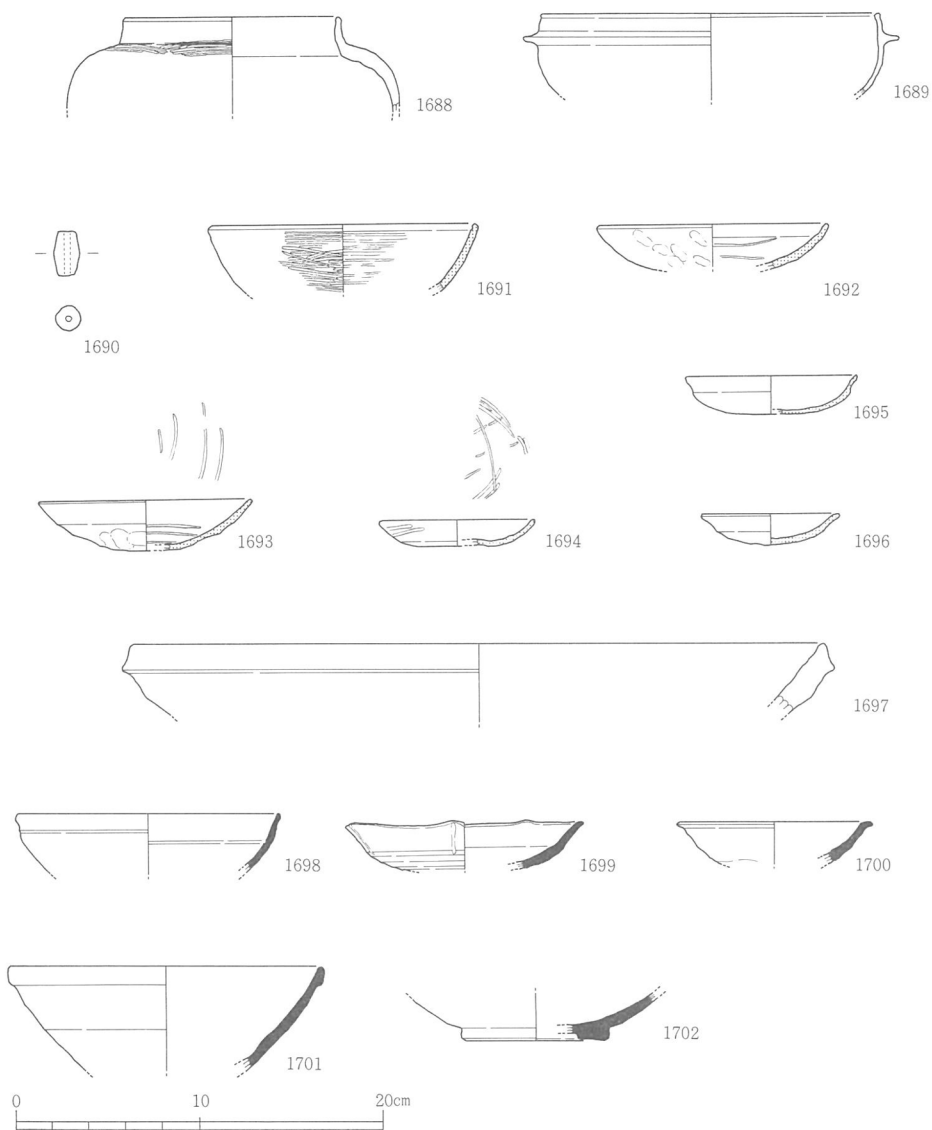
第1地区では、第3層の5Y6/3オリーブ黄色+10YR6/8明黄褐色砂質シルトと、第4層の2.5Y5/2明灰黄色砂質シルトから比較的まとまった量の遺物が出土しているが、そのうち代表的なもの39点をここにあげた（第324図1664～第325図1702）。

1664～1674は第3層から出土したもので、須恵器・土師器・瓦器・磁器などがある。

1664は須恵器の杯蓋で、頂部を欠損している。平らな頂部と思われ、縁部は屈曲する。



第324图 第1地区包含層出土遺物(1)



第325図 第1地区包含層出土遺物(2)

1665は須恵器の椀である。底部付近のみの破片で、底部外面周縁付近に肉薄で高い貼付高台を付す。

1666は須恵器で、壺の底部と思われる。

1667は須恵器の鉢で、口縁部のみの破片である。口縁の立ち上りがまっすぐ外上方にのび、端部を上方へ軽くつまみ出している。端部外面に面をなす。

1668は土師器の小皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りははじめ内弯し、その後まっ

すぐ外上方へのびる。

1669, 1670は瓦器の小皿である。ともに口縁部のみの小片で、全体の形状などは不明である。

1671～1674は磁器で、1671～1673は青磁、1674は白磁である。いずれも中国からの輸入品と思われる。

1671は碗の口縁部で、残存する範囲には文様などはみられない。

1672は碗の底部である。外面周縁付近に削り出し高台を有する。見込みに櫛描文を施す。

1673は口縁端部付近のみの小片のため、器種などははっきりしない。

1674は白磁の碗である。口縁部のみの破片で、口縁端部を外側に折り返す、いわゆる玉縁状口縁のものである。

1675～1702は第4層から出土したものであり、須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・磁器などがある。

1675は須恵器の杯蓋である。頂部が丸く笠形を呈し、縁部は屈曲せず彎曲気味に端部に至るものである。

1676は須恵器の杯である。底部のみの破片で、底部外面に糸切り痕が明瞭に残る。

1677は須恵器の鉢である。体部上半以上の破片である。体部は上端で最大径を持ち、その後大きく内弯して頸部に至る。口縁の立ち上りが短く、わずかに外反して上方へのびる。

1678は須恵器の壺である。口縁部のみの破片で、口縁の立ち上りが外反しつつ外上方へのび、端部付近で一度短く外方へ屈曲する。端部は上端を上方へつまみ出し、外側に面をなす。

1679は須恵器の壺で、底部のみの破片である。平らな底部で、内面には回転ナデ調整によって生じた稜が明瞭に残る。

1680は須恵器の鉢である。口縁部のみの破片である。端部の上端を内傾気味につまみ出しており、外面には丸みを持つ面をなす。

1681～1683は土師器の小皿である。わずかに丸みを持つ底部で、口縁の立ち上りがごく短く、低く外反して終わる。

1684～1687は土師器の甕である。いずれも体部上半以上の破片である。球形に近い体部と思われ、口縁の立ち上りが低く、外反する。端部を内側に曲げ込むもの(1684, 1686)、外面に面をなすもの(1685)、丸くおさめるもの(1687)などがある。

1688は土師器の壺である。体部上端以上の破片で、体部は上端付近に最大径があり、肩

の張った形状を呈するものと思われる。口縁部は短く直立する。外面にヘラミガキ調整を施す。

1689は土師器の羽釜である。底部を欠損している。体部は浅く、鍋形に近い形状を呈している。口縁部がわずかに内傾する。体部上端付近に幅の狭い鑿をめぐらす。

1690は土師質の土錘である。中位のふくらんだ円筒形状を呈している。

1691～1693は瓦器の椀である。そのうち1691は深い形状を呈し、内・外面に密なヘラミガキ調整を施す。

1692, 1693は浅く皿に近い形状を呈する。内面に連続圏線状暗文がみられる。

1694～1696は瓦器の小皿である。平底の底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびるもの(1694)、比較的丸みを持った底部で、口縁の立ち上りが短く外反するもの(1695, 1696)などがある。

1697は瓦質土器の鉢である。口縁部のみの小片であり、全体の形状などは不明である。

1698は青磁の碗である。底部を欠損している。

1699, 1700は青磁の皿である。そのうち1699は丸みを持つ底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。口縁端部が水平ではなく、波形状を呈する口縁部である。

1700は青白磁に近い色調を呈するもので、小皿である。底部を欠損している。

1701は青白磁の碗である。口縁部を外側に折り返す玉縁状口縁を呈する。

1702は白磁で、碗の底部と思われる。底部外面に削り出し高台がみられる。

## 第2項 第2地区

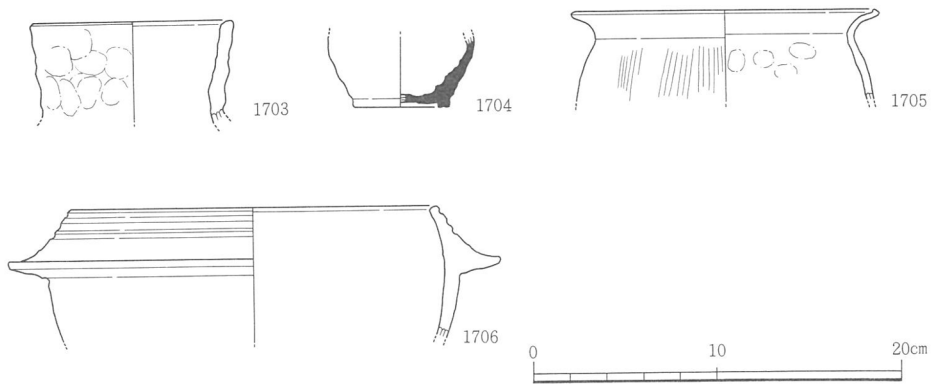
第2地区では、第4層の2.5Y5/2明灰黄色砂質シルトと、第5層のN3/暗灰色粘質土から遺物が出土したが、検出した遺構の数の多さにくらべて包含層からの遺物出土量は少なく、図示し得たものも少量であった(第326図1703～1706)。

1703は製塩土器で、口縁部のみの破片である。いわゆる砲弾形を呈するものと思われる。第4層から出土した。

1704～1706は第5層から出土したものである。

1704は須恵器で瓶子と思われる。底部外面周縁付近に貼付高台を付す。

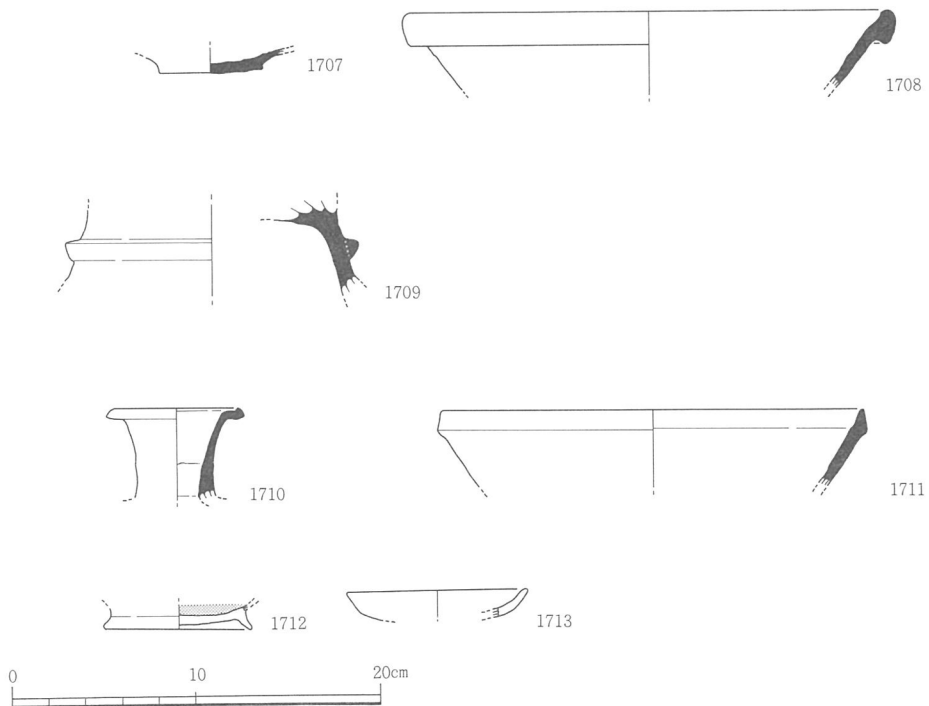
1705は土師器の甕である。体部下半を欠損しているが、球状に近い体部と思われる。口縁部は低く外上方へのびる。端部を内側に曲げ込んでいる。



第326図 第2地区包含層出土遺物

1706は土師質の羽釜である。体部上半以上の破片である。口縁部は短く内傾する。口縁部外面に段をなす。体部上端に比較的幅広の鏝を付す。内・外面ともにヘラケズリを施している。

第3項 第3地区



第327図 第3地区包含層出土遺物



第3地区では、第3層の5 Y6/3オリーブ黄色+10Y R6/8明黄褐色砂質シルトと、第4層の2.5 Y5/2明灰黄色砂質シルトから遺物が出土したが、その数量は非常に少なく、図示し得たものも7点にすぎない（第327図1707～1713）。

1707～1709は第3層から出土したものである。

1707は須恵器で、椀と思われる。底部のみの破片である。底部外面に糸切り痕が明瞭に残る。

1708は須恵器で、鉢と思われる。口縁部のみの破片である。端部が上下に肥厚する。

1709は須恵器で、台付円面硯の破片と思われる。硯部と台部の接続部付近のみの破片で、小片のため全体の形状などは不明である。外端に突帯を1条めぐらしている。

1710～1713は第4層から出土したものである。

1710は須恵器で、壺の口縁部である。口縁の立ち上りがわずかに外反しつつ上方へのび、端部付近で外側に短く屈曲して終る。

1711は須恵器で、鉢の口縁部である。

1712は黒色土器A類で、椀の底部と思われる。外面に比較的高い貼付高台を付す。

1713は瓦器の小皿である。底部を欠損している。口縁の立ち上りが低く、短く外上方へのびる。

#### 第4項 第4地区

第4地区では、第3層の5 Y6/3オリーブ黄色+10Y R6/8明黄褐色砂質シルト、第4層の2.5 Y5/2明灰黄色砂質シルト、第5層のN3/暗灰色粘質土などから比較的まとまった量の遺物が出土したが、そのうち代表的なもの31点をここにあげた（第328図1714～第329図1744）。

1714～1718は第3層から出土したものである。

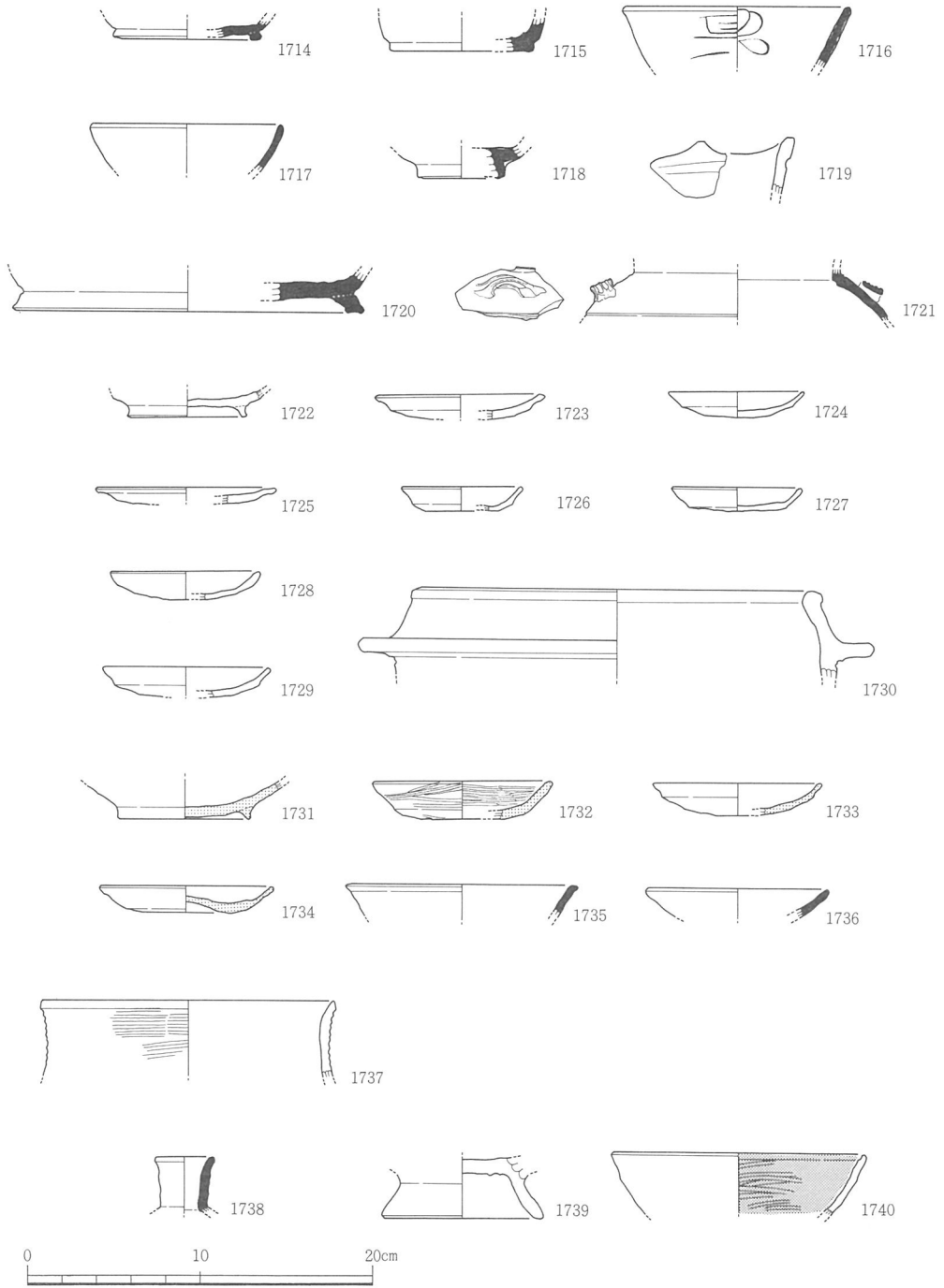
1714は須恵器の杯で、底部のみの破片である。平らな底部で、外面周縁付近に貼付高台を付す。

1715は緑釉陶器で、杯ないしは鉢と思われる。底部外面に糸切り痕が残る。

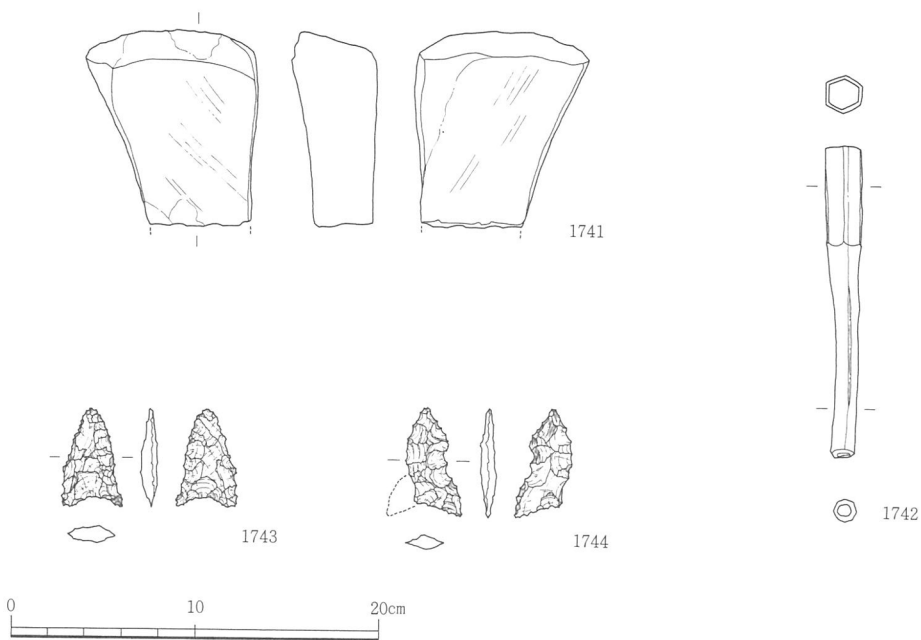
1716～1718は青磁の碗で、竜泉窯系の製品である。

1719～1737は第4層からの出土遺物である。

1719は縄文土器である。深鉢の口縁部と思われるが、全体の形状などは不明である。波



第328图 第4地区包含層出土遺物(1)



第329図 第4地区包含層出土遺物(2)

状口縁で、外面に沈線が1条めぐらされている。

1720は須恵器で、壺の底部と思われる。平らな底部で、外面周縁付近に貼付高台を付す。

1721は青磁で、壺の破片と思われる。体部上半のみの破片で、全体の形状などは不明である。体部上端付近外面に把手を付している。

1722は土師器の碗で、底部のみの破片である。外面周縁付近に貼付高台を付す。

1723～1729は土師器の小皿である。やや丸みを持つ底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびるもの(1723, 1724, 1729)、平らな底部で、口縁の立ち上りがごく低く、外方へのびるもの(1725)、平らな底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびるもの(1726, 1727)などがある。

1730は土師質の羽釜である。体部上端以上の破片で、口縁部がわずかに内傾する。体部上端外面に肉厚の鐙を付す。

1731は瓦器の碗である。底部のみの破片で、外面周縁付近に貼付高台を付す。

1732～1734は瓦器の小皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびるもの(1732, 1734)、比較的丸みを持つ底部で、口縁の立ち上りがごく短く外上方へのびるもの(1733)などがある。

1735は青磁で、碗の破片と思われる。口縁端部付近のみの小片で、全体の形状などは不

明である。竜泉窯系の製品と思われる。

1736は白磁で、小皿と思われる。口縁部のみの小片で、全体の形状などは不明である。

1737は製塩土器である。外面にタタキ目がみられる。

1738～1740は第5層からの出土遺物である。

1738は須恵器で、瓶子の口縁部である。口縁の立ち上りがまっすぐ上方へのびる。

1739は土師器で、脚付皿の破片と思われる。脚部のみの破片であり、全体の形状などは不明である。

1740は黒色土器A類の椀である。口縁部のみの破片で、口縁の立ち上りがわずかに内湾しつつ外上方へのびる。内面に密なヘラミガキ調整がみられる。

1741は砥石である。和泉砂岩製で、第3層からの出土遺物である。

1742は銅製の煙管である。吸い口部は円形で、雁首は六角形状の断面を呈する。第3層からの出土遺物である。

1743, 1744は無茎石鏃で、サヌカイト製である。1743は第4層, 1744は第5層からの出土遺物である。

## 第5項 第5地区

第5地区では、第4層の5Y6/3オリーブ黄色+10YR6/8明黄褐色砂質シルト、第5層の2.5Y5/2明灰黄色砂質シルト、第6層のN3/暗灰色粘質土などから比較的まとまった量の遺物が出土しているが、そのうち代表的なもの18点をここにあげた（第330図1745～第331図1762）。

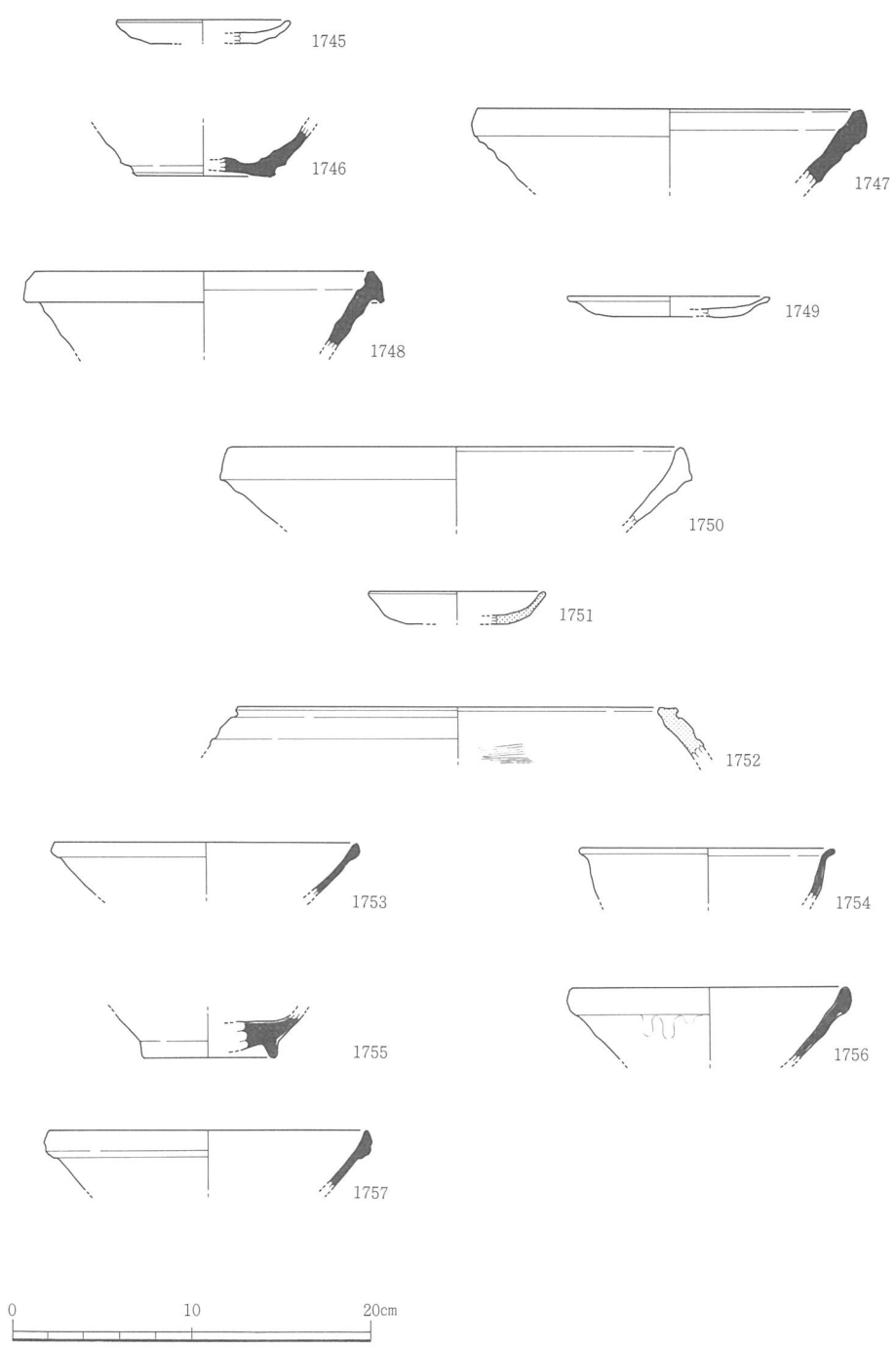
1745は第4層から出土したもので、土師器の小皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りが内湾しつつ外上方へ低くのびる。

1746～1757は第5層からの出土遺物である。

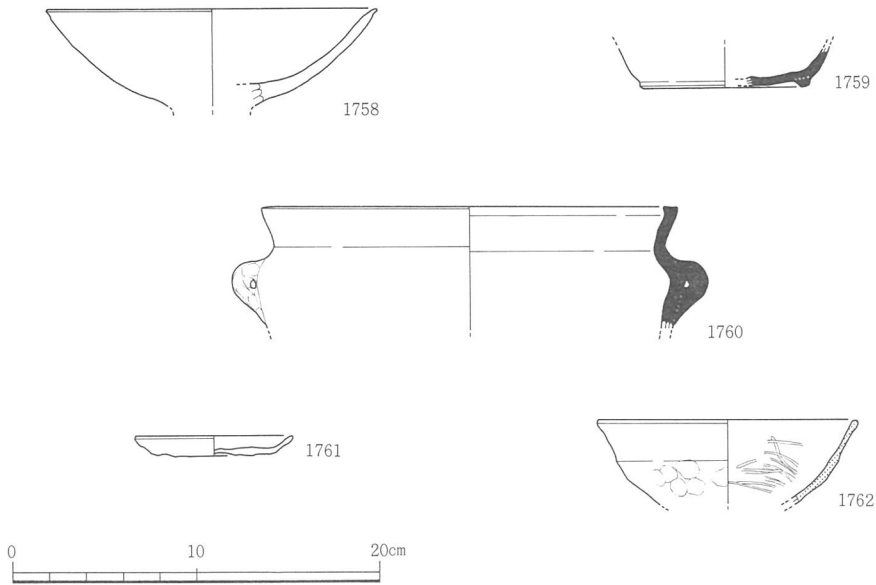
1746は須恵器で、杯の破片と思われる。底部外面に糸切り痕が明瞭に残る。

1747, 1748は須恵器の鉢である。ともに口縁部付近の破片で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。端部が肥厚するもの（1747）と、端部が上下に肥厚し稜をなすもの（1748）とがある。

1749は土師器の小皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りがごく低く、短く外上方へのびる。



第330图 第5地区包含層出土遺物(1)



第331図 第5地区包含層出土遺物(2)

1750は土師器の鉢である。口縁部付近のみの破片で、端部が上下に肥厚して稜をなす。

1751は瓦器の小皿である。わずかに丸みを持つ底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。

1752は瓦質土器で、羽釜の破片と思われる。口縁部のみの小片で、全体の形状などは不明である。

1753は青磁の碗である。口縁端部を外側へ折り返す玉縁状口縁で、同安窯系の製品と思われる。

1754も青磁の碗で、口縁端部が短く外反するものである。竜泉窯系の製品と思われる。

1755も青磁で、碗の底部と思われる。ごく肉厚のもので、底部外面に削り出し高台がみられる。竜泉窯系の製品と思われる。

1756は白磁の碗である。口縁端部を外側へ折り返す玉縁状口縁で、同安窯系の製品と思われる。

1757は青磁の碗である。口縁端部を外側へ折り返す玉縁状口縁のものである。1756同様に同安窯の製品と考えられる。

1758～1762は第6層からの出土遺物である。

1758は古式土師器の高杯である。いわゆる布留式土器に含まれるものである。

1759は須恵器の杯である。底部のみの破片である。平らな底部で、外面周縁付近に貼付

高台を付す。

1760は須恵器の鉢である。体部上端付近以上の破片である。体部は上端に最大径を持つ肩張りの形状を呈し、口縁の立ち上りがほぼ直立する。端部は上側に面をなす。体部上端外面に把手を付している。

1761は土師器の小皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りが低く、短く外上方へのびる。

1762は瓦器の椀である。底部を欠損している。比較的深い形状を呈しており、内面に荒いヘラミガキを施している。

## 第6項 第6地区

第6地区では、第3層の5Y6/3オリーブ黄色+10YR6/8明黄褐色砂質シルトと、第4層の2.5Y5/2明灰黄色砂質シルトから比較的まとまった量の遺物が出土しているが、そのうち代表的なもの18点をここにあげた（第332図1763～第333図1780）。

1763～1767は第3層からの出土遺物である。

1763～1766は須恵器の鉢である。いずれも口縁部の破片である。口縁の立ち上りはまっすぐ外上方へのびるが、端部の形状が、外側に丸みを持つ面をなすもの（1763）、外側に平らな面をなすもの（1764）、端部外面に稜をなすもの（1765）などがある。

1766は土師器の小皿である。非常に小型で、口縁の立ち上りがほとんどなく、円板の周縁がわずかに上反った形状を呈する。

1767は瓦器の小皿である。小さな平底の底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。

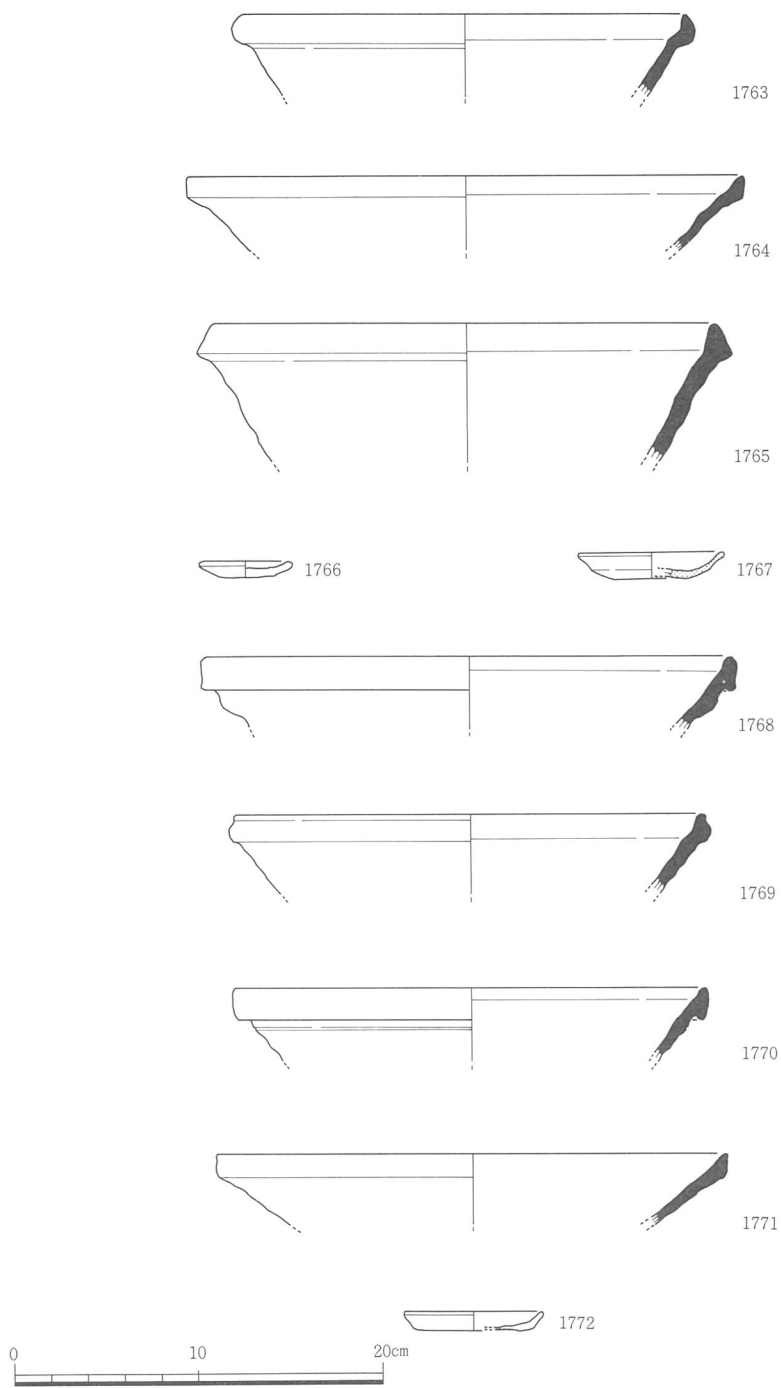
1768～1780は第4層からの出土遺物である。

1768～1771は須恵器の鉢である。口縁の立ち上りはいずれもまっすぐ外上方へのびるが、端部が上下に肥厚し、下端に稜をなすもの（1768～1770）と、端部外面に面をなすもの（1771）などがある。

1772は土師器の小皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りが短く外上方へのびる。

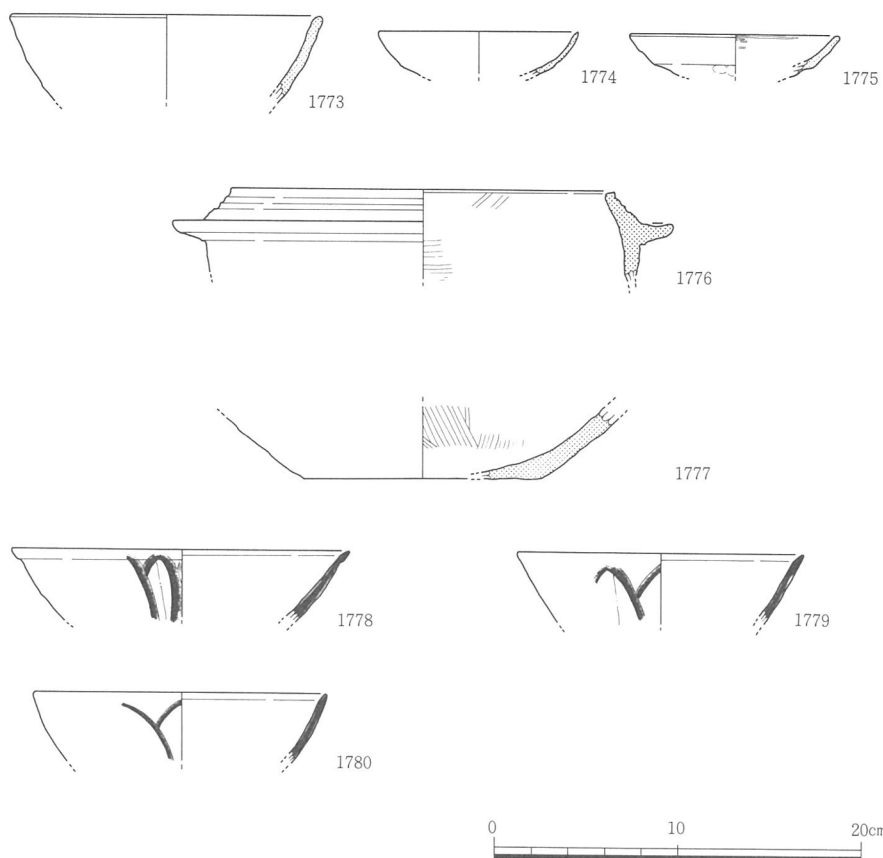
1773は瓦器の椀である。底部を欠損している。肉厚の器壁で、比較的深い形状を呈する。

1774、1775は瓦器の小皿である。口縁部のみの破片で、全体の形状などは不明だが、比較的丸みを持つものと思われる。



第332図 第6地区包含層出土遺物(1)





第333図 第6地区包含層出土遺物(2)

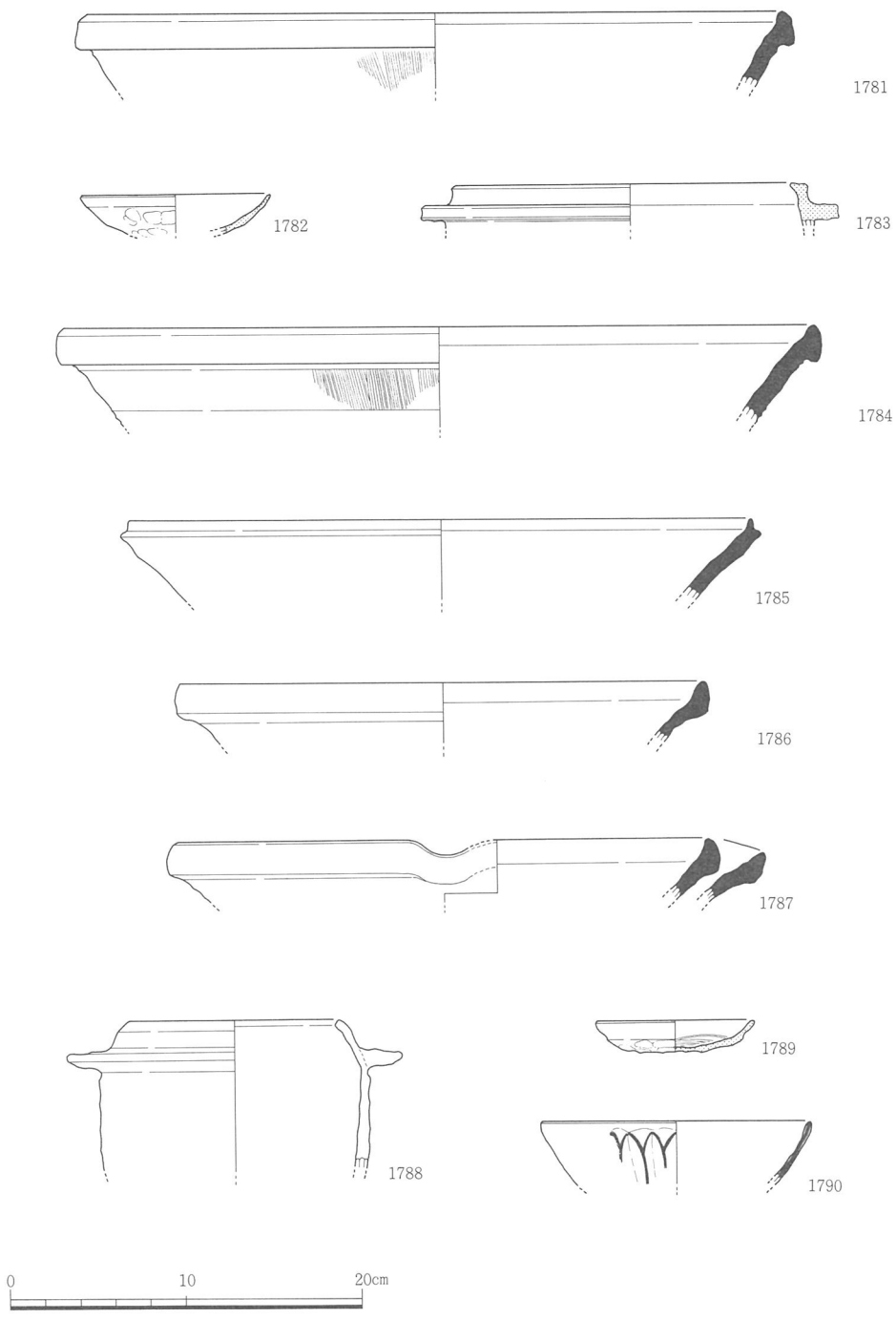
1776は瓦質土器の羽釜である。短く内傾する口縁部で、外面に段を持つ。体部上端付近外面に幅の狭い上反りの鏝を付している。

1777は瓦質土器で、搗り鉢の底部と思われる。平らな底部で、内面に櫛状の施文具による条線がみられる。

1778～1780は青磁の碗である。体部外面に鎬葉紋がみられる。竜泉窯系の製品と思われる。

#### 第7項 第7地区

第7地区では、第3層の5 Y6/3オリーブ黄色+10 Y R6/8明黄褐色砂質シルトと、第4層の2.5 Y5/6明灰黄色砂質シルトから遺物が出土したが、他の地区にくらべて包含層から



第334图 第7地区包含層出土遺物

の遺物出土量は極端に少なく、図示し得たのも10点にすぎなかった（第334図1781～1790）。

1781～1783は第3層からの出土である。

1781は須恵器で、甕の口縁部と思われる。端部が上下に肥厚する。口縁部外面にハケ目調整がみられる。

1782は瓦器の小皿である。底部を欠損しているが、比較的丸みを持つ底部と思われ、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。全体的に丸みを持つ形状を呈する。

1783は瓦質土器の羽釜である。口縁部付近の小片である。口縁の立ち上りがごく短く、わずかに内傾する。端部を内側に軽くつまみ出し、上側に面をなす。体部上端に幅の狭い肉厚の鑿を付している。

1784～1790は第4層からの出土である。

1784は須恵器の甕で、口縁部の破片である。口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。端部が上下に肥厚する。口縁部外面にハケ目調整がみられる。

1785～1787は須恵器の鉢である。いずれも口縁部付近の破片である。

1785は口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびるもので、端部は外側に面をなす。面の中央部に凹みが生じている。いわゆる東播系須恵器である。

1786、1787は端部が上下に肥厚するもので、1787は片口状を呈する。

1788は土師器の羽釜である。復元口径11cmと小型である。体部は下半から中位が直立し、上半は内傾する。口縁部はごく短く、内傾して終る。体部上端に幅広で肉厚の鑿を付す。

1789は瓦器の小皿である。比較的丸みを持つ底部で、口縁の立ち上りが短く、まっすぐ外上方へのびる。内面に連続圏線状暗文がみられる。

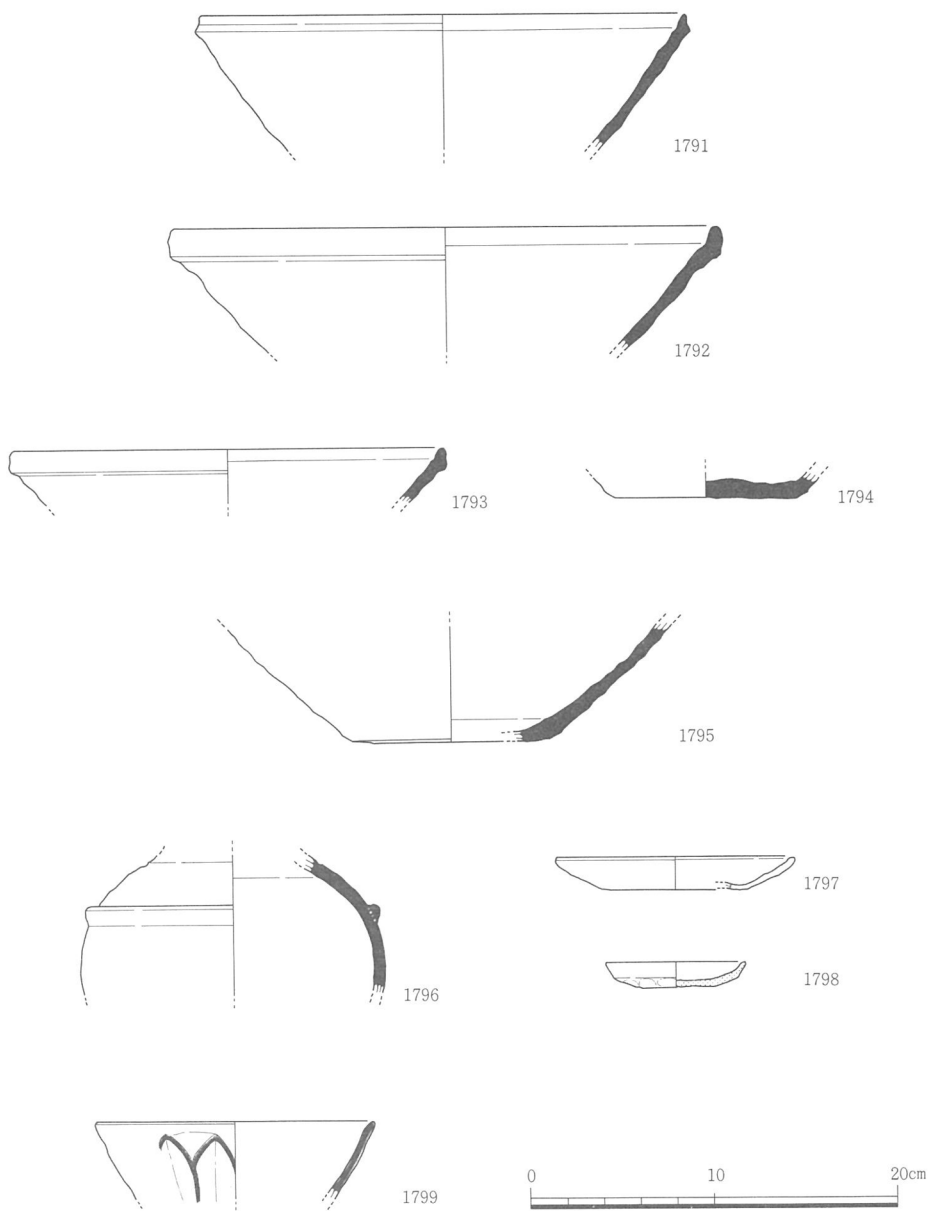
1790は青磁の碗である。体部外面に鑄葉紋がみられる。竜泉窯系の製品である。

## 第8項 第8地区

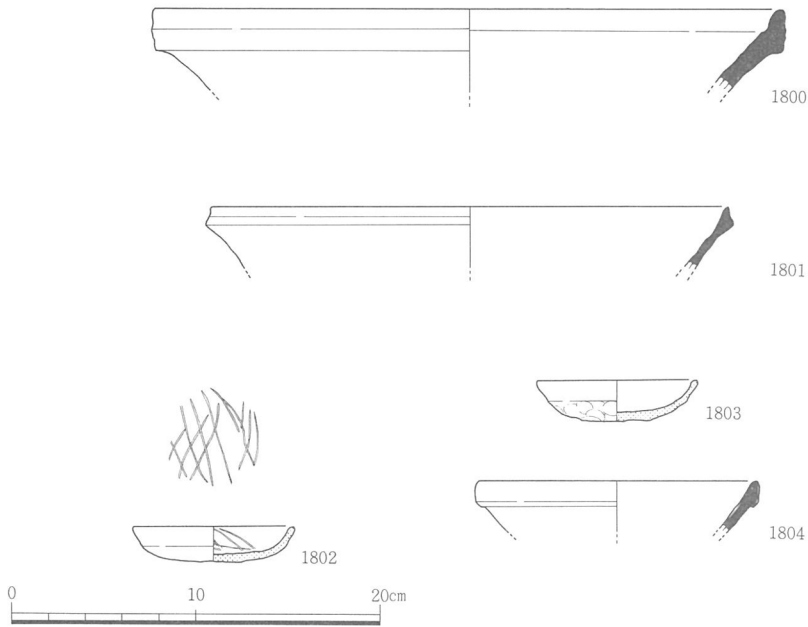
第8地区では、第4層2.5Y5/2明灰黄色砂質シルトと、第5層5Y8/3淡黄色粘質シルトから比較的まとまった量の遺物が出土した。そのうち代表的なもの14点をここにあげた（第335図1791～第336図1804）。

1791～1799は第4層からの出土である。

1791～1795は須恵器の鉢である。そのうち1791は口縁の立ち上りがまっすぐ外上方への



第335图 第8地区包含層出土遺物(1)



第336図 第8地区包含層出土遺物(2)

びるもので、端部は外側に面をなす。面の中央部にわずかに凹みが生じている。東播系須恵器である。

1792, 1793はともに口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのび、端部が上下に肥厚するものである。

1794, 1795は底部付近の破片である。平らな底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。

1796は須恵器で、壺の体部と思われる。球形に近い体部で、中位外面に断面三角形の貼付突帯を付している。

1797は土師器の皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。

1798は瓦器の小皿である。比較的丸みを持つ底部で、口縁の立ち上りがごく短く、外上方へのびる。

1799は青磁の碗である。体部外面に鎬葉紋がみられる。竜泉窯系の製品である。

1800～1804は第5層からの出土である。

1800, 1801は須恵器の鉢で、ともに口縁部付近の破片である。そのうち1800は口縁の立ち上りがわずかに外反しつつ外上方へのび、端部は上方に肥厚し、下部に稜を持つ。

1801は端部が外側に面をなすもので、面の中央にわずかに凹みが生じている。東播系須

恵器と思われる。

1802, 1803は瓦器の小皿である。ともに比較的丸みを持つ底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方にのびる。1802は見込みに斜格子状暗文が施されている。

1804は青磁の碗である。口縁部のみの破片で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。端部を外側に曲げ込む、いわゆる玉縁状の口縁を呈する。同安窯系の製品と思われる。

## 第V章 まとめ

### 第1節 遺構の検討

今回の調査により出土した遺物の中には、縄文時代あるいは弥生時代のものと考えられる土器片が数片含まれている。しかし、これらの遺物は中・近世の包含層に混入していたもので、今回の調査地区内では縄文時代・弥生時代に属する遺構はみられなかった。

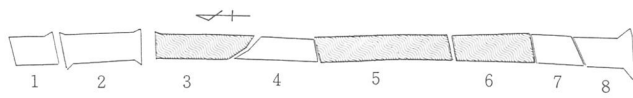
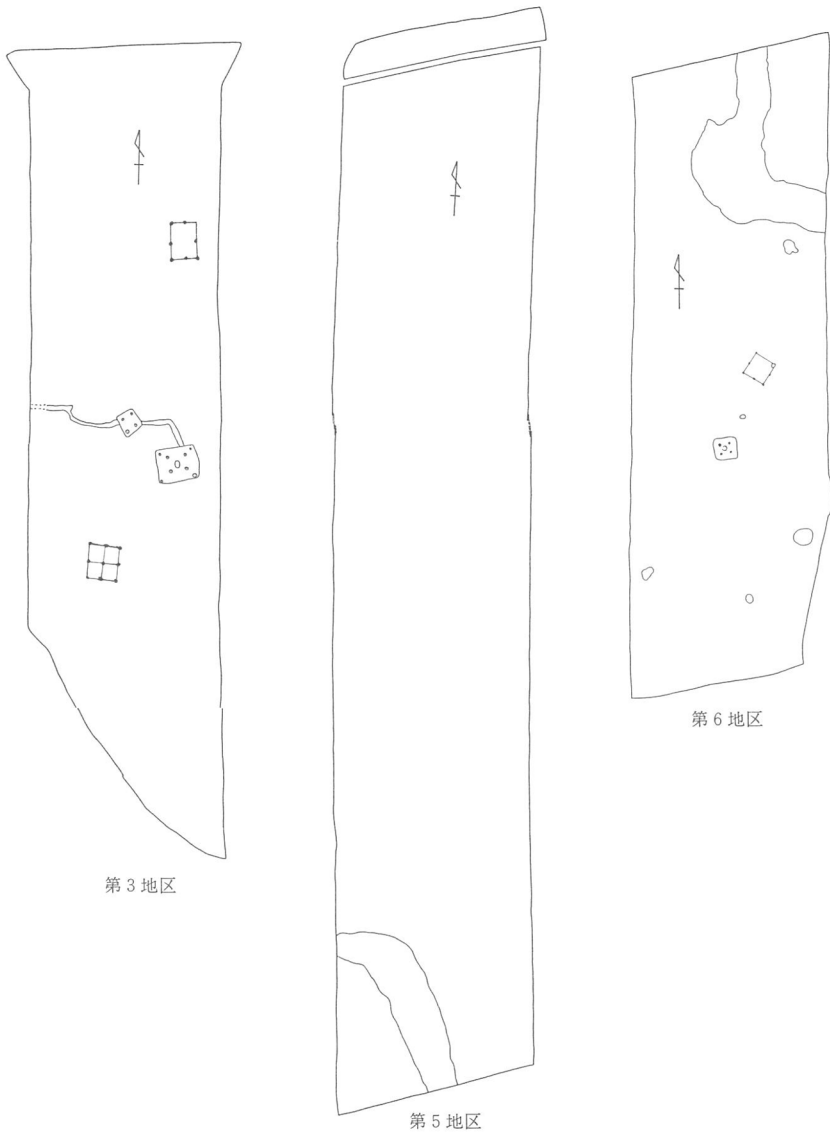
明確な遺構が出現するのは古墳時代になってからである。

今回の調査で検出した遺構のうち最も古い時期に比定できるものは、第3地区の1-OD, 2-OD, 13-OB, 14-OBからなる集落および第6地区の3-OD, 19-OB, 1-OH, 29-OO, 30-OO, 58-OPなどからなる集落である。第6地区の集落では、中心となる3-OD, 19-OBからは遺物がみられなかったが、周辺に存在する祭祀を行ったと思われる土坑30-OOなどから出土した土器によって、概ね5世紀初頭・布留2式(古)段階に比定できた。又、第3地区の集落についても、主要な遺構からは遺物がほとんど出土しなかったが、周辺から出土した土器によって、第6地区の集落とほぼ同時期のものと推定された。したがって、これらの集落は間に浅い谷をはさんで、直線距離にして約200m隔てた所で同時に存在していたものといえる。

竪穴住居をあわせて3棟検出されたが、そのうち室内に炉と考えられる遺構が検出されたのは2-ODのみである。また第6地区の集落には室外炉と考えられる1-OHが存在した。第3地区では、調査区内に室外炉と思われる遺構は検出されなかったが、調査区の近辺に室外炉が存在する可能性も考えられる。

第6地区の集落で検出された土坑29-OOからは布留式土器がまとまって出土したが、器種は壺と甕の2種類のみである。又、30-OOは浅い鍋状の土坑であるが、この内部からも布留式土器が一括して出土した。こちらの器種は小型丸底壺と小型器台に限られており、さらに、出土した小型丸底壺はすべて口縁部を欠損していた。これらの土坑は祭祀的意味合いを持つ土坑と考えられる。

山直谷に所在する遺跡では、谷入口部付近に所在する摩湯山古墳が古墳時代前期末に比定されるものとして知られており、又、摩湯山古墳のすぐ南に位置する三田遺跡からは、<sup>(1)</sup>



第337图 古墳時代前期遺構配置図



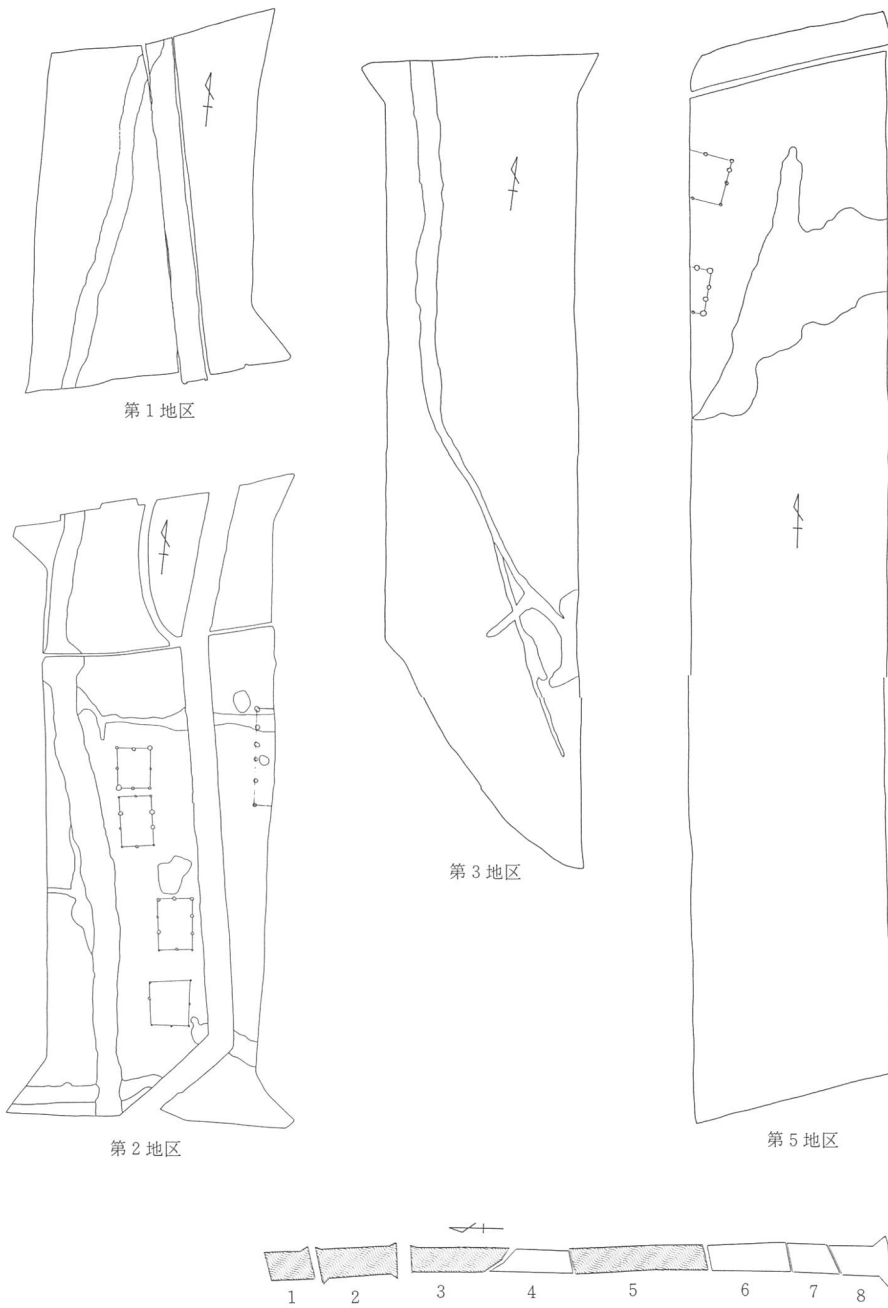
ほぼ同時期の土壙墓が165基検出されている。三田遺跡では土壙墓以外には同時期の遺構<sup>(2)</sup>が検出されていないが、付近に居住区域が存在するのは確実で、それもかなりの規模の集落が存在しているものと推定される。今回芝ノ垣外遺跡で検出した集落は、やや時代が下り5世紀初頭のものである。また竪穴住居数棟で構成される小規模な集落で、これは、山直谷では4世紀末頃には未発達ながらも谷入口部で開発行為が行われはじめ、5世紀初頭には約2 km奥の谷中央部付近でも集落が展開していたことを示すものである。しかしながら、両者の間では同時期の遺構・遺物はまったく検出されておらず、集落が展開して来るのは古墳時代後期になってからである。したがって、谷入口部では4世紀末頃から集落形成が始まっており、これは山直谷の開発の始まりを示唆するものといえるが、あくまでも谷入口部のごく限られた地域の事で、山直谷の本格的な開発をうかがわせるまでには至っておらず、谷入口部の広い範囲で集落が形成され、谷筋の本格的な開発が開始されるのは6世紀後半～7世紀の段階と思われる。なお、芝ノ垣外遺跡の所在する山直谷中央部では、古墳時代前期の集落が単発的にはみられたが、古墳時代後期の段階でもまだ開発をうかがわせる十分な例証は得られていない。山直谷中央部付近で、谷筋の本格的な開発行為が始まるのは奈良時代になってからである。

今回の調査では、奈良時代の遺構が検出された地域が2ヶ所みられた。

第3地区の南半部から第1地区にかけての地区を、蛇行しつつ南北に縦断する大溝が存在し、そのうちの第2地区の中央部から南半部で、大溝の東側にひろがる集落が検出された。この集落は5間の規模を持つ大型の掘立柱建物5-OBを中心とし、5棟以上の掘立柱建物・溝・土坑などで構成されるもので、8世紀中頃に比定される。

第5地区の北半部西端付近でも、掘立柱建物が2棟検出された。これらの建物は調査区の西壁外へひろがる様相を呈しており、今回の調査では、集落の東端部のごく一部を確認したにすぎないものと思われる。したがって集落の規模などはまったく解明できないのが現状で、第2地区の集落との関連を論ずるにはまったくの資料不足である事は否めない。今後の周辺の調査による成果を待ちたい。

奈良時代の遺構のうち、最も注目すべきものは大溝1-OSである。1-OSは第3地区の南半部から中央部を南東から北西に走り、第3地区北半部で北へ折れ、その後蛇行しつつ北流する。第2地区、第1地区を縦断して山直中遺跡へと続いており、山直中遺跡では第III区から第II区へ北流し、第I区の開析谷に達している。この大溝は、幅1.5m～3<sup>(3)</sup>



第338图 奈良時代遺構配置図

m, 深さ1.2m～1.8mで, V字形の断面を呈しており, 山直谷東縁の尾根筋にそって, 多大な労働力を投入して掘削されている。大溝は付近の耕土開発に伴う灌漑用水路と考えられ, この大溝の存在により, 谷中央部における生産性が飛躍的に拡大し, その結果, 芝ノ垣外遺跡の集落のようにながりの規模を持つ集落が出現してくる。集落の規模は, 調査範囲のみではその全体像は解明できなかったが, 集落付近の1-O Sから出土した須恵器・土師器・製塩土器などの出土量の膨大さからみて, かなり大規模な集落であったと推定できる。その他に山直谷において奈良時代の集落が検出されている遺跡には, 谷入口部の山直北遺跡があるが, 谷中央部では今回の検出例が初現のものである。この集落は, 当時の地方行政単位である郷のうちの「山直郷」に属する集落のひとつであり, 現段階では山直郷内の中核をなす集落のひとつであったといえよう。

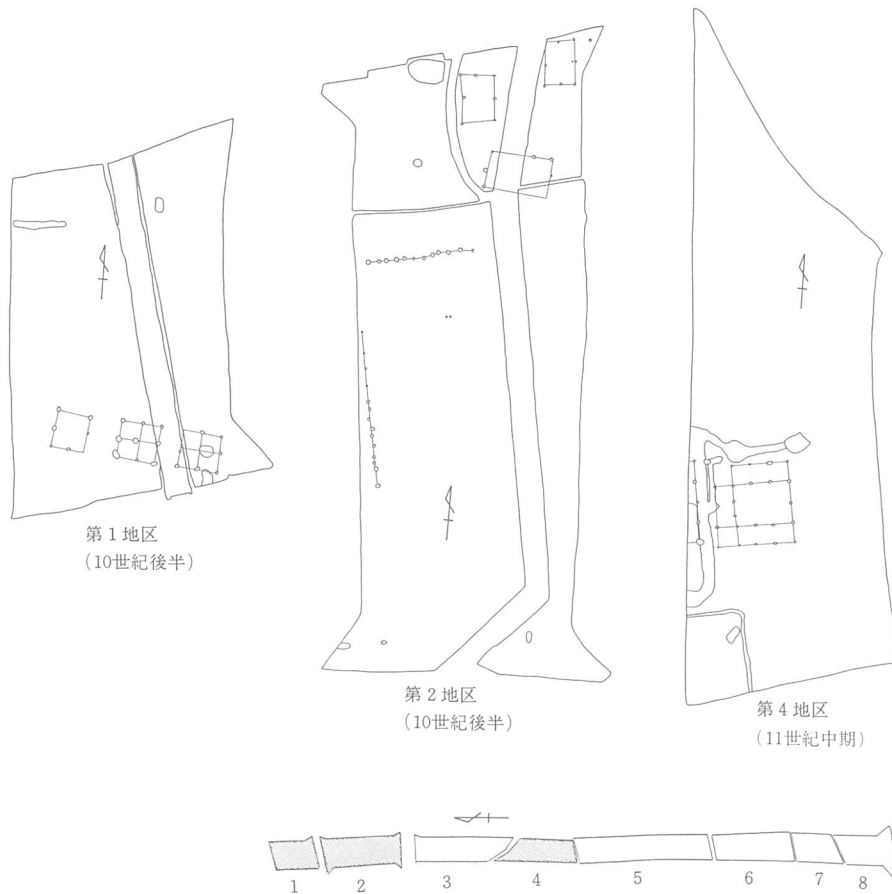
また, 第5地区における集落については, 検出範囲がごく限られたものであり, ほぼ同時期に併存した第2地区の集落との関連を論ずるには現状では資料不足である。ただ, この遺構が検出された事によりさらに谷の奥部に同時期の集落がひろがっている事が判明し, 今後, 未調査の土井ノ木遺跡をはじめとする, より奥部に所在する遺跡でも同様の遺構が検出される可能性がうかがわれる。

平安時代には, 山直谷の開発も一定の水準に達していたものと推定されるが, それを裏付けるように多くの遺構・遺物が検出された。

第1地区南半部から第2地区にかけての地域で, 掘立柱建物7棟・柵列・井戸・土坑などからなる10世紀後半の集落が検出された。7棟の掘立柱建物のうち4棟は, 総柱で倉庫と思われる。井戸を中心に住居・倉庫などを配置した集落構造がうかがわれ, これが当時の一般的な農村の集落構成をあらわしているものといえる。

第4地区の南半部で, 掘立柱建物2棟・土坑・溝などからなる11世紀中頃の集落が検出された。掘立柱建物は2棟が東西に並んだ状況を呈しているが, 西側の15-O Bは平面プランの大部分が調査区外にあり, 全体の形状などは不明である。東側の16-O Bは2間×3間の規模で, 3面に庇を持つ構造を呈していた。

この集落は, 集落域の東端のごく一部分が検出されたものにすぎず, 調査区の西側は古曾谷川に至るまで約50m幅で平坦面が広がっており, 集落は西側へかなりのひろがりを見せるものと推察される。

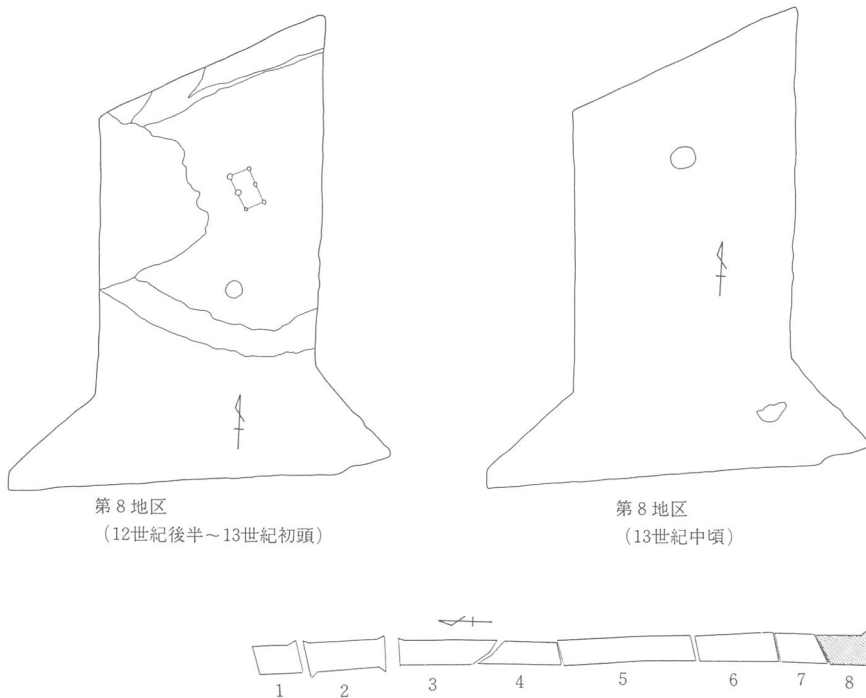


第339図 平安時代遺構配置図

第1地区から第2地区で検出した集落と比べて、建物の構造、遺物の出土量などでかなりの開きがみられ、格段の発展をうかがわせる様相を呈しているといえる。

山直谷付近では、11世紀前半頃には条里制が施行されていたと考えられるが、条里制施行に伴って耕地開発や水利施設の整備なども一段と進歩し、それらを要因とする生産力の増加がみられ、その結果が集落の建物構造などにも変化をもたらしたものと見えよう。

平安時代末から鎌倉時代初頭にあたる12世紀後半～13世紀初頭には、今回の調査区のうち最も南側の第8地区で遺構がみられ、土師器・瓦器を中心とする多量の遺物が出土した。検出された遺構には掘立柱建物・溝・池・自然河川などがある。これらは一単位の集落



第340図 平安時代末～鎌倉時代遺構配置図

を構成する遺構と考えられ、遺構の検出状況からみて、この地域は集落の北端部にあたり、集落の中心はさらに南ないしは南東にひろがるものと考えられる。

第2地区の土坑16-〇〇は、出土遺物から第8地区の20-〇B・1-〇Lなどほぼ同時期のものといえる。今回の調査では単独で検出されたのみであるが、過去の調査で北東方のごく近い地域に13世紀頃の掘立柱建物が複数検出されており、それらとの関連が想定される。

第8地区では、平安時代末から鎌倉時代初頭の遺構面の上に鎌倉時代前半の遺構面が存在し、土坑が検出された。又、この面では検出できず、第2面の精査の段階で確認されたが、井戸2-〇Wはこの遺構面に属する遺構と考えられる。

2-〇Wは13世紀前半のもので、現段階では泉州地域で最も古い時期に比定される石組井戸として注目すべきものといえる。

## 第2節 出土遺物の検討

### 第1項 1-O S出土の奈良時代土器の検討

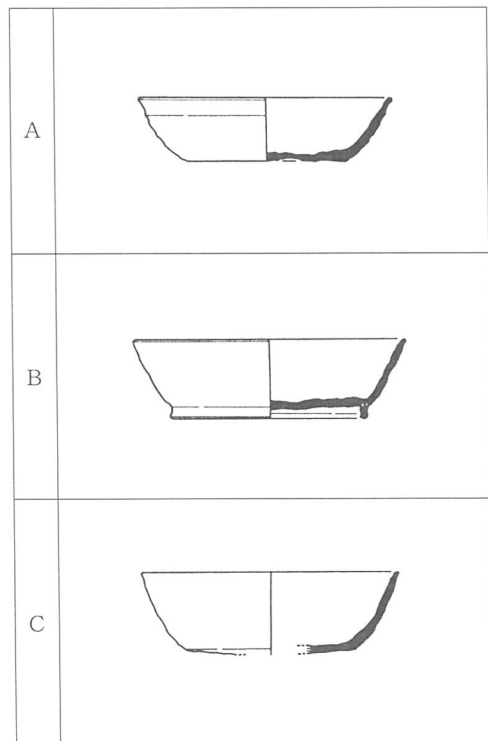
1-O Sは芝ノ垣外遺跡の第3地区から北流し、第2地区、第1地区をへて山直中遺跡第III区、第II区に至る検出長200m以上の大溝であり、内部から多量の土器が出土している。しかし、土器がまとまって出土したのは、芝ノ垣外遺跡第1地区南半部から第2地区にかけてに限られ、これは周辺で検出された同時期の集落の範囲と密接な関係を持つものといえる。すなわち、集落のごく近い地点にのみ多量の土器がみられ、その範囲外ではほとんど遺物がみられないのである。さらに、大溝1-O Sの性格は谷開発に伴う灌漑水路であり、1-O Sは相当期間機能し続けていたと考えられる。又、遺物の出土状況からみて、これらの遺物は、大溝の掘削時のものではなく、一定期間を経た後に成立した集落に伴う生活用の供膳土器・煮沸土器などといえる。さらに、これらの土器は大溝廃絶時に一度に大量投棄されたもので、良好な一括資料となりうるものといえる。

#### 1. 出土土器の器種概略

今回1-O Sから一括出土した土器は第1地区・第2地区あわせてコンテナ80箱ほどにもなり、良好な一括資料となるものである。ただし、残念なことに周辺では時期比定の参考となるような奈良時代の須恵器・土師器の一括資料は得られていない現状にある。したがって、ここでは奈良時代の土器の編年体系の確立が最も進んでいる奈良平城宮跡の類例にそってまとめてみる。<sup>(4)</sup>

#### <須恵器>

須恵器には供膳の用途を持つ杯・杯蓋・皿・皿蓋・椀・高杯、貯蔵の用途を持つ甕・鉢・壺・壺蓋・横瓶などがみられた。



第3表 須恵器杯形態分類表

## 杯

杯は3つの形態に分類できた。

杯A 平坦な底部と、外上方にまっすぐのびる口縁部からなるもの。高台を持たない。(212他)：平城宮杯A。

杯B 杯Aと同様の形態で、底部外面周縁付近に貼付高台を付すもの。杯蓋と一対となる(238他)：平城宮杯B。

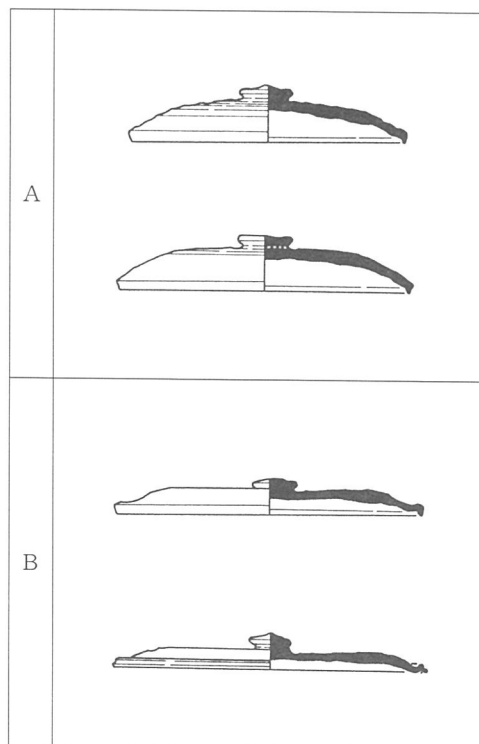
杯C 平底の底部と、内弯しつつ立ち上る口縁部からなる銅鉢形の形態(206)：平城宮杯E。

## 杯蓋

杯蓋は2つの形態に分類できた。

杯蓋A 頂部が丸く笠形状を呈し、縁部が屈曲せず弯曲気味に端部に至るもの。頂部中央に擬宝珠つまみを付す(163, 164)。：平城宮杯蓋B形態。

杯蓋B 平らな頂部で、縁部が屈曲するもの。頂部中央に擬宝珠つまみを付す(178, 179)。：平城宮杯蓋A形態。

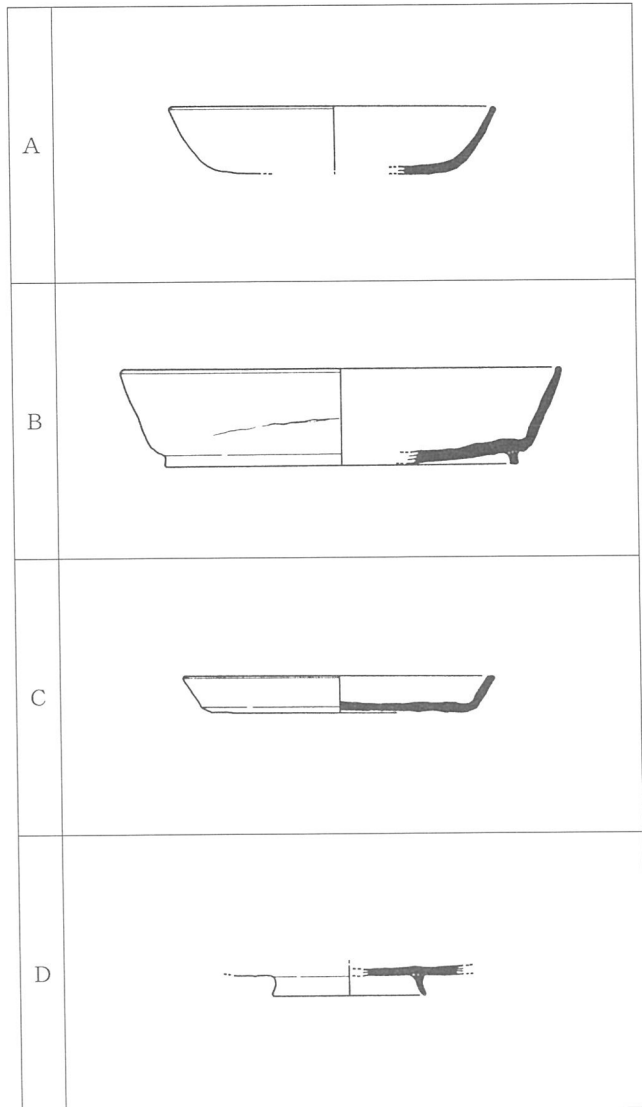


第4表 須恵器杯蓋形態分類表

## 皿

皿は4つの形態に分類できた。

皿A 平らな底部で、口縁の立ち上りが比較的高く、まっすぐ外上方へのびるもの。杯Aと類似する形態(279)。：平城宮皿A。



皿B 皿Aに貼付高台を付すもの。杯Bと類似する形態(24, 271)。：平城宮皿B。

皿C 広く平らな底部と短く外上方にのびる口縁部からなるもの(280, 281)。：平城宮皿C。

皿D 皿Cに貼付高台を付すもの(30)。：平城宮皿D。

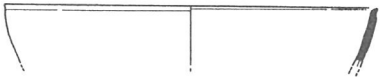
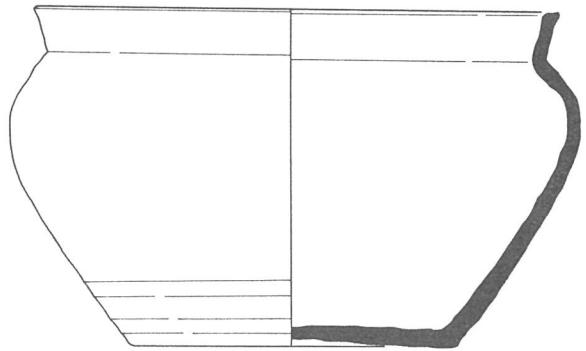

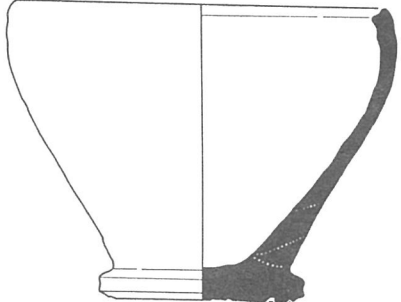
第5表 須恵器皿形態分類表

### 鉢

鉢は4つの形態に分類できた。

鉢A 尖底ないしは丸みをおびた尖底の底部と内湾しつつ立ち上る口縁部からなるもの。いわゆる鉄鉢形態(315)。：平城宮鉢A。



A	
B	
C	
D	

第 6 表 須惠器鉢形態分類表

鉢B 平底の底部で、上位で肩の張る体部と外反する短い口縁部からなるもの。高台を持つものと持たないものがある（48, 49, 317）。：平城宮鉢D。

鉢C 平底で、長い口縁部が直立気味に高く外上方へのびるもの。いわゆるバケツ形（316）。：平城宮鉢E。

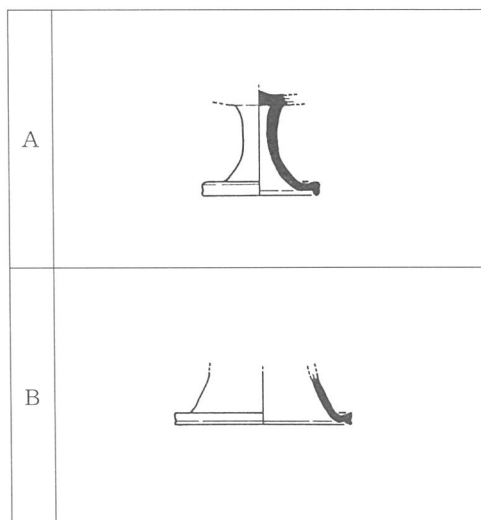
鉢D 円盤状を呈する底部で、体部下半が外上方にのび、上半で弯曲しつつ内傾するもの（51）。平城宮鉢Fに類似するが、口縁の形状に特徴がある。

### 高杯

高杯は2つの形態に分類できた。

高杯A ラップ状に開く低い脚部。皿状の杯部が付く（319）。

高杯B ラップ状に開く大きく高い脚部。皿状の杯部が付く（52）。



第7表 須恵器高杯形態分類表

### 甕

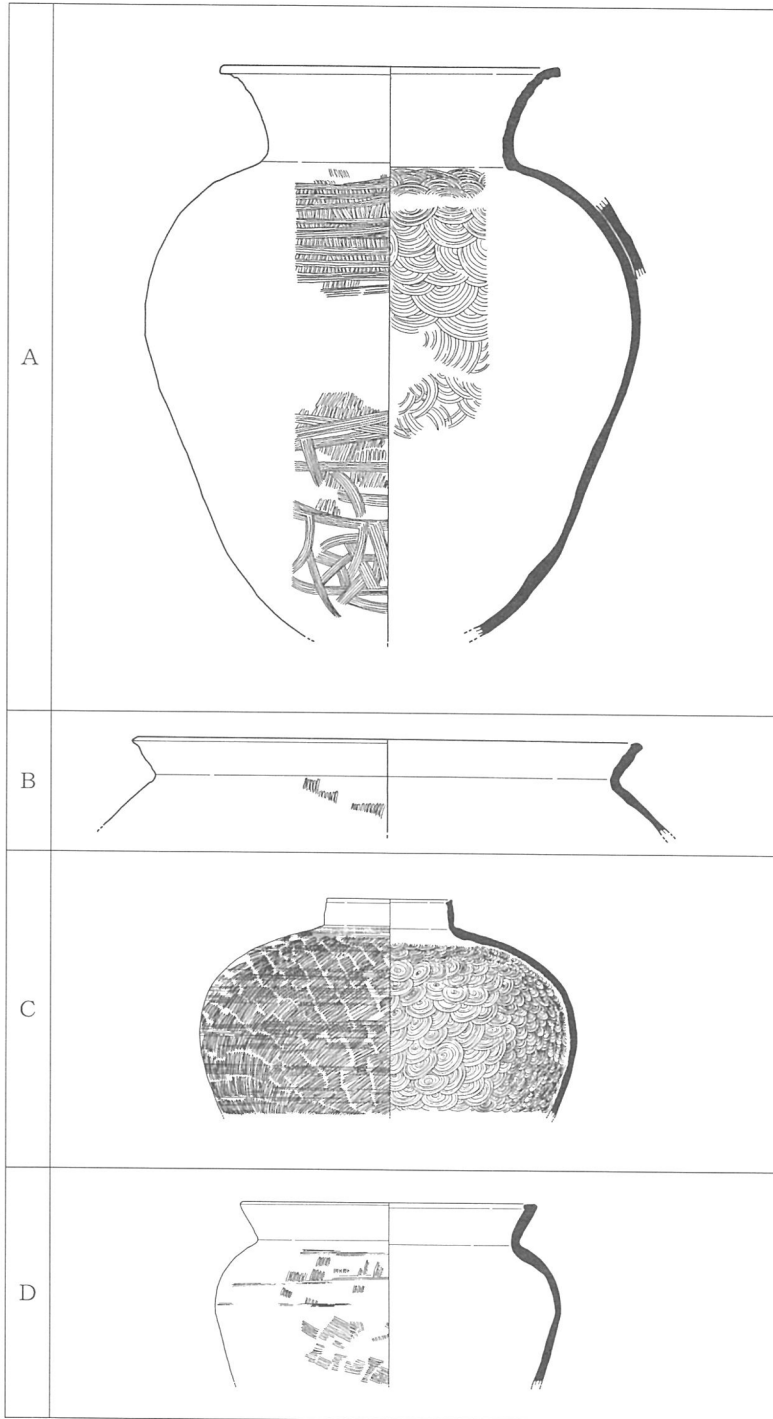
甕は4つの形態に分類できた。

甕A 卵形の体部に外反する口縁部を付したもの（282, 283）。平城宮甕A。

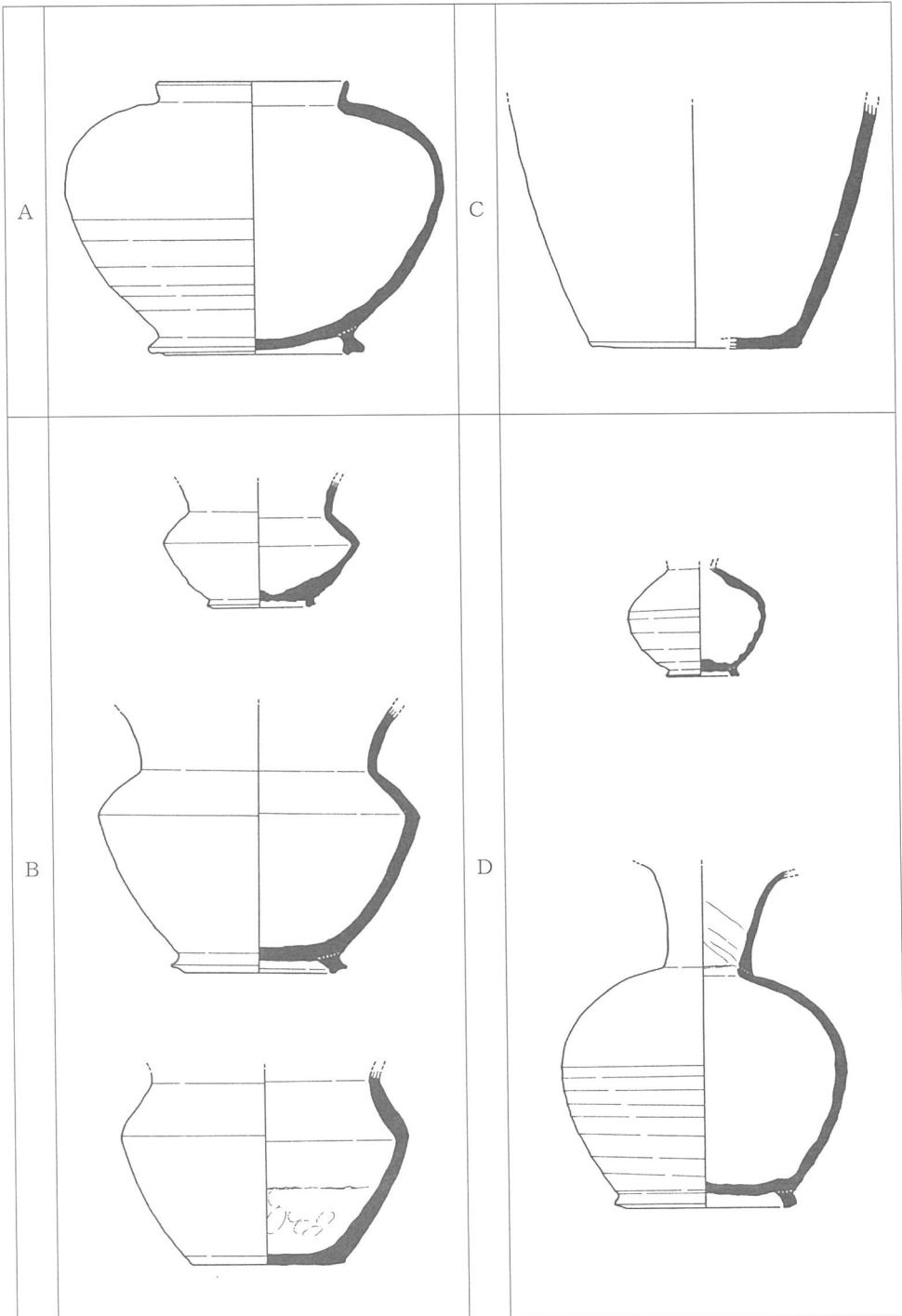
甕B 卵形の体部に外上方にまっすぐのびる口縁部を付したもの（284, 285）。

甕C 卵形の体部に短く直立する径の小さい口縁部を付したもの（35）。

甕D 肩の張った体部に広口短頸の口縁部を付けたもの（286）。：平城宮甕C。



第 8 表 須惠器甕形態分類表



第9表 須惠器壺形態分類表

## 壺

壺は4つの形態に分類できた。

壺A 短頸壺で、体部上半がやや丸みを持つもの（44, 291, 292）。：平城宮壺A。

壺B 広口壺で、肩部が稜角をなすもの。大きく外反する広口の口頸部を付す（294, 295, 298）。高台を付すものと付さないものがある。：平城宮壺Q。

壺C 平底で、外上方に立ち上る体部のもの。長胴の形態（46）。

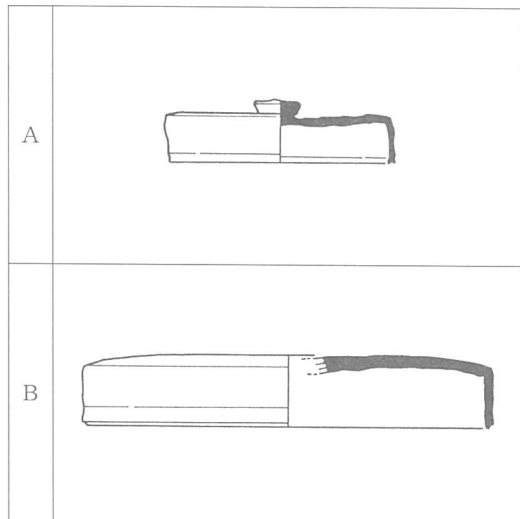
壺D 卵形の体部に外反する口縁部を付したもの。長頸壺である（39, 301, 303）。：平城宮壺L。

## 壺蓋

壺蓋は2つの形態に分類できた。

壺蓋A 平坦な頂部と直角に折れ曲る縁部からなるもの。頂部に擬宝珠あるいは扁平ボタン状のつまみが付く（289）。

壺蓋B 壺蓋Aと同じ形状を呈するが、大型でつまみが付かないもの（290）。

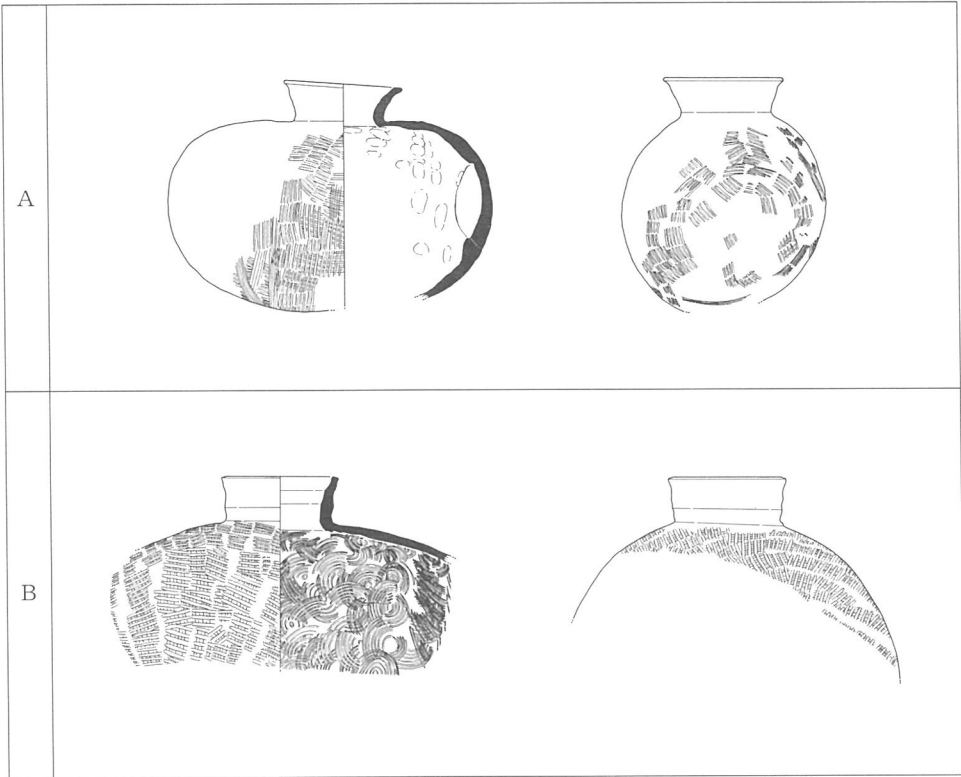


第10表 須恵器壺蓋形態分類表

## 横瓶

横瓶は2つの形態に分類できた。

横瓶A 横に長い俵形の体部上面中央付近に、外反する口縁部を付けたもの



第11表 須恵器横瓶形態分類表

(313)。

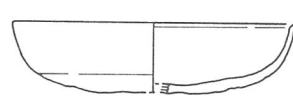
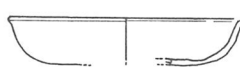
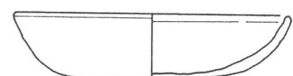
横瓶B 体部の形状は横瓶Aとはほぼ同じであるが、口縁部が小さく、口縁の立ち上りが直立するもの。大型(314)。

<土師器>

土師器には杯・碗・皿・高杯・小型鉢など供膳の用途を持つもの、貯蔵の用途を持つと思われる大型鉢、煮沸の用途を持つと思われる羽釜・鍋などがあり、さらに土師質の製塩土器もみられる。

杯

杯は皿とともに供膳用土器の主流を占めるものであるが、個体数では皿が圧倒的に多く、杯は4形態23個を図示し得たのみである。

<p>杯A 小さな平底ないしは丸底の底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびるもの（326, 328）。：平城宮杯C。</p>	<p>A</p> 
<p>杯B 平底の底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。端部を外側へ軽くつまみ出すもの（332, 333）。</p>	<p>B</p> 
<p>杯C 小さな平底の底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。端部を内側に曲げ込むもの（335）。</p>	<p>C</p> 

第12表 土師器杯形態分類表

杯D 広い平底の底部で、口縁の立ち上りは下半が内弯しつつ外上方へのび、上半は外反する。端部は内側に曲げ込んでいる。口縁部内面に斜状暗文を施すものがある（337, 339）。：平城宮杯A。

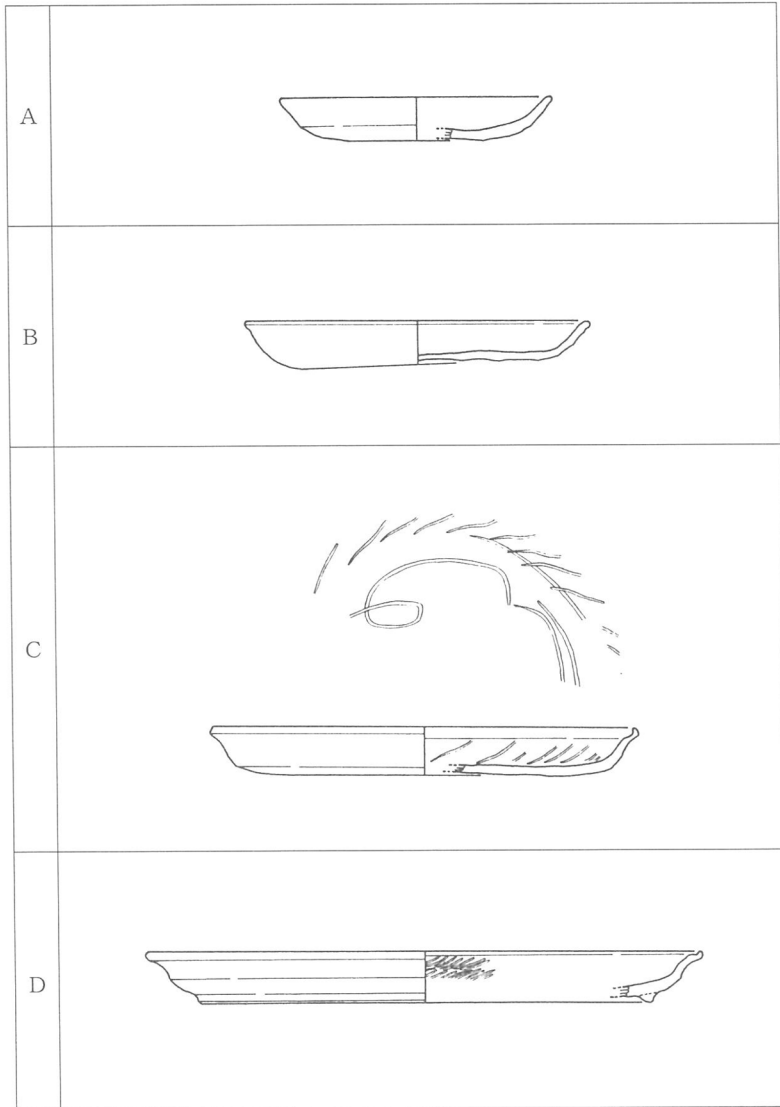
### 皿

皿は供膳用土器の大半を占めるもので、4形態に分類でき71点を図示し得た。

皿A 平底の底部。口縁の立ち上りがわずかに内弯しつつ外上方へのびる（56, 343）。：平城宮皿A。

皿B 平底の底部。口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。端部を外側へ軽くつまみ出す。口縁部内面に斜状暗文を施すものがみられる（349, 351）。

皿C 平底の底部。口縁の立ち上りが下半は内弯しつつ外上方へのび、上半は外反する。端部を内側へ曲げ込んでいる。口縁部内面に斜状暗文、見込みに連結輪



第13表 土師器皿形態分類表

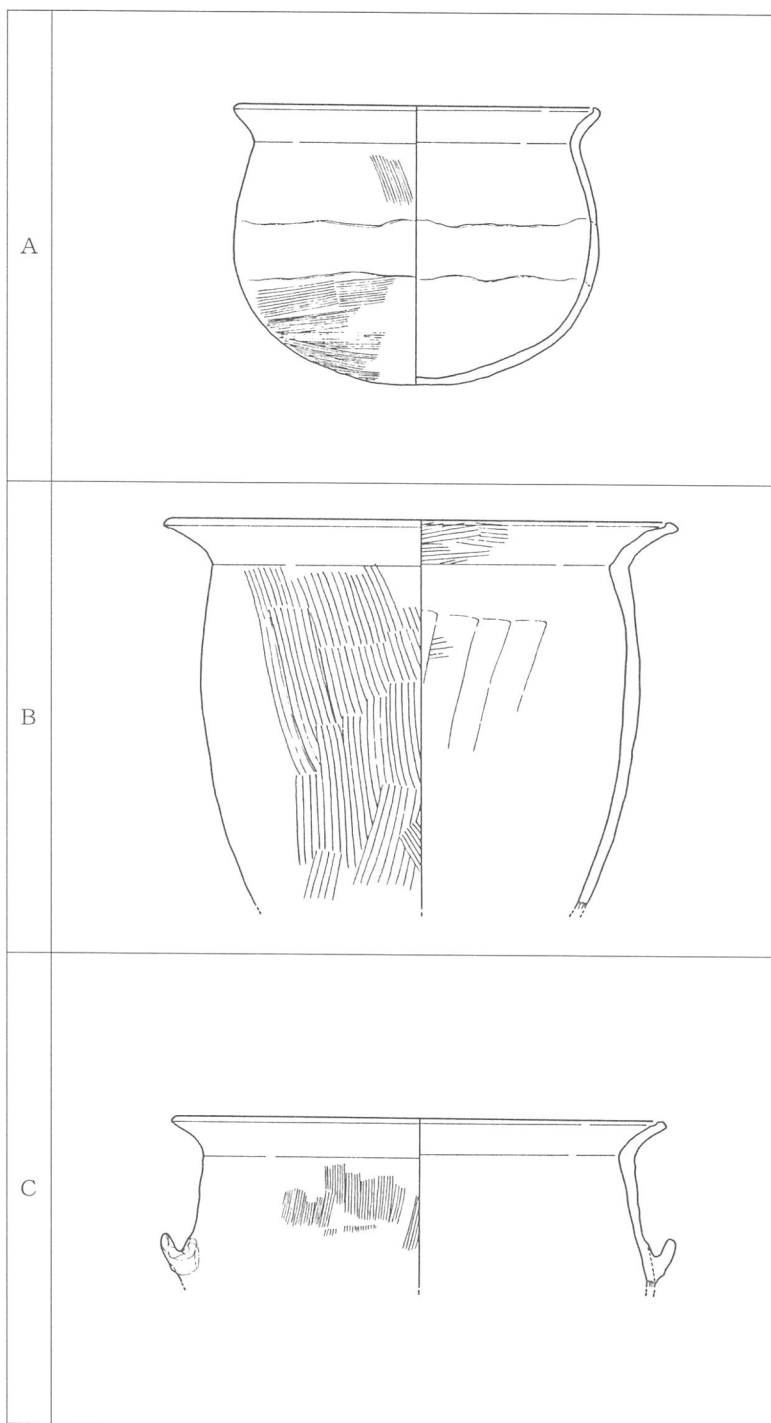
状暗文を施すものがある(375, 394)。：平城宮皿A。

皿D 皿Cに貼付高台を付したのもの。口縁部内面に2段の斜状暗文がみられる(406)。：平城宮皿B。

椀

今回出土した土師器の中には椀がほとんど含まれておらず、わずかに底部付近の小片が





第14表 土師器甕形態分類表

1片(340)みられるのみであった。

### 甕

甕は煮沸用土器の大部分を占めるもので、今回出土した土師器のうちで最も多量に出土した。3形態に分類でき、114点を図示したが、全体の形状が明確なものはごくわずかで、そのほとんどは口縁部および体部上半のみの破片であった。

甕A 球形に近い体部。口縁の立ち上りが低く外反する(418, 427, 466)。：平城宮甕A。

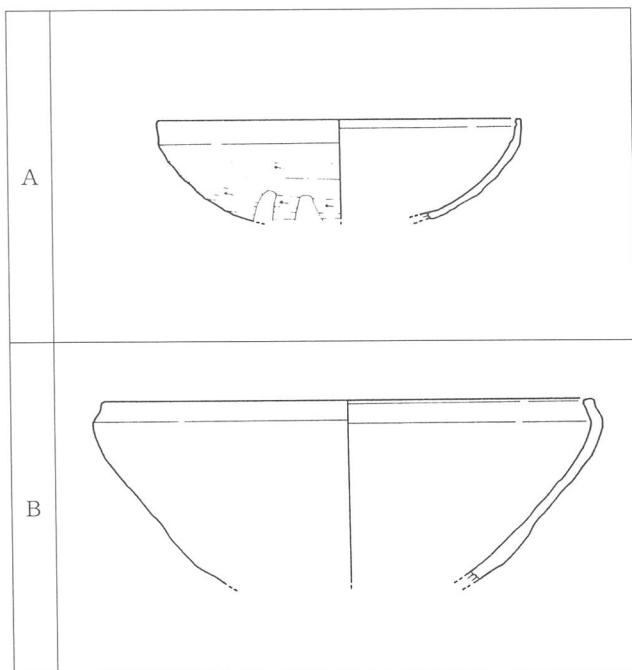
甕B 頸部でややすぼまる長手丸底の体部。口縁の立ち上りが低く外上方へのびる(480)。

甕C 甕Bの体部中位外面に2ヶ所把手を付したもの(484)。

### 鉢

鉢には供膳用土器に含まれる小型のものと、貯蔵の用途を持つと思われる大型のものがある。

鉢A 小さな平底ないしは丸底の底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのび、端部で直立する。端部を内側に曲げ込んでいる。小型で供



第15表 土師器鉢形態分類表

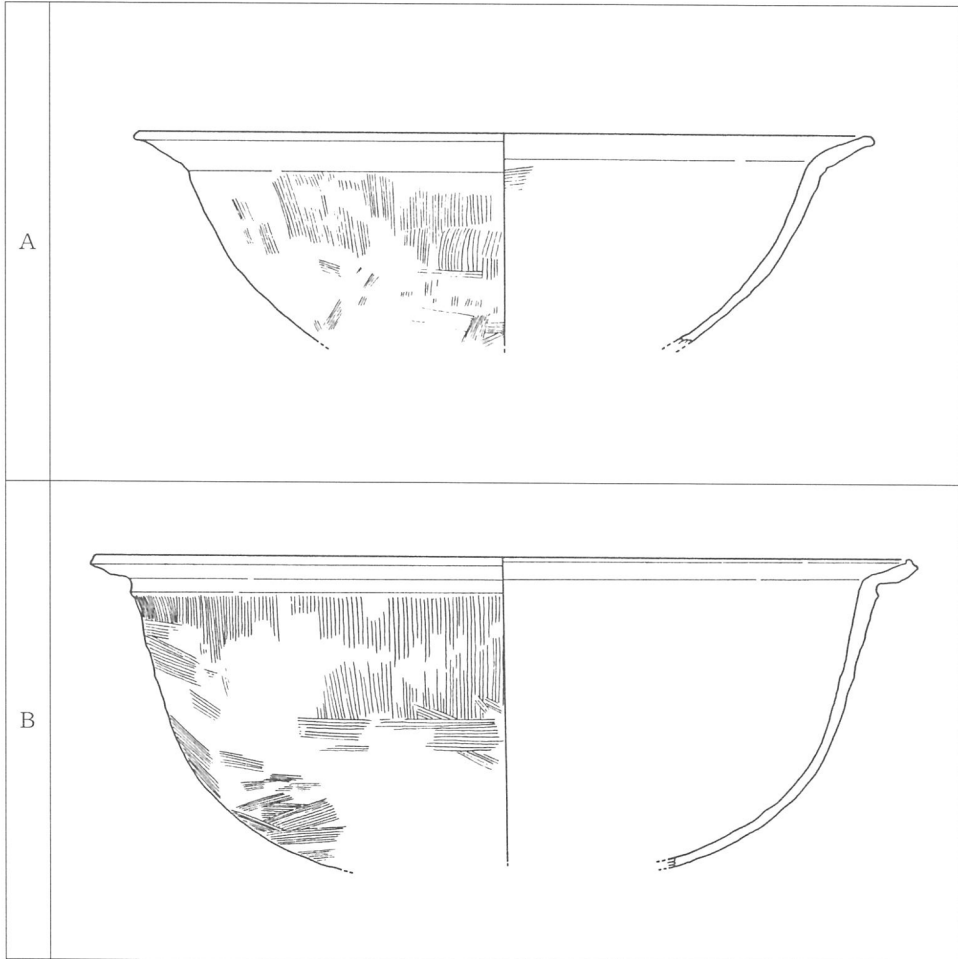
膳の用途を持つもの（501, 503）。

鉢B 底部は欠損しているが丸底に近い形状と思われる。体部は外上方へまっすぐ立ち上り、口縁部は短く、わずかに内傾する。大型で貯蔵の用途を持つもの（505）。

### 鍋

大型で煮沸の用途を持つもので、2つの形態に分類できた。

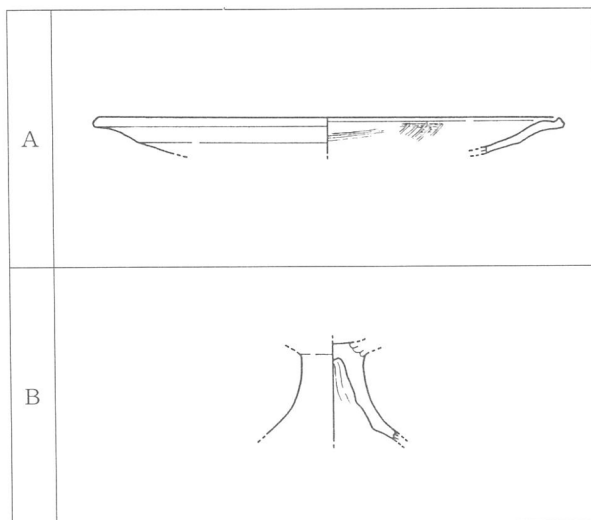
鍋A 底部から体部に至るまで全体的に丸みを持つ形状で、半球形に近い体部。口



第16表 土師器鍋形態分類表

縁部は低く、長く外側にのびる（510, 511）。

鍋B 丸底の底部で、体部はまっすぐに外上方にのびる。口縁部はごく短く外方に開く（83）。



第17表 土師器高杯形態分類表

高杯は非常に少なく、今回出土したのは2点のみである。しかもこれらはともに小片で、全体の形状が把握できたものはなかった。

高杯A 大きく外方に開く浅い杯部。脚部は多面体に面取りしたものと思われる。杯部見込みに暗文がみられる（512）。：平城宮高杯A。

高杯B 口縁が内弯する杯部。脚部は面取りをせずラップ状に開く（513）。：平城宮高杯B。

## 2. 出土土器の器種構成について

前項では1-O S出土の土器を器種別に分類整理したが、その結果から、以下の傾向がうかがわれた。

まず表19のように、総個体数437のうち須恵器209個体（48%）、土師器228個体（52%）と、須恵器と土師器の割合が拮抗しているというデータが得られた。

		須 直 器	土 師 器
供 膳 用 土 器	杯	96	22
	皿	6	71
	椀	0	1
	鉢	0	4
	高杯	1	2
	蓋	52	0
		(小計) 155	(小計) 100
煮 沸 用 土 器	甕	0	115
	鍋	0	8
	胖釜	0	2
		(小計) 0	(小計) 125
貯 蔵 用 土 器	壺	30	2
	甕	13	0
	鉢	8	1
	横瓶	3	0
		(小計) 54	(小計) 3
計	209	228	
総計	437		

第18表 1-O S出土土器器種別数量統括表

平城宮は当時の国の中心であり、全国各地から貢物が集積していた事が多くの文献資料などにより明らかであるところであるが、その平城宮においても発掘調査によって出土した土器の大半が土師器で、須恵器はその1/3程度の比率にしかならない。しかるに芝ノ垣外遺跡1-O-Sからの一括資料ではほぼ同じ比率にもなる。芝ノ垣外遺跡では、過去の調査において、検出した溝の一括資料を検討した調査担当者が、同様の傾向を指摘しているが、大量の一括資料を得た今回も比率に変化がない。

(5) 須恵器は、土師器に比べより高度な生産技術を要する貴重品であったろうが、官衙的性格のうかがわれない一般的な集落で大量の須恵器が出土している事は、周辺に須恵器の大産地である陶邑古窯趾群を擁する当地域の地的特色をあらわしているものといえよう。

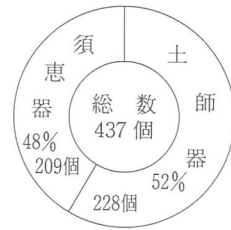
次にこれらの土器を用途別にみてゆくと、供膳用土器255（58%）、煮沸用土器125（29%）、貯蔵用土器57（13%）と、供膳用の土器が過半数を占める。

さらに供膳用土器は須恵器155・土師器100であるが須恵器155のうち52は杯とセットとなる蓋であり、この分を差し引くと須恵器103に対して土師器100と、ほぼ同数となる。

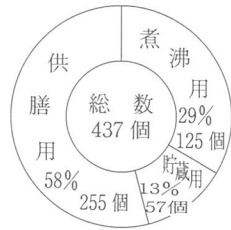
煮沸用土器は125すべてが土師器であった。

貯蔵用土器は57のうち須恵器54・土師器3となっている。

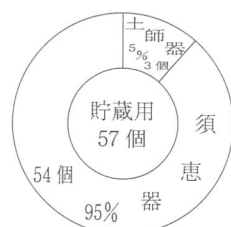
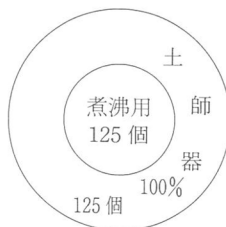
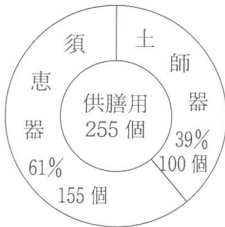
これらをみると、出土土器の過半数を占め、主要な形態といえる供膳用土器では須恵器と土師器の比率が拮抗しているが、そのほかは煮沸用は土師器、貯蔵用は須恵器というよ



第19表 1-O-S出土土器構成表



第20表 1-O-S出土土器用途別構成表



第21表 1-O-S出土土器器種別構成表

うに、用途によって片寄る傾向がみられる。

供膳の用途を持つ土器には杯・皿・碗・鉢・鉢・高杯などがあり、その内訳は須恵器と土師器が拮抗しているが、杯は須恵器148（蓋を含む）に対して土師器22，皿は須恵器6・土師器71，碗は須恵器0・土師器1，鉢は須恵器0・土師器4，高杯は須恵器1・土師器2というように、器種によって例えば杯は須恵器，皿は土師器というように極端に片寄っている。

須恵器と土師器の比率が片寄っている煮沸用土器・貯蔵用土器には当然この傾向があてはまり、したがってこの傾向は器種全体にわたってみられる傾向といえる。

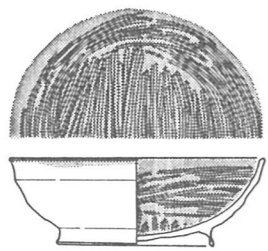
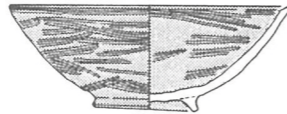
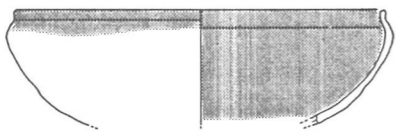

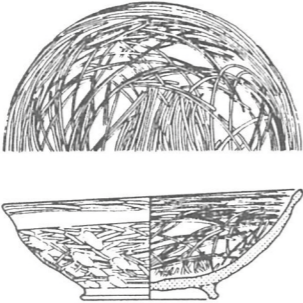
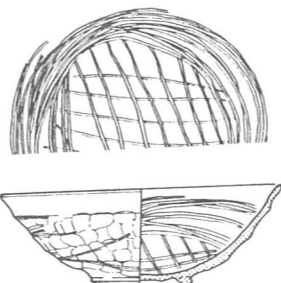
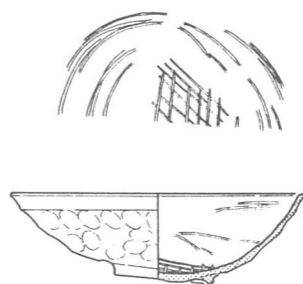
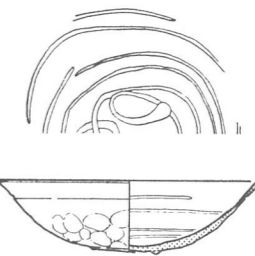

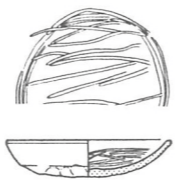
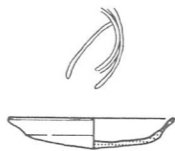

### 3. 出土土器の時期について

芝ノ垣外遺跡の所在する泉州地域においては、いまだ独自の奈良時代土器編年体系が確立されるに至っていないのが現状である。同時代の土器編年が確立しているのは奈良の平城宮跡における編年体系であり、ここではその平城宮の編年体系の中に芝ノ垣外遺跡の資料を当てはめてみると、須恵器・土師器などの形状からみて概ね平城宮ⅢからⅣに含まれるようである。さらに、平城宮の資料においてはⅣの段階で土師器の杯・皿の内面に暗文がみられなくなるが、当資料では土師器ⅢCの多くに斜状暗文と連結輪状暗文がみられ、したがって当資料は平城宮Ⅲにあてはめられ、暦年代は8世紀中頃に比定できるものと考えられる。

## 第2項 平安時代～鎌倉時代土器の検討

芝ノ垣外遺跡では、平安時代から鎌倉時代にかけての遺構を多数検出し、それらの遺構のいくつかから黒色土器碗・瓦器碗を中心とした良好な一括資料を得た。したがって、ここではそれらを分類・整理してみる事とする。

ここで整理を進めて行くうえで、中軸をなすのが瓦器碗となる事はいうまでもない。瓦器碗の研究は1960年代頃から始められ、畿内の平安時代から鎌倉時代の遺跡においては土師器とともに最も多くの出土がみられ、編年的研究もかなり進んでいる。その中で、大阪南部を中心として分布する「和泉型」瓦器碗については尾上実氏の研究が著名である。尾上氏は瓦器碗にⅠ～Ⅳの四型式を設定し、さらに各型式を3～5の段階に細分した編年を行っており、それらについて11世紀中頃から15世紀前半にわたる年代を与えている。これ

		芝ノ垣外 I 期	II 期	III 期	IV 期	V 期
		10 世紀中頃	11 世紀中頃	12 世紀後半～末	13 世紀初頭	13 世紀前半
			I - 2	III - 1	III - 2	III - 3
黒色土器	碗					
	その他					
瓦器	碗					
	小皿					

第22表 芝ノ垣外遺跡出土黒色土器碗・瓦器碗型式分類表

に対して、近年森島康雄氏が畿内産瓦器碗の併行関係について論究しており、森島氏はその中で「和泉型瓦器碗」の年代観の引き上げの必要性を提示している。<sup>(7)</sup>

ここでは、尾上氏の型式分類に森島氏の実年代観をあてはめる方法を採用し、芝ノ垣外遺跡における瓦器の年代観を想定してゆく事とし、黒色土器については瓦器との共伴関係をもとにその位置付けを提示しておく事とする。

### 1. 芝ノ垣外遺跡出土瓦器碗の型式分類

和泉型瓦器碗の型式分類については尾上氏の編年が著名であるのは前述の如くである。

今回の調査では、大量の瓦器碗が複数の遺構から出土したが、これらは尾上編年のすべての段階をカバーできるものではなく、I～III型式の範囲内におさまる程度で、その編年観の再編を考慮させるものではない。したがって、ここでは出土した瓦器碗を尾上編年をもとに型式分類する事とした。

芝ノ垣外遺跡出土の瓦器碗は、黒色土器碗をあわせて分類を試みた結果、次の5つの段階を設定できるに至った（第22表）。

I期 黒色土器A類の碗のみで、瓦器碗・黒色土器B類碗はみられない。

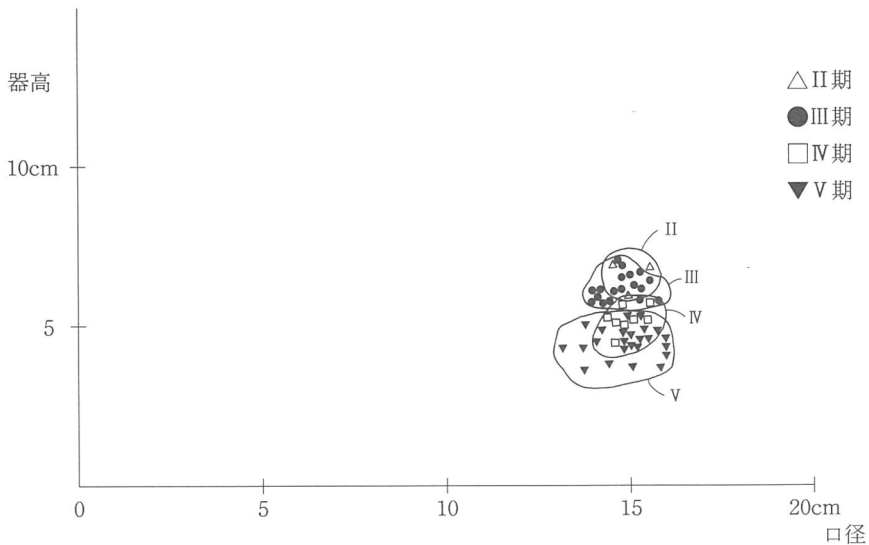
比較的広い平底の底部と丸みを持つ口縁部で、底部外面周縁に径が大きく高い貼付高台を付す。内面は分割性のある密なヘラミガキ、見込みにも平行状に密なヘラミガキを施す。外面にはヘラミガキがみられない。

II期 黒色土器B類の碗と尾上編年I-2型式に比定できる瓦器碗が共伴して出土する段階である。

黒色土器B類碗は小さな平底の底部とわずかに内湾しつつ外上方へのびる口縁部からなる肉厚のもので、内・外面ともに分割性のあるヘラミガキ調整を施すものである。他に黒色土器B類の小皿も見られる。

瓦器碗は、小さな平底の底部と内湾しつつ外上方へのびる口縁部からなる深い形状を呈するもので、径が大きく高い貼付高台を付す。内面には分割性のある密なヘラミガキを施し、外面はヘラケズリの後全面に分割性のある密なヘラミガキを施している。見込みには暗文がみられる。他に瓦器小皿も見られるが、小皿も内・外面ともにヘラミガキがみられる。





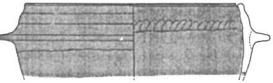
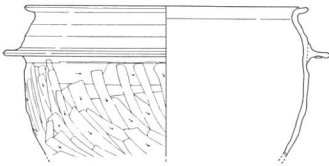
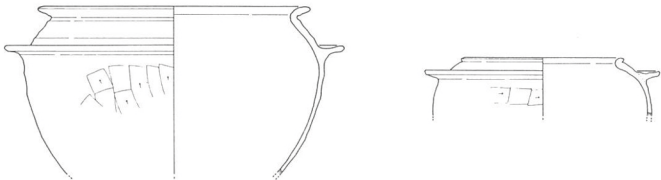
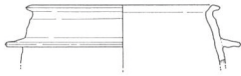

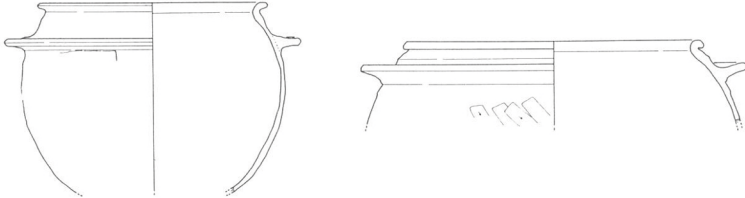
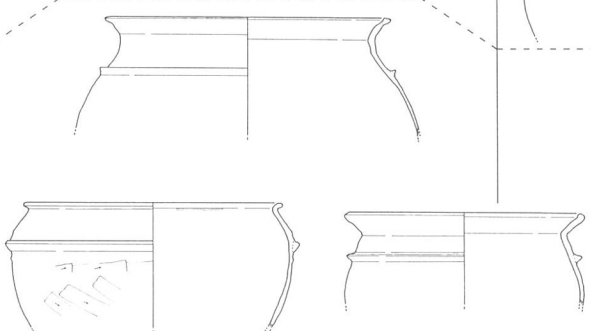

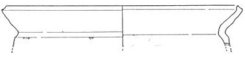
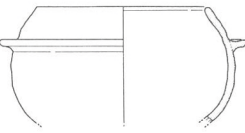
第23表 芝ノ垣外遺跡出土瓦器碗形態指数表

III期 尾上編年のIII-1型式にあたる。

平底の底部と、内弯しつつ外上方へのびる口縁部からなる。比較的深い形状を呈する。比較的高い貼付高台を付す。高台径は小さくなる傾向がみられる。内面のヘラミガキに分割性がみられなくなる。外面は上半部のみヘラミガキがみられ、下半は指押さえによる。瓦器小皿も見られるが、小皿では外面のヘラミガキがなくなる。

IV期 尾上編年のIII-2型式にあたる。

この時期では器形に明確な変化がみられる。器高の減少化が始まり、浅い形状を呈するようになる。貼付高台の径がいちだんと小さくなり、高さも低くなる。内面のヘラミガキは簡略化されたものとなり、外面にはヘラミガキがみられない。瓦器小皿も見られるが、小皿は内面のヘラミガキがなくなり、見込みの暗文が残るのみである。

瓦器碗式	黑色土器	土師器		瓦質土器
		和泉型	紀伊型	
I (10 C) (中頃)				
II I-2 (11 C) (中頃)				
III III-1 (12 C) (後半~末)				
IV III-2 (13 C) (初頭)				
V III-3 (13 C) (前半)				
				
				

第24表 芝ノ垣外遺跡出土土羽釜時期別分類表

V期 尾上編年のⅢ－3型式にあたる。

この時期では器高の減少化がさらに進んで、いちだんと浅い形状を呈するようになる。貼付高台の縮小化もさらに進み、ほとんど痕跡に近いものもある。外面に加えて内面のヘラミガキもごく簡略化され、数回めぐらすのみとなる。見込みには連結輪状暗文を施す。瓦器小皿も見られるが、小皿は見込みの暗文もなくなる。

## 2. 芝ノ垣外遺跡における平安時代～鎌倉時代土器の変遷

これまで芝ノ垣外遺跡出土の瓦器碗について型式ごとに説明してきたが、次に瓦器碗・瓦器小皿・羽釜などの各器種について段階ごとのうつりかわりをまとめてみる。

### 瓦器碗

瓦器碗はⅡ期からみられる。

口径からみると、Ⅱ期からⅣ期まではほとんど変化がないが（第23表）、Ⅴ期ではばらつきがみられ、この段階から徐々に口径の小型化が始まってゆく。

器高は、Ⅱ期～Ⅲ期ではすべての類例が5 cm以上であるが、Ⅳ期では5 cm以下のものが多くなり、この段階から器高の縮小化がはじまる。Ⅴ期になると類例のすべてが4.5 cm以下と、いちだんと浅い形状を呈する。

この傾向は貼付高台にもみられ、Ⅱ期では高台径の大きな高い貼付高台であるが、Ⅲ期から高台径の縮小化がはじまり、Ⅳ期ではそれに加えて高台高も低くなってくる。Ⅴ期に至っては、高台は形骸化したものになっている。

器面の調整では、Ⅱ期では内・外面全体に密なヘラミガキを施し、見込みには暗文を施しているが、Ⅲ期では内面のヘラミガキが荒くなるとともに、外面には上半部のみにヘラミガキを施している。見込みの暗文は顕著にみられる。Ⅳ期では内面のヘラミガキが簡略化する傾向がみられ、外面にはヘラミガキがみられなくなる。Ⅴ期に至っては内面のヘラミガキはごく簡略化し、見込みにかけて圏線を数回めぐらすのみとなる。

### 瓦器小皿

小皿は碗と同様にⅡ期以降Ⅴ期までみられる。

底部の形状などにいくつかのバラエティーはあるが、時期ごとの形態的变化はみられな

かった。

器面の調整の点では明確な変遷がうかがわれる。

II期では内・外面ともに密なヘラミガキを施している。

III期では内面のヘラミガキが簡略化されたものになり、外面にはヘラミガキがみられなくなる。

IV期では内面のヘラミガキもなくなり、見込みに暗文を施すのみとなる。

V期に至っては見込みの暗文もみられなくなる。調整は指押さえと横ナデによる。

### 羽釜

羽釜には土師質・瓦質・黒色土器B類の3種類がある。

I期に属する各遺構からは羽釜はまったくみられなかった。

II期では、遺物の出土量が多い割に羽釜は極端に少なく、黒色土器B類のものが1点みられるのみで、最も一般的な土師質あるいは瓦質のものはまったくみられない。この類例は形態的には菅原正明氏の分類による和泉C型に属するものであるが、土師質ではなく黒色土器B類である点に特徴がある。<sup>(8)</sup>

III期では土師質羽釜が多量にみられる。和泉B型とされるもので、球形の体部と外反する口縁部からなる。口径によって大・中・小の3形態がある。瓦質の羽釜はみられない。

IV期の段階でも和泉型の類例が多くみられる。球形の体部には変化がないが、外反する口縁部には立ち上りが短くなる傾向がみられる。瓦質はみられない。

V期に至っても和泉型の土師質羽釜は隆盛を続け、大量の類例がみられる。形態的にはIV期とほとんど変わらない。

この段階には紀伊産の羽釜が出現する。土師質で、口縁がくの字状に大きく外反するものと、口縁がごく短く外側に折れて終るものがあり、どちらも体部外面上端付近に、ごく短い断面三角形の鏝を付している。

また瓦質の羽釜もみられる。これは球形の体部と内傾する口縁部からなるもので、幅の狭い肉厚の鏝を付す。

### 3. 各段階の暦年代について

最後に、I期～V期の各段階についてそれぞれ暦年代を当てはめておく。

まずI期は瓦器の出現以前の時期で、この段階の指標となる土器は黒色土器A類の椀で

	須 惠 器	土 師 器				
	鉢	碗	杯	小 皿		皿
I						
II				 	 	
III						
IV						
V						
						 
						

第25表 芝ノ垣外遺跡出土平安時代～鎌倉時代須惠器・土師器時期別分類表

ある。

芝ノ垣外遺跡では、黒色土器A類の椀はB類との共伴関係がまったくみられない。和泉地方では、10世紀後半から11世紀前半にかけてA類からB類への転換が進行するとされているが、芝ノ垣外遺跡のI期の類例はB類椀との共伴がまったくみられず、したがって10世紀中頃を下ることはないといえる。また、これらの椀には外面のヘラミガキ調整がまったくみられないので、A類椀ではかなり後出のものといえ、これらの事由により、I期は10世紀中頃の年代観を想定しておく。

I期に属する遺構としては、第1地区から第2地区の平安時代集落を構成する各遺構があげられる。

II期では芝ノ垣外遺跡にも瓦器が出現しており、和泉型瓦器椀の編年型式上のI-2型式にあたる時期である。総じて個体数は少ないが、椀の他に小皿もみられる。

芝ノ垣外遺跡の類例では、この時期の瓦器は、黒色土器A類・B類の両方ともに共伴している。黒色土器A類は和泉では終末期にあたり、ここでも数個体みられるのみで黒色土器の主流はB類に移行している。B類は椀の他に小皿・羽釜などもみられ、土師器とともにこの時期の主要形態を占めている。

I-2型式の年代観は11世紀中頃が上限とされており、黒色土器A類の終末、B類の隆盛ともあいまって、II期は11世紀中頃前後の年代観を想定する。

II期に属する遺構としては、第4地区の平安時代集落を構成する各遺構があげられる。

III期は編年型式上のIII-1型式にあたる時期で、12世紀後半～末の年代観を想定した。

III期に属する遺構としては、第8地区第2面の遺構のうちのいくつかがあげられる。主要な遺構としては26-OS・3-ORなどがある。この両者にはともにIII-1型式の瓦器椀がみられるが、その形状からみて、III-1型式内におさまる範囲内で多少の時期差があるようで、26-OSが3-ORに先行する。

IV期は編年型式上のIII-2型式に相当する時期で、13世紀初頭の年代観を想定した。

IV期に属する遺構としては、第2地区の16-OOと、第8地区第2面の20-OB、34-OO、1-OLなどがあげられる。

V期は編年型式上のIII-3型式に相当する時期で、13世紀前半の年代観を想定した。

V期に属する遺構としては、第8地区第1面で検出した39-OO・40-OO、そして検出したのは第2面であるが、その後の検討により第1面に対応すると考えられた2-OR・2-OWなどがあげられる。

暦年代	型式	第1地区~第2地区	第4地区	第8地区	備考
I 950		・1-OW ・32-0P他			■ 第1~第2地区 平安時代集落
II 1050 1100 1150	I-2		・15-OB ・16-OB ・14-OS他		■ 第4地区 平安時代集落
	I-3				
	II-1				
	II-2				
	II-3				
	III 1200	III-1			
IV	III-2	・16-OO	↔	・20-OB・34-OO・1-OL ↓ ・2-OR	
V 1250	III-3			・39-OO・40-OO ↓ ・2-OW	第8地区 第1面遺構
	IV-1				

第26表 平安時代～鎌倉時代遺構変遷表

これらは土器型式上はIII-3型式に含めて考えてよいと思われるが、細部では多少の前後関係がみられ、2-OR⇔39-OO・40-OO⇒2-OWという位置関係にある。

#### 4. まとめにかえて

以上、芝ノ垣外遺跡出土の平安時代～鎌倉時代土器について、瓦器碗を中心に検討してきた。

今回の調査における成果では、従来の和泉型瓦器碗の編年型式のすべての時期をカバーする資料を得られたわけではなく、むしろ虫喰い的にその編年観の中に当てはめただけでおわる結果となった。しかし、当地域では同時期の類例が少なく、山直谷の枠の中だけで型式編年体系を部分的とはいえ一定量カバーするような一括資料が得られたのは今回がはじめてであった。したがって、今回はⅢ型式に対応する資料を当てはめられた事に一定の意義を見出す事とし、今後、山直谷のさらに奥部の調査が進むにつれ他の各型式の類例も埋ってゆくものといえよう。

(註)

- (1) 岸和田市史第一巻第3章「前方後円墳の時代」
- (2) 「三田遺跡」発掘調査報告書 1987 (財)大阪府埋蔵文化財協会
- (3) 「山直中遺跡Ⅱ」 1990 (財)大阪府埋蔵文化財協会
- (4) 平城宮発掘調査報告Ⅶに記載されている須恵器器種表、土師器器種表を参考に  
してまとめた。
- (5) 「芝ノ垣外遺跡」発掘調査報告書 1987 大阪府教育委員会・(財)大阪府埋  
蔵文化財協会
- (6) 「大阪南部の中世土器」 尾上 実
- (7) 「畿内産瓦器碗の併行関係と暦年代」 森島康雄
- (8) 「畿内における土釜の製作と流通」 管原正明



# 付章1 山直郷における古代～中世集落の 展開

## 第1節 はじめに

山直郷は、古代の和泉国和泉郡に属する末端行政単位のひとつで、新在家、多治米、摩湯、三田、包近、中村、稲葉、積川の八地域で構成するとされている。これらを現在の地名と比較してみると、牛滝川の谷筋に点在する現在の集落名とほぼ一致し、したがって、山直郷は山直谷奥部の現岸和田市積川から開口部の現岸和田市新在家までをその郷域としていたといえる。

山直谷の中央を流れる牛滝川によって形成された右岸の段丘上には、最奥部の式内社積川神社の東側に所在する宮の後遺跡を南端として、中之社遺跡、土井ノ木遺跡、芝ノ垣外遺跡、山直中遺跡、黒石遺跡、水込遺跡、二俣池北遺跡、上フジ遺跡、三田遺跡、山直北遺跡などが北に向かって連鎖状に存在する。

これらの遺跡のうち、宮の後遺跡、中之社遺跡、土井ノ木遺跡は未発掘であるが、その他は本格的な発掘調査が行われ多大な成果があげられており、それらの成果は数冊の発掘調査報告書にまとめられている。したがって、ここではそれらの成果に今回の芝ノ垣外遺跡の発掘調査結果を合わせる事により、山直郷における古代～中世集落の展開について考えてみたい。

## 第2節 山直郷における集落の変遷

山直郷の郷域内と推定される地域には前述の如く11の遺跡が存在しているが、これらの遺跡は現在の土地条件などによって区画され名称を与えられている。したがってこれらの遺跡から検出された集落の単単位が、ひとつの遺跡の範囲内に必ずおさまるとは限らない事は言うまでもない。また山直郷の郷域は山直谷内部にあたっており、狭小な谷筋という自然条件から縦長の郷域を有する特徴がある。

主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線は山直谷をその谷筋に添って南北に縦断する道路で、この事前発掘調査は、ひとつの谷筋を縦割りにするトレンチを入れるという画期的なものとなった。



第341図 山直谷遺跡配置図

11遺跡は道路域のほぼ全域をカバーする状態で連なっているが、以下にあげる調査成果の集約の結果、これらの遺跡は山直谷開口部と中央部の2つの群に大別できると考えられ、この両者には集落出現の時期などの点で明確な差異がみられる結果となった。

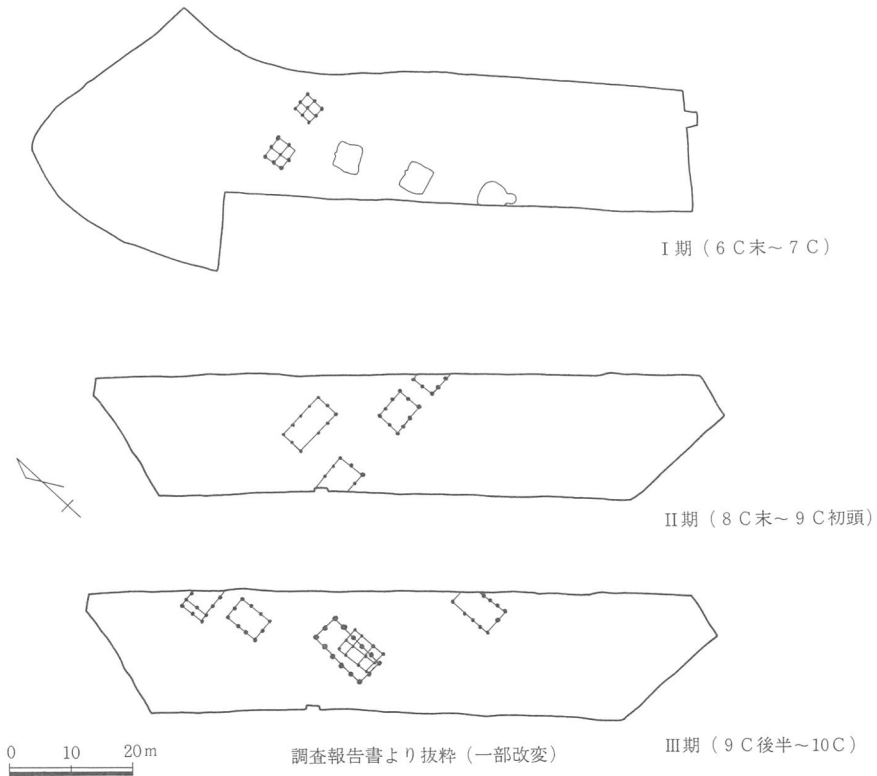
### 1. 山直谷開口部の遺跡群

山直谷開口部にあたるのは最も北側、すなわち海側の山直北遺跡から奥へ向かって三田遺跡、上フジ遺跡、二俣池北遺跡、水込遺跡までの5遺跡である。

これらの5遺跡は、検出された遺構の相互関係などからみて4つの群に再編できるものと考えた。

#### <第1群>

山直北遺跡のA地区、B地区に所在する。



第342図 第1群建物配置図

B地区の集落は堅穴住居3棟・掘立柱建物2棟を中心として、溝などで構成される。

A地区の集落は掘立柱建物9棟を中心として構成され、報告書によればこの集落は2つ<sup>(1)</sup>の時期に大別される。したがってここではB地区の集落をI期、A地区の集落をII期・III期として記述する。

第 1 群				
山直北遺跡A地区B地区				
	堅穴住居	掘立柱建物	その他	
I期	3棟の堅穴住居・2棟の掘立柱建物を中心として、溝などで構成される。2棟の掘立柱建物は、総柱で倉庫と思われる。6世紀後半から7世紀のものとなっている。	793-OD 803-OD 805-OD	682-OB(2間×2間) 総柱 608-OB(2間×2間) 総柱	溝 131-OS
II期			1052-OB(2間×4間) 1220-OB(2間×3間) 1246-OB(2間×3間) 1377-OB(2間×3間)	溝 1579-OS
III期	4棟の掘立柱建物を中心として、溝などで構成される。いずれも2間×3間ないしは2間×4間の規模を持つ建物である。8世紀末から9世紀初頭のものとなっている。		916-OB(2間×3間以上) 958-OB(2間×3間) 1240-OB(2間×5間) 1248-OB(2間×3間)	溝 921-OS

第27表 第1群時期別遺構構成表

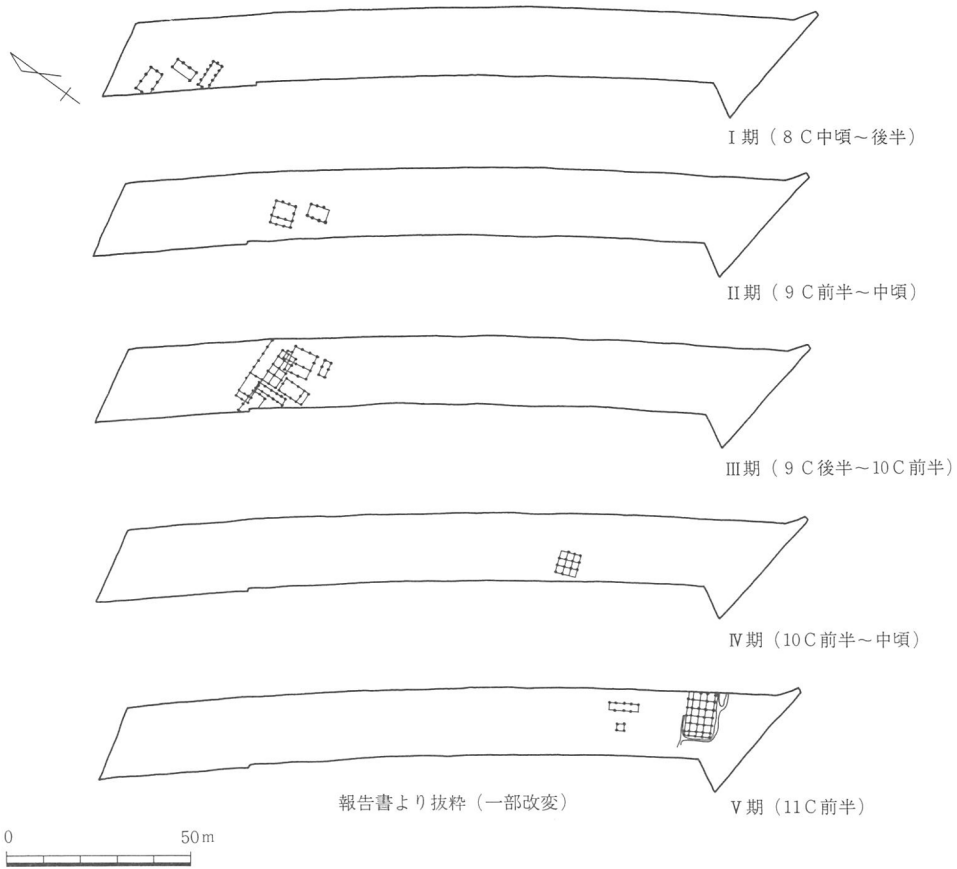
III期 5棟の掘立柱建物を中心として、柵列・溝・井戸などで構成される。掘立柱建物は2間×3間から2間×5間の大型のものまであり、総柱で倉庫と考えられるものもある。9世紀後半から10世紀のものとなっている。

### <第2群>

三田遺跡C地区に所在する。この群は掘立柱建物23棟を中心として構成される集落で、報告書によればこれらはI期～V期に大別される。<sup>(2)</sup>

I期 3棟の掘立柱建物を中心として、溝・土坑などで構成される。建物は1間×3間から2間×5間の規模で、庇を持つものもある。8世紀中頃から後半のものとなっている。

II期 2棟の掘立柱建物を中心として、土坑などで構成される。ともに2間×3間



第343図 第2群建物配置図

の規模を有するが、そのうち1棟は庇を持つものである。9世紀前半~中頃のものとしてされている。

III期 7棟の掘立柱建物を中心として、土坑・溝・柵などで構成されており、報告書ではさらに4段階に細分されている。

この時期の建物は構造上からみても主屋と付属建物が対になる状況がみられ、前段階と比べて進歩がうかがわれるものといえるが、中でもIII期の後半では庇に加えて入口と思われる施設がみられる特徴があり、この段階を境として以後の建物構造あるいは構成に明らかな変化がみられる。9世紀後半~10世紀前半のものとしてされている。

Ⅳ期 1棟の掘立柱建物があるのみである。3間×3間の総柱の構造で、倉庫と思われ、調査担当者は西方に主屋の存在を想定している。10世紀前半～中頃のものとしてされている。

Ⅴ期 3棟の掘立柱建物を中心として、土坑、溝などで構成されている。建物群は2間×5間で2面に庇を持ち、雨落ち溝を巡らす主屋を中心に2棟の付属屋を加えて屋敷地を構成している。11世紀前半頃のものとしてされている。

第 2 群			
三 田 遺 跡 C 地 区			
	堅穴住居	掘立柱建物	そ の 他
I		C2001-OB(2間×4間) C2002-OB(2間×3間) C2003-OB(2間×5間)	溝 C892-OS C936-OS C937-OS 土坑 C915-00
II		C2008-OB(2間×3間) C2011-OB(2間×3間)	土坑 C1046-00 C1040-00 C935-00
III		C2004-OB(2間×4間) C2005-OB(2間× 3間以上) C2006-OB(1間×5間) C2007-OB(2間×4間) 総柱 C2009-OB(2間×3間) 庇付 C2010-OB(2間×3間) C2016-OB(1間×2間)	
IV		C2012-OB(3間×3間) 総柱	
V		C2013-OB(1間×4間) C2014-OB(1間×1間) C2015-OB(2間×5間) 3面庇付	土坑 C1565-00 C1642-00 C1678-00 溝 SDO177 C1638-OS C1637-OS

<第3群>

三田遺跡B地区から上フジ遺跡第I地区にかけての地域に所在する。この群は堅穴住居21棟・掘立柱建物21棟を中心として構成される集落で、報告書によればこれらはI期～IV期に大別される。

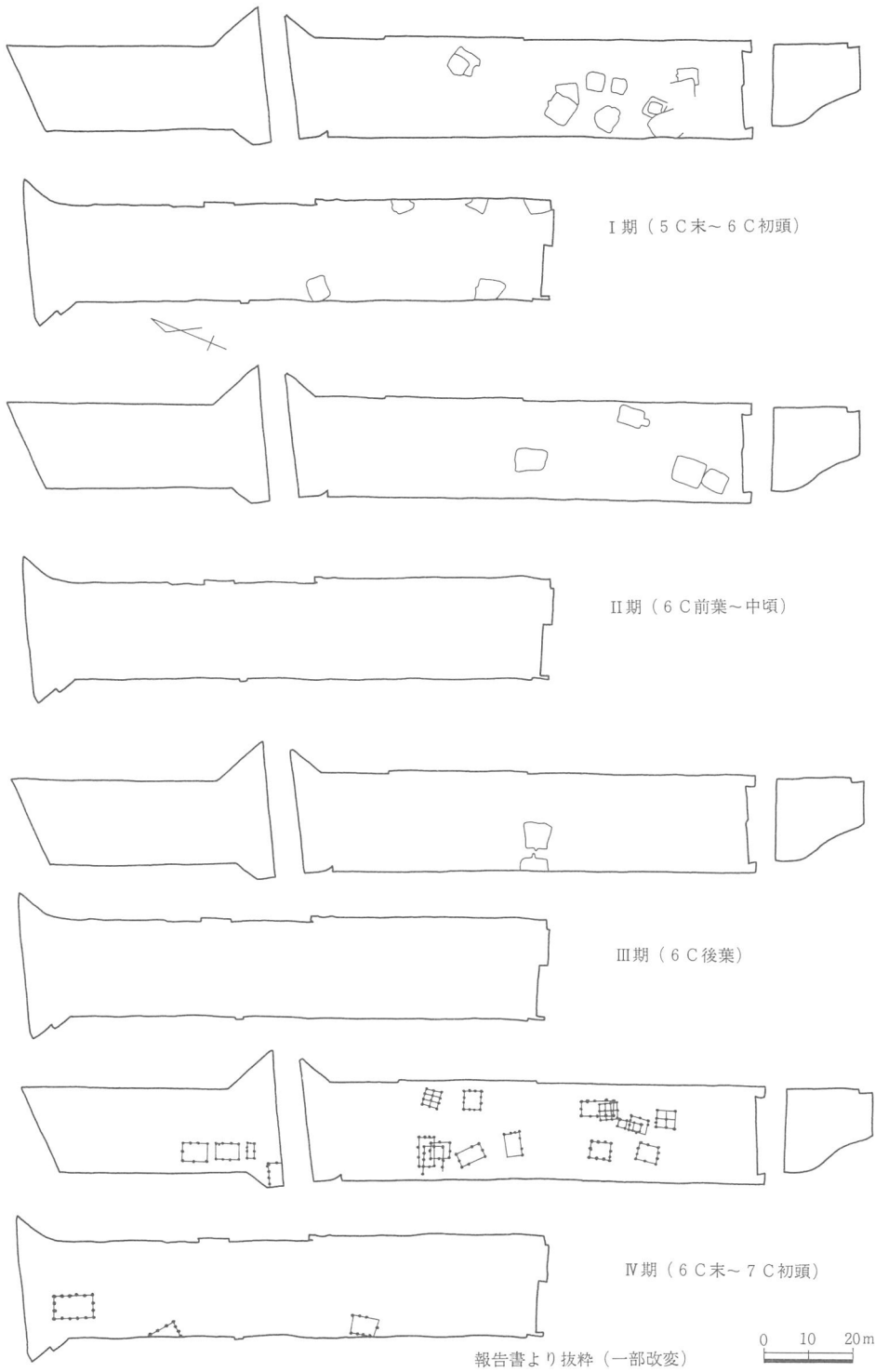
(3)

第28表 第2群時期別遺構構成表

I期 三田遺跡B地区の南半部と、上フジ遺跡第I地区南半部の2ヶ所に所在する。それぞれ堅穴住居10棟（三田B）、堅穴住居6棟（上フジ）を中心として、土坑などで構成される。5世紀末～6世紀初頭のものとしてされている。

II期 三田遺跡B地区南半部に所在する。堅穴住居5棟を中心として、土坑などで構成される。上フジの集落は前段階限りで廃絶している。6世紀前葉～中頃のものとしてされている。

III期 三田遺跡B地区南半部に所在する。堅穴住居2棟を中心として、土坑などで



第344図 第3群建物配置図

構成される。6世紀後葉のものとしてされている。

Ⅳ期 三田遺跡B地区全域から上フジ遺跡第Ⅰ地区北半部にかけての地域に所在する。掘立柱建物21棟を中心として、土坑・溝などで構成される。6世紀末～7

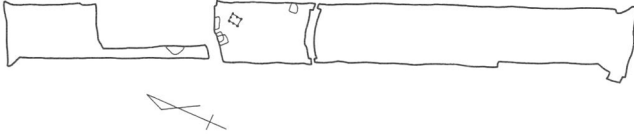
第 3 群						
	三田遺跡B地区			上フジ遺跡		
	堅穴住居	掘立柱建物	その他	堅穴住居	掘立柱建物	その他
I	B 406(a)-OD B 406(b)-OD B 471-OD B 472-OD B 473-OD B 474-OD B 475-OD B 478-OD B 844-OD B 799-OD B 800-OD B 801-OD B 802-OD		溝 B 213-OS B 214-OS B 693-OS B 803-OS 土坑 B 94-OO B 200-OO B 407-OO B 477-OO B 762-OO	1116-OD 290-OD 473-OD 168-OD 291-OD 393-OD 300-OD 365-OD		
II	B 470-OD B 476-OD B 479-OD B 480-OD B 798-OD	B 1017-OB (2間×4間) B 1019-OB (2間×3間)	溝 B 151-OS B 160-OS 土坑 B 371-OO B 373-OO B 409-OO B 483-OO B 660-OO B 840-OO			
III	B 507-OD B 469-OD		溝 B 150-OS B 152-OS B 447-OS 土坑 B 92-OO B 93-OO B 95-OO B 140-OO B 155-OO B 158-OO B 189-OO B 402-OO			
IV		B 1001-OB (2間×3間) 総柱 B 1002-OB (2間×2間) 総柱 B 1003-OB (1間×2間) B 1004-OB (2間以上×4間以上) B 1011-OB (2間×3間) 総柱 B 1012-OB (3間×3間) B 1015-OB (2間×4間)	溝 B 61-OS B 84-OS B 89-OS B 149-OS B 159-OS B 170-OS B 434-OS B 482-OS 土坑 B 45-OO B 372-OO B 420-OO B 495-OO B 811-OO B 839-OO		172-OB (2間×4間) 210-OB (3間以上×3間以上) 1102-OB (?) 409-OB (3間×5間)	

第29表 第3群時期別遺構構成表

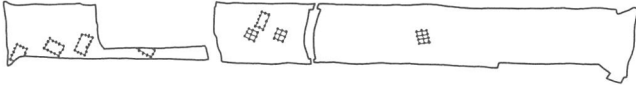




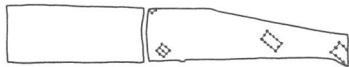
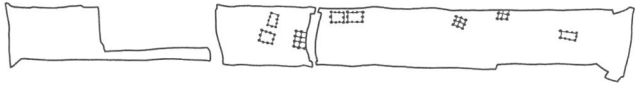
I期 (6C後葉~7C初頭)



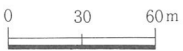
II期 (7C初頭~中葉)



III期 (7C中葉~後葉)



IV期 (7C後葉~8C前葉)



報告書より抜粋 (一部改変)

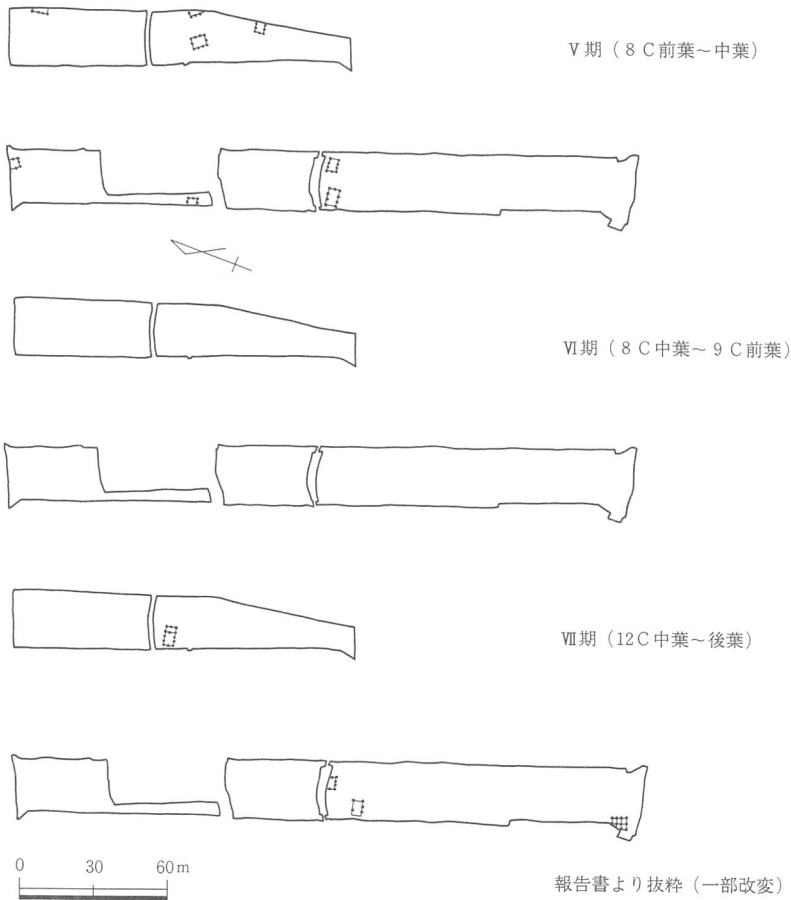
第345図 第4群建物配置図(1)

世紀前葉にかけてのものとしてされているが、建物の重複がみられるためさらにいくつかの時期に細分できるようである。

I期～III期までは竪穴住居を中心とした建物構成であったが、IV期では掘立柱建物を中心とした建物構成へと変化している。

<第4群>

二俣池北遺跡4区、5区から水込遺跡A区、B区にかけての地域に所在する。この群は竪穴住居15棟・掘立柱建物46棟を中心として構成される集落で、報告書によればこれらはI期～VII期に大別される。<sup>(4)</sup>



第346図 第4群建物配置図(2)

第 4 群						
	二俣池北遺跡4区・5区			水込遺跡A区・B区		
	堅穴住居	掘立柱建物	その他	堅穴住居	掘立柱建物	その他
I	4250-OD 5200-OD 5300-OD 4150-OD 5050-OD 5150-OD 5350-OD 5400-OD	5420-OB (2間×2間) 総柱		0002-OD 0003-OD 0004-OD	1008-OB (2間×2間)	土坑 2012-OO
II	5380-OD	4100-OB (2間×3間) 総柱 5250-OB (3間×4間)			1002-OB (3間×4間) 1004-OB (3間×4間) 1005-OB (3間×5間) 庇付 1006-OB (3間×4間) 1010-OB (2間×2間) 総柱 1011-OB (2間×4間) 1014-OB (2間×2間) 総柱 1028-OB (2間×3間)	
III		5390-OB (3間×?) 5410-OB (2間×3間) 総柱 5550-OB (2間×4間)			1003-OB (2間×2間) 総柱 1012-OB (2間×3間) 1013-OB (2間×3間) 1016-OB (2間×3間) 1021-OB (2間×3間) 1024-OB (2間×3間) 1029-OB (2間×2間) 1030-OB (2間×2間) 1031-OB (2間×4間)	溝 3033-OS
IV		5450-OB (2間×4間) 5460-OB (1間×1間) 5500-OB (2間×4間) 5650-OB (2間×2間)			1015-OB (2間×2間) 総柱 1017-OB (2間×3間) 1019-OB (2間×4間) 1026-OB (2間×3間) 1027-OB (2間×4間) 1034-OB (2間×3間)	溝 3046-OS 3034-OS
V		4210-OB (1間×2間) 5480-OB (1間×2間) 5600-OB (2間×3間) 5750-OB (2間×2間)			1001-OB (2間以上×3間) 1007-OB (2間以上×3間) 1009-OB (2間×3間) 1020-OB (2間×3間) 1022-OB (2間×3間) 1025-OB (2間×3間)	
VI						5041-OX
VII					1018-OB (2間以上×3間) 1023-OB (1間×4間) 1032-OB (1間×2間) 1033-OB (2間×2間)	

第30表 第4群時期別遺構構成表

I 期 二俣池北遺跡4区、5区及び水込遺跡A区北半部に所在する。13棟の堅穴住居と、倉庫と思われる掘立柱建物2棟を中心として、土坑・溝などで構成されている。

水込遺跡ではI a～I cの3期に細分されており、二俣池北遺跡のI期、II期が対応するものと思われる。6世紀後葉～7世紀初頭のものとされている。

- II期 二俣池北遺跡4区、5区から水込遺跡A区、B区の全域にわたって所在する。  
I期の段階では竪穴住居中心の建物構成であったが、この段階に至ってはすべて掘立柱建物となり、10棟の掘立柱建物を中心として、土坑・溝などで構成されている。
- 水込遺跡のII期で、二俣池北遺跡のIII期が対応するものと思われる。7世紀初頭から中葉にかけてのものとされている。
- III期 二俣池北遺跡5区および水込遺跡A区に所在する。  
11棟の掘立柱建物を中心として、土坑・溝などで構成されている。
- 水込遺跡のIII期で、二俣池北遺跡のIV期がこれに対応するものと思われる。7世紀中葉～後葉のものとされている。
- IV期 二俣池北遺跡5区および水込遺跡A区に所在する。  
10棟の掘立柱建物を中心として、溝などで構成されている。
- 水込遺跡のIV期で、二俣池北遺跡のV期がこれに対応するものと思われる。7世紀後葉～8世紀前葉のものとされている。
- V期 二俣池北遺跡4区、5区から水込遺跡B区全域及びA区の北半部にかけての地域に所在する。  
9棟の掘立柱建物を中心として、溝などで構成されている。水込遺跡のV期で、二俣池北遺跡のVI期がこれに対応するものと思われる。8世紀前葉～中葉のものとされている。
- VI期 二俣池北遺跡、水込遺跡ともに建物などは検出されていない。  
この時期の設定の指標となっているのは水込遺跡A区5041—OXからの一括資料で、報告書ではこれらの遺物の存在と、前後の段階との遺構の重複関係によってIV期を設定している。8世紀中葉～9世紀前葉のものとされている。
- VII期 二俣池北遺跡5区、水込遺跡A区に所在する。掘立柱建物4棟を中心として構成されている。12世紀中葉から後葉のものとされている。

以上、山直谷開口部の集落についてその概略を記してきたが、その結果、次のような変遷がうかがわれるに至った。

山直谷開口部付近における集落の初現は6世紀初頭で、開口部中央付近の三田B～上フジ（第3群）に出現する。そしてこの集落は7世紀の初頭頃まで小規模な移動をくりかえしつつ継続して存在し、7世紀初頭に廃絶される。

第3群の集落の廃絶と相前後して、開口部の最南端に位置する二俣池北～水込（第4群）と山直北（第1群）で集落が出現する。6世紀後葉にあたる。

第4群では5つの段階にわたって継続して集落がみられ、V期（8世紀前葉～中葉）を最後に廃絶される。第1群の集落は比較的短期間で、7世紀に廃絶されている。

第4群の集落のV期とほぼ同じ時期に、開口部北端の三田C（第2群）で集落が出現する。8世紀中頃にあたる。第2群の集落は短期間の空白はみられるが、I期から10世紀後半のIV期までほぼ継続して存在する。

第2群のI期、II期間の空白を埋めるような状態で山直北（第1群）に集落が出現し、この集落は第2群のII期の集落の出現と相前後して廃絶される。7世紀末から8世紀初頭にあたる。

第2群のIII期にあたる9世紀後半に第1群でも集落が出現し、両者は第2群の集落が廃絶される10世紀後半まで併存する。その後比較的短期間で第1群の集落も廃絶される。

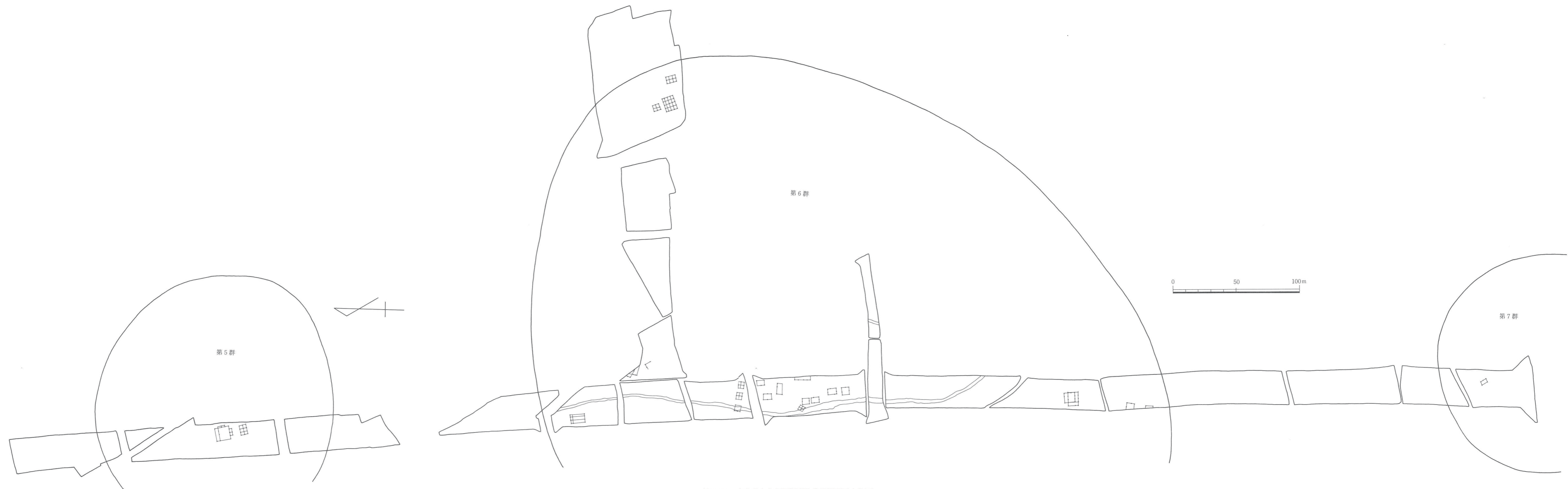
その後短期間の空白期があり、次に集落が確認されるのは11世紀前半で、第2群V期がこれにあたる。

開口部で再び集落が出現するのは12世紀中葉～後葉にかけてで、第4群のVII期がこれにあたる。この段階の集落は短期間で廃絶されたか他に移動したかしたようで、これ以降山直谷開口部の調査範囲内では集落がまったくみられなくなる。

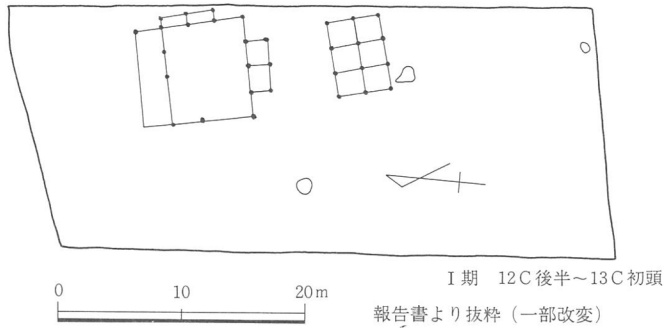
## 2. 山直谷中央部の遺跡群

山直谷中央部にあたるのは黒石遺跡を北限とし、奥へ向かって山直中遺跡、芝ノ垣外遺跡、土井ノ木遺跡の4遺跡である。

これらの4遺跡は検出された遺構の相互関係などから3つの群に再編できるものと考えられる。



第347図 山直谷中央部遺跡群集落遺構配置全体図



第348図 第5群建物配置図

<第5群>

黒石遺跡の第III地区に所在する。2棟の掘立柱建物を中心として、井戸・溝・土坑などで構成されている。掘立柱建物のうち1棟は3間×4間で庇および張り出し部を持つ構造を呈している。他の1棟は2間×

第 5 群			
黒石遺跡第III地区			
	堅穴住居	掘立柱建物	その他
I		228-OB (3間×4間) 庇・張り出し付 250-OB (2間×3間) 総柱	井戸 199-00

第31表 第5群時期別遺構構成表

3間の規模で総柱の構造を呈しており、前者の主屋に付属する倉庫様の建物と考えられる。12世紀後半から13世紀にかけてのものとなっている。他に付近には異なった時期の集落遺構がみられず、この集落は比較的短期間で廃絶されたものと考えられる。<sup>(5)</sup>

<第6群>

山直中遺跡のI地区、L地区から芝ノ垣外遺跡の第1地区～第5地区にかけての地域に所在する。

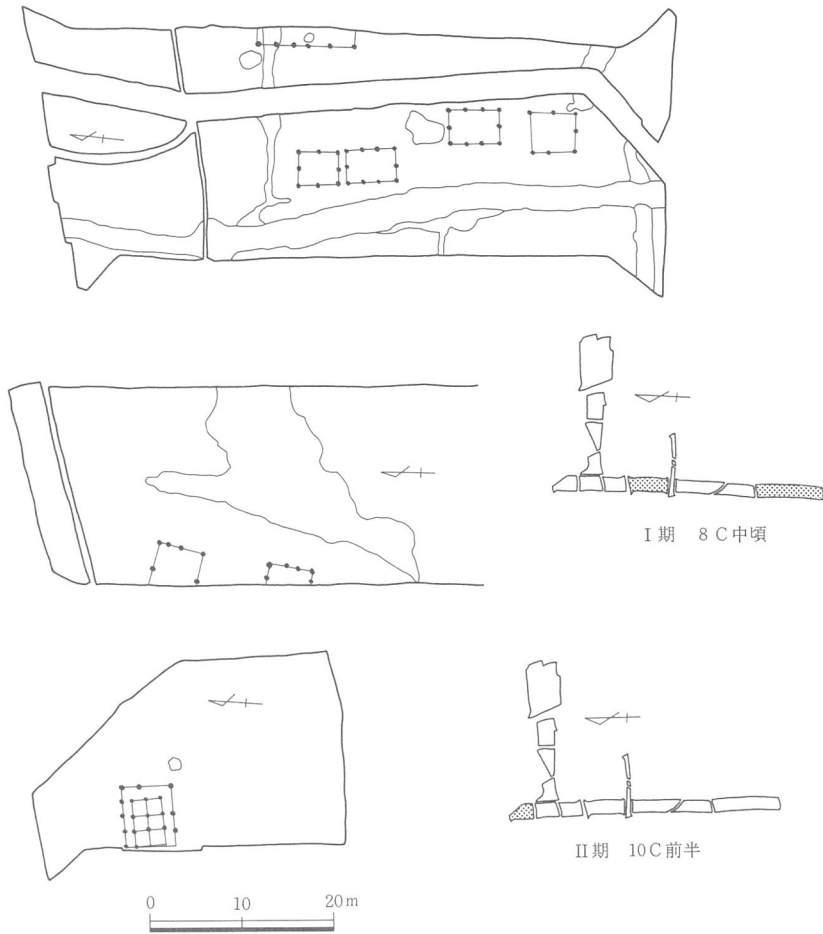
23棟の掘立柱建物を中心として、柵・土坑・溝などで構成される集落であるが、これらはI期～VI期の6つに細分できるものとする。

I期 芝ノ垣外遺跡の第2地区と第5地区の2ヶ所で集落が確認された。

第2地区の集落は5棟の掘立柱建物を中心として、土坑・溝などで構成されるものである。

第5地区の集落は2棟の掘立柱建物を中心として構成されるものである。

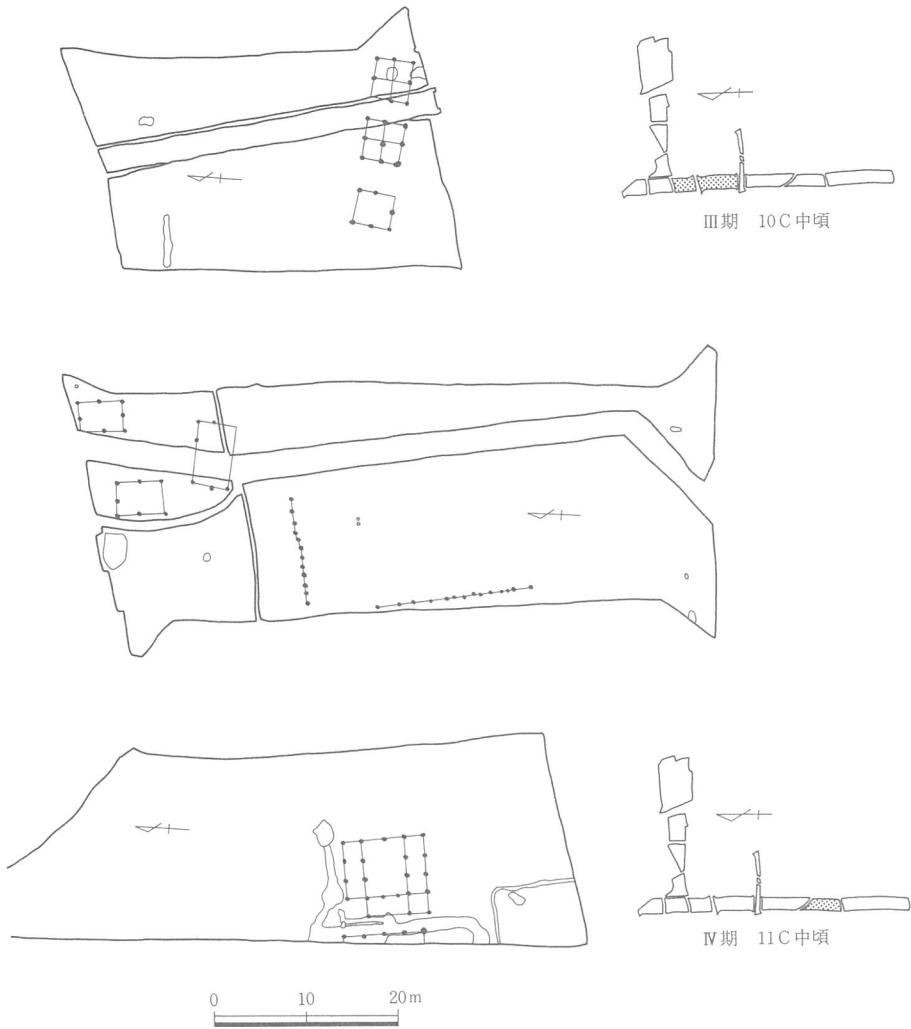
8世紀中頃の年代を想定した。



第349図 第6群建物配置図(1)

- II期 山直中遺跡の第II地区を中心に、西方へひろがりを見せる集落である。  
 1棟の掘立柱建物を中心として、井戸・溝・土坑などで構成されている。  
 10世紀前半のものとされている。  
 (6)
- III期 芝ノ垣外遺跡の第1地区南部から第2地区にかけての地域にひろがる。  
 7棟の掘立柱建物を中心として、柵列・井戸・土坑・溝などで構成されてい  
 る。  
 芝ノ垣外遺跡平安時代～鎌倉時代土器型式分類（以下、芝ノ垣外型式分類と  
 する）のI期にあたり、10世紀中頃の年代を想定した。





第350図 第6群建物配置図(2)

Ⅳ期 芝ノ垣外遺跡の第4地区南半部を中心として、西方へひろがりを見せる。

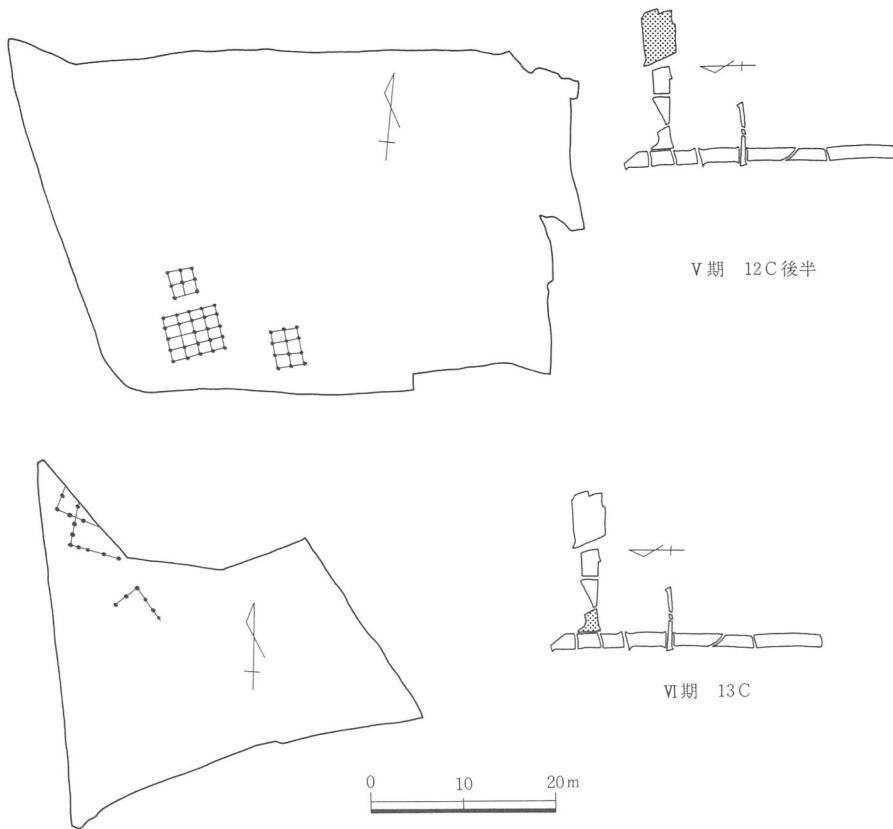
2棟の掘立柱建物を中心として、土坑・溝などで構成されている。

芝ノ垣外型式分類のⅡ期にあたり、11世紀中頃の年代を想定した。

Ⅴ期 山直中遺跡のL地区南半部を中心として、南方へひろがりを見せる。

3棟の掘立柱建物を中心として、柵列・土坑・溝などで構成される集落である。

12世紀後半のものとされている。<sup>(7)</sup>



第351図 第6群建物配置図(3)

VI期 山直中遺跡I地区を中心として、北方へひろがりを見せる。  
 3棟の掘立柱建物を中心として、土坑・溝などで構成されている。  
 13世紀のものとされている。  
 (8)

<第7群>

芝ノ垣外遺跡の第8地区から、その南に隣接する土井ノ木遺跡を含めた範囲に所在するものと思われる。芝ノ垣外遺跡第8地区の調査成果では集落の縁辺部の様相を呈しており、集落の中心は南方の土井ノ木遺跡にあるものと思われる。調査範囲内では1棟の掘立柱建物・井戸・土坑・溝などがある。これらはI期～III期の3つに細分できるものとする。

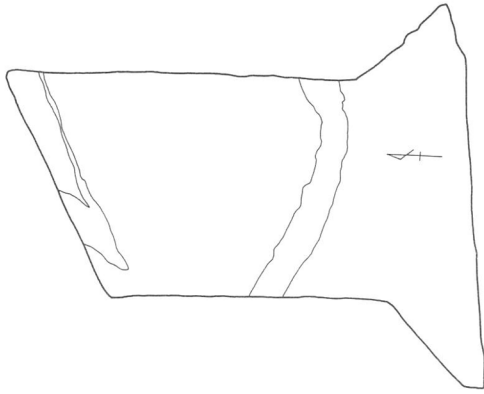
I期 I期に属する遺構は26-OS, 3-ORなどである。集落の中心が南方にあ

第 6 群						
	山直中遺跡Ⅲ地区・Ⅰ地区・Ⅱ地区			芝ノ垣外遺跡第Ⅰ地区～第Ⅴ地区		
	堅穴住居	掘立柱建物	その他	堅穴住居	掘立柱建物	その他
I					4-OB (2間×2間) 5-OB (5間×?) 6-OB (2間×3間) 7-OB (2間×3間) 8-OB (2間×2間) 17-OB (2間×1間以上) 18-OB (3間×1間以上)	土坑 6-OO 7-OO 8-OO 9-OO 10-OO 11-OO 12-OO 溝 1-OS 3-OS 4-OS 5-OS 6-OS
II		106-OB (2間×3間) 総柱・庇付	井戸 101-OW 土坑 103-OO 溝 102-OS			
III					1-OB (2間×2間) 2-OB (2間×2間) 総柱 3-OB (2間×2間) 総柱 9-OB (2間×2間) 10-OB (2間×2間) 11-OB (2間×3間) 12-OB (2間×2間) 総柱	土坑 2-OO 3-OO 4-OO 5-OO 13-OO 14-OO 15-OO 井戸 1-OW 橋列 1-OF 2-OF 溝 2-OS
IV					15-OB (2間×3間) 庇付? 16-OB (2間×3間) 3面庇付	土坑 19-OO 20-OO 21-OO 22-OO 23-OO 24-OO 25-OO 溝 10-OS 11-OS 12-OS 13-OS 14-OS 15-OS
V		43-OB (2間×2間) 総柱 44-OB (3間×4間) 庇付 53-OB (2間×3間) 総柱	溝 61-OS 62-OS 63-OS 井戸 54-OW			
VI		11-OB (2間×3間) 10-OB (3間×3間) 18-OB (1間×3間)				

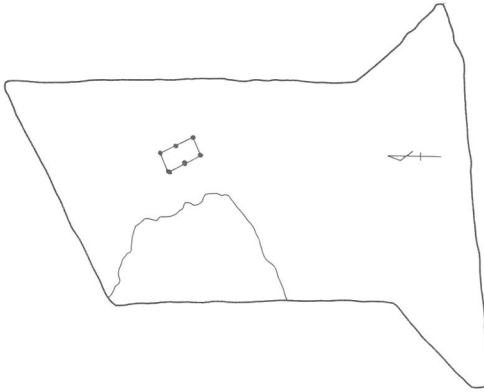
第32表 第6群時期別遺構構成表

るとすれば、3-ORがその北限を区画する位置にあたるものと考えられ、26-OSはさらにその外側になる。12世紀後半から末の年代を想定した。

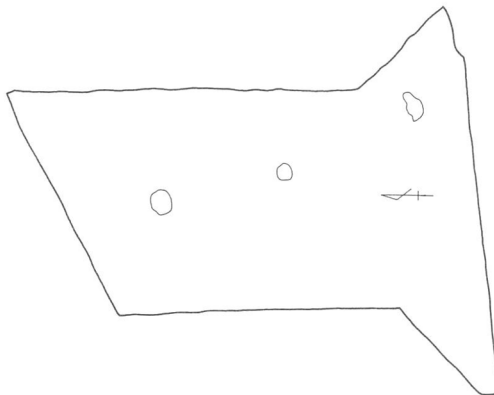
II期 II期に属する遺構は20-OB、1-OLなどである。1期と同様に集落の北縁辺部にあたると思われるが、集落の区画を明示するような遺構はみられなかつ



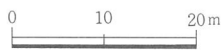
I 期 12C 後半～末



II 期 13C 初頭



III 期 13C 前半



第352図 第7群遺構配置図

た。13世紀初頭の年代を想定した。

Ⅲ期 Ⅲ期に属する遺構は39-〇〇，  
40-〇〇， 2-〇Wなどである。  
Ⅰ期，Ⅱ期と同様に集落の中心  
をなすと考えられる遺構はみら  
れず，集落の中心はやはり南方  
にあるものと思われる。13世紀  
前半の年代を想定した。

以上山直谷中央部の集落の概略について  
記してきたが，これらを検討した結果，以  
下の傾向がうかがわれるに至った。

第 7 群			
芝ノ垣外遺跡第8地区			
	堅穴住居	掘立柱建物	その他
Ⅰ			溝 26-OS 自然河川 3-OR
Ⅱ		20-OB (1間×2間)	土坑 34-〇〇 池 1-OL
Ⅲ			土坑 39-〇〇 40-〇〇 井戸 2-〇W

第33表 第7群時期別遺構成表

山直谷中央部付近における集落の初現は8世紀中頃である。芝ノ垣外第2地区，第5地区（第6群）ではほぼ同時に2ヶ所集落が出現するが，いずれも8世紀後半には廃絶される。

その後かなりの空白期のあとに，10世紀前半の段階で山直中（第6群）に集落が出現し，10世紀中頃まで存続している。この集落の廃絶と相前後して芝ノ垣外第1地区～第2地区（第6群）に集落が出現するが，この集落も比較的短期間で廃絶されたようである。

次に集落が出現するのは11世紀中頃であり，芝ノ垣外第4地区（第6群）で確認された。この集落も存続期間は比較的短く，11世紀後半にはすでに廃絶されているようである。

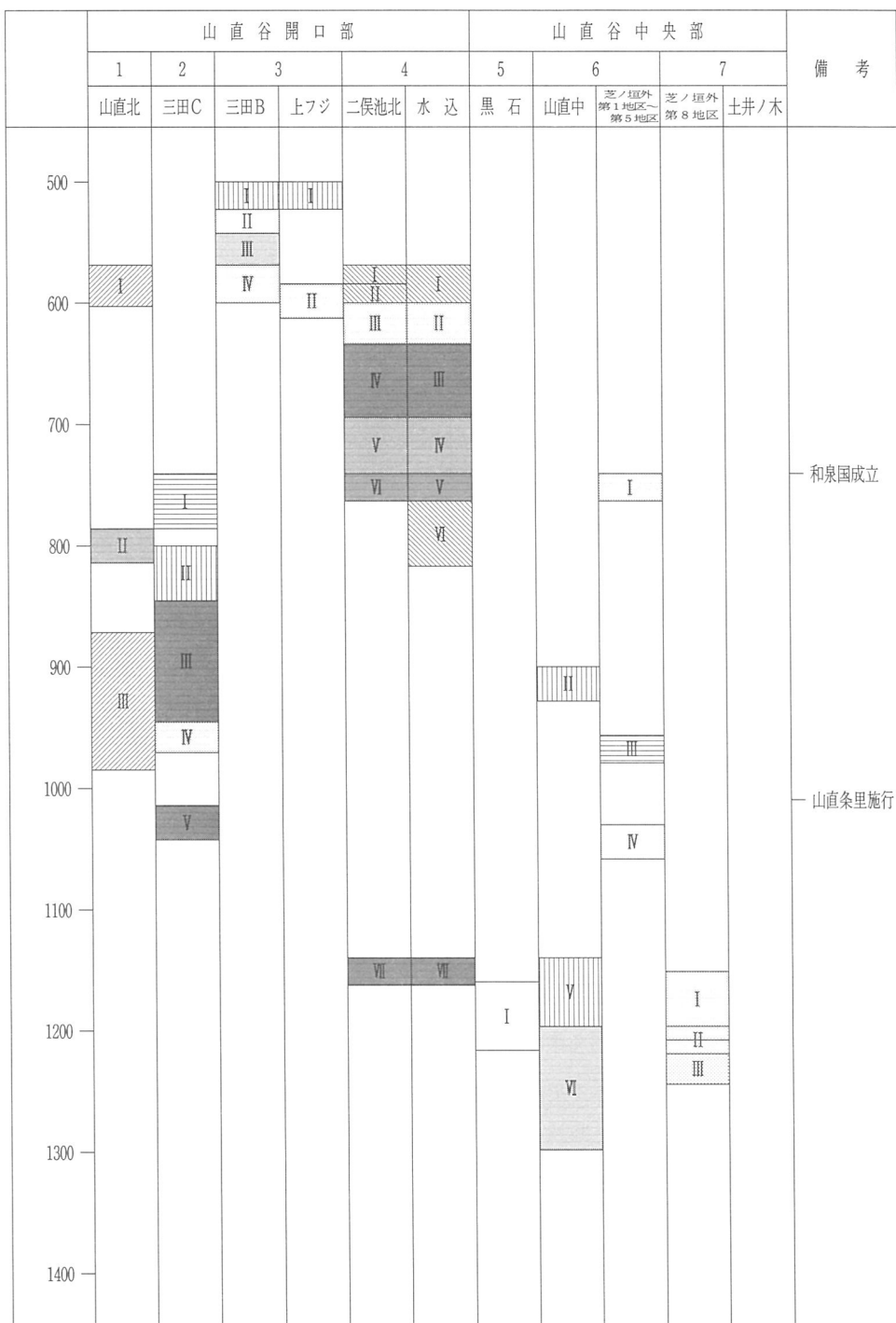
その後再び長期の空白期間を経て，12世紀後半に山直中（第6群）で集落が出現し，13世紀には山直中の別地点で集落がみられる。

前段階までは第6群の範囲内で集落が移動していたが，この段階では第6群のⅤ期とほぼ併行して黒石（第5群），芝ノ垣外第8地区（第7群）にも集落が出現する。

第6群の集落はⅤ期，Ⅵ期と断続して存在し（12世紀後半～13世紀），第7群の集落もⅠ期～Ⅲ期まで連続して存在する（12世紀後半～13世紀前半）。

第6群のⅥ期は報告されている年代観が13世紀代と漠然としているため明言はできないが，この三者は12世紀の後半の段階では確実に併存しており，13世紀に入って相次いで廃絶されたものと推定できる。

山直谷開口部の遺跡群が群単位ごとに，集落が一定期間存続した後に他へ移る様相を呈



第34表 山直郷内集落変遷表

しているのに対し、山直谷中央部ではある特定地域の中（第6群にあたる）を断続的に集落が移動し、終末段階に至って各地に分散して併存する様相を呈する特徴がみられる。

### 第3節 山直郷における集落の展開

前節では山直谷を大きく開口部と中央部にわけ、それぞれ集落の変遷についてふれてきたが、ここで山直郷全体の中での集落の展開について考えてみたい。

山直郷は山直氏の本拠地とされており、その郷域は現岸和田市積川から新在家までの範囲と考えられ、これは概ね牛滝川を中心として左右に広がる狭小な縦長の谷である山直谷にあてはまるものといえた。

山直郷における集落の展開をみると、いくつかの出来事を契機として、段階別に整理できるものと思われた。

#### <第1段階>

古墳時代以降で山直谷において集落が形成された初現の時期である。

山直郷内には4世紀後半に比定される前期古墳の摩湯山古墳が存在し、その周辺の三田遺跡では4世紀代の土壌墓が多数検出されている。この墓域を形成した集団の居住域は現在のところ確認されていないが、付近に存在するとの見方が有力である。<sup>(9)</sup>

この段階の集落は山直谷中央部の芝ノ垣外遺跡で2ヶ所検出されている。これらは摩湯山古墳の時代よりは多少後出のもので、4世紀末から5世紀初頭の年代を想定している。2つの集落ともに竪穴住居数棟からなる小規模なもので、比較的短期間で廃絶されたようである。摩湯山古墳や三田遺跡から芝ノ垣外遺跡までは直線距離にして約3.5kmあるが、この間に小規模な集落がいくつか点在していた可能性は考慮できるものと思われる。

現在までの調査成果によれば、この段階の集落の存続は5世紀初頭頃までで、5世紀前半から末にかけては集落がみられない断絶期となっているようである。

#### <第2段階>

約1世紀の空白期の後に、再び山直郷域内に集落が形成される段階で、山直谷開口部で類例がみられる。この段階は各集落単位の建物の規模・形態などの面からみても前段階からおおきく進歩を遂げている事が明白であり、第2段階こそが山直郷における本格的な古代集落の出現期といえる。ただし、この段階では建物構成の中心は竪穴住居で、掘立柱建

物は倉庫があるのみであり、この点からみれば山直郷はいまだ後進的地域というべき位置にあるといえよう。

第2段階は6世紀初頭から後半の時期にあたる。この段階で山直郷の中心的な集落として存在していたのは第3群（三田B，上フジ）で、終末には第1群（山直北），第4群（二俣池北，水込）でも集落が出現する。

#### <第3段階>

第3段階は山直郷の集落における建物構成が竪穴住居を中心としたものから掘立柱建物を中心としたものに変革を遂げた時期である。

この段階における山直郷の中心集落はすでに第4群に移っており、方位の一致する建物が整然と並んだ状態で検出されている。

またこの段階は山直谷開口部で本格的な開発行為が始められた時期といえ、水込遺跡3033-OSのような南北に縦断する大溝が、灌漑用水としての機能を持つ例証として存在している。

第3段階は7世紀初頭から8世紀前半の時期にあたる。

#### <第4段階>

第4段階は和泉国の成立（757年）という一大画期を契機として、山直郷の集落構成に新たな変化が生じた時期である。

第4群においても集落は存続するが、山直郷の中心的集落に位置づけられるものはこの段階で第2群に移り、その後第1群へと移ってゆく。この集落移動は、現和泉市府中町付近に所在したと推定される和泉国府との関わりによる結果としてみられたものと推察され、山直郷を治める山直氏が、国府とより密接な関係を得やすい場所へと居住域を移動していったあらわれと考えられる。

山直谷開口部の開発は大規模な灌漑用水の整備などによってこの頃にはすでに一定の水準に達していたものと思われるが、8世紀中頃の段階では山直谷中央部でも本格的な開発行為が開始された。その例証となるのが芝ノ垣外遺跡第3地区から山直中遺跡第II地区に至るまでの、総検出長350mにわたって南北に縦断する大溝1-OSである。この大溝が灌漑用水としての機能を果たした事により、山直谷中央部の本格的な開発は進展していったものといえる。この開発事業の中心となった集団の集落として第6群のI期集落が存在



したものといえよう。

第1群、第2群の集落は、第4段階の山直郷における中心的集落として10世紀後半に至るまで連続して営まれるが、第6群の集落は断続的にみられるのみで、しかも各々の存続期間は比較的短い。これはこの段階の山直郷の中心が山直谷開口部にあり、中央部はあくまでも開発途上の状態にあった事を示すものといえる。

第4段階は10世紀後半の第1群集落の廃絶とともに終息をむかえる。

#### <第5段階>

第5段階では建物構成に明確な変化があらわれる。前段階ではほぼ同規模の建物が並列する構成形態が主流であったが、この段階では大型で庇や張り出しを持つ主屋に付属屋が伴い、主屋には雨落ち溝などの施設がみられるなど、いわゆる屋敷地の構造を呈している。

第5段階で最初に山直郷の中心的集落となっていたのは第2群で、V期の集落がこれにあたる。この集落は11世紀前半に比定されている。

この段階では前段階と比べて建物構成上に大きな変化がみられたのであるが、このような変革を遂げ得た要因には、山直谷開口部及び中央部の開発が一定の水準に達した事によって、生産が飛躍的に向上した事があげられよう。

第2群の集落よりやや遅れて、11世紀中頃に第6群にも集落がみられる。この集落は検出範囲が集落域のごく一部と推測されるにもかかわらず、屋敷地の様相を呈する遺構が検出され、山直郷における中心的集落の様相を思わせるものであった。第2群と第6群の集落は一定期間併存していたものと思われる。すなわち、前段階までは山直



第353図 山直郷付近の条里分布

※大園遺跡発掘調査概要Ⅶより部分転写一部改変

郷では開口部を中心にひとつの中心的集落が移動する傾向がみられたが、この段階に至って開口部、中央部の両方に中心的な集落がみられるようになる。これは山直谷の開発がより谷奥部へと進行し、生産性の向上がなされた結果、拠点集落の分散化などの必要性が生じたためといえよう。

ここでもうひとつふれねばならないのが条里制との関わりについてである。

山直郷周辺には三種類の条里地割が存在するとされている。平野部には和泉郡内を広くカバーする主条里があり、山直谷内部には主条里と各々方位を異にする山直条里、積川条里がみられる。

第2群<sup>(11)</sup>の集落は山直条里の地割内に位置するが、前段階の集落が条里地割と方位を異にしているのに対し、第5段階の屋敷地は山直条里の地割と整合する状況を呈している。

すなわち、第5段階は山直郷において条里制の施行がうかがわれた時期であり、この時期が、大規模な屋敷地の出現も相まって集落構造の変革を推定できる画期といえよう。

第6群のⅣ期集落が廃絶された11世紀後半から12世紀中頃までは、調査範囲内では集落がまったくみられない空白時期となっており、次に集落がみられるのは12世紀後半である。第6群のⅤ期がこれにあたる。この集落はやはり大型建物を中心とした屋敷地の構造を呈しており、前段階との間に画期が生じた事を示す事例はみられなかった。したがって空白期間は存在するが、Ⅴ期とそれに続くⅥ期の集落も第5段階に含めて考える事とした。

この段階では中心的集落の第6群に加えて、第4群、第5群、第7群にも集落ないしは集落の存在をうかがわせる遺構が確認されている。開口部では最も南側の第4群以外にはまったく集落がみられなくなり、第4群の集落も比較的短期間存続した後に廃絶されているので、山直郷の中核は開口部から中央部へ移動していたものと考えられる。

第5段階は11世紀前半から第Ⅵ期の集落が廃絶された13世紀後半までにあたる。

芝ノ垣外遺跡の調査結果においては、13世紀後半以降は近世に至るまで耕地化していた事が判明しており、花粉分析の結果でも、古くは水田・畑作を中心に生産し、近世ではこれに加えてみかんなどの栽培もしていた事もわかった。

この傾向は調査された他の遺跡の結果からもうかがわれ、調査範囲内には14世紀以降の集落が検出されていない。もちろん付近に存在していただろう事はいうまでもない。

南北に連なる山直谷遺跡群は牛滝川右岸に発達した断丘上に形成されているが、又、古道「牛滝街道」に添って存在しているともいえ、この古道は、古くは式内社の積川神社あるいは山直神社から谷を縦断して北へのび、和泉国府方面へ続いていた当地の交通の要所

であったと思われる。

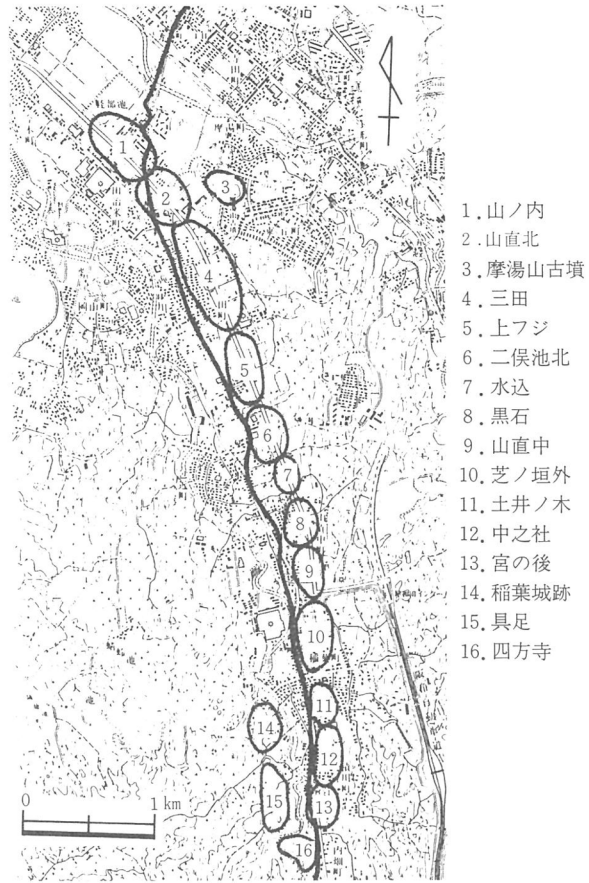
(12)

この牛滝街道が牛滝山まで延びたのは鎌倉時代であり、道筋が全域を通じて固定化したのもこの頃であったと思われる。したがって14世紀以降の集落は西方の牛滝街道沿いに営まれてゆき、調査地付近は耕地化していったものと考えられる。

おわりにかえて

以上、山直郷における集落の展開について考えてきた。主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線建設に伴う事前発掘調査は、ひとつの谷筋に縦断したトレンチを入れるという画期的なものであるのと裏腹に、幅20m内外のトレンチ調査という限られた範囲内での成果しか得られないという欠点もある。したがってこ

こで得られた成果の内容は推測の域を出るものではない部分も多々ある。したがって今後周辺の調査が進めば論拠がくつがえってしまう可能性も多分にある。したがってさらに山直谷奥部の調査が行われ、新たな資料が得られた時点での修正・加筆が今後の課題である。



第354図 山直谷遺跡群と牛滝街道

(註)

(1) 「山ノ内遺跡・山直北遺跡」発掘調査報告書 1988 (財)大阪府埋蔵文化財協会

(2) 「三田遺跡」発掘調査報告書 1987 (財)大阪府埋蔵文化財協会

(3) (2)と同じ。

- (4) 「二俣池北遺跡・上フジ遺跡」発掘調査報告書 1989 (財)大阪府埋蔵文化財協会, 及び「水込遺跡」発掘調査報告書 1990 (財)大阪府埋蔵文化財協会

山直中遺跡II発掘調査報告書に掲載されている府道磯之上山直線予定地内主要遺構配置図(2)などを参考に検討した結果, 二俣池北遺跡南半部から水込遺跡にかけての範囲で検出された建物遺構は, ひとつの単位集落のものと考えた。

- (5) 「黒石遺跡」発掘調査報告書 1990 (財)大阪府埋蔵文化財協会
- (6) 「山直中遺跡II」発掘調査報告書 1990 (財)大阪府埋蔵文化財協会
- (7) 「山直中遺跡」発掘調査報告書 昭和63年3月31日 大阪府教育委員会, (財)大阪府埋蔵文化財協会
- (8) (7)と同じ。
- (9) 三田遺跡では総数165基におよぶ土壙墓が検出されており, それらは埋土などにより類型化されている。時期的な幅は小さいが, ある一定期間墓域として利用されていたものといえ, 付近に存在する, ほぼ同時期に比定される大型前方後円墳の摩湯山古墳が築造される期間に, それにかかわった集団の集落が三田遺跡C地区付近に存在していたものと推察される。
- (10) 「国史大系」の続日本紀に記載されるところによれば, 天平寶字元年(西暦757年)5月乙卯の勅によって, 河内国より和泉郡および日根郡を分割し和泉国が成立したとされている。
- (11) 「和泉郡の条里型地割に関する問題点」 藤永正明
- (12) (6) 報告書内第IV章第3節参照。

## 付章2 芝ノ垣外遺跡の花粉・珪藻分析

川崎地質株式会社\*

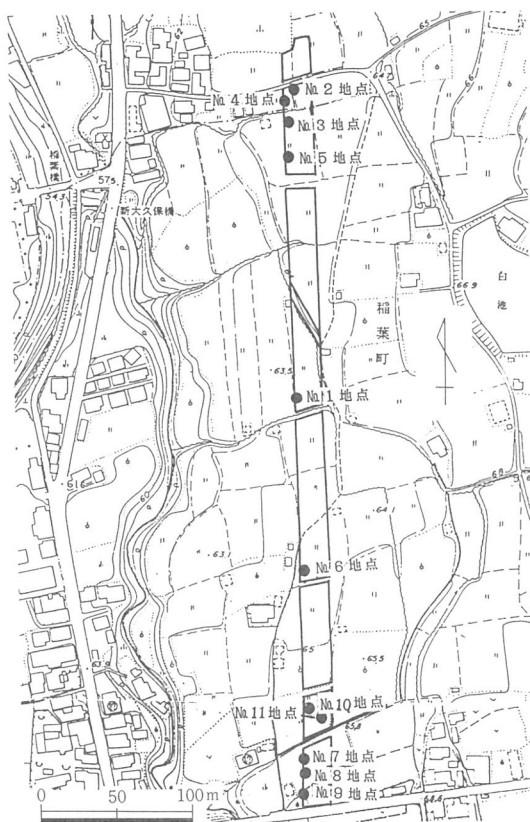
### まえがき

芝ノ垣外遺跡は、岸和田市稲葉町に位置し、牛滝川沿いの河岸段丘上に立地する。当分析調査では、遺跡周辺の植生変遷や井戸内の堆積環境の推定を目的として、発掘調査に伴って露出した各地点より採取した試料を対象に、花粉分析および珪藻分析を行った。

### 1. 分析試料

第355図に示すNo 1～11の11地点で試料採取を行った。花粉分析を全地点の77試料について、珪藻分析をNo 2地点の8試料について実施した。

各地点での試料採取層準は、第358図～第368図の花粉ダイアグラムに示す。

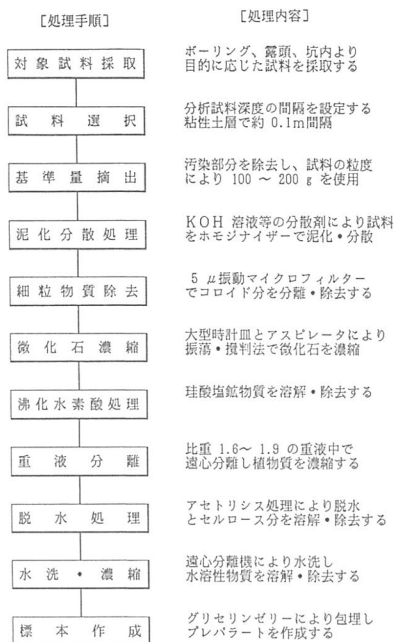


第355図 試料採取地点図

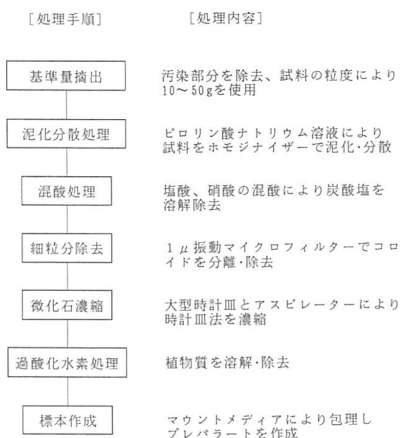
### 2. 分析方法

花粉分析及び珪藻分析処理方法は第356図、第357図のフローチャートに示す。花粉、珪藻の同定は、光学顕微鏡下で主に400倍で、必要に応じて600倍、1000倍で行った。

\*担当者：(大阪支部) 中谷紀子



第356図 花粉分析フローチャート



第357図 珪藻分析フローチャート

### 3. 結果

分析結果は、第358図～第368図の花粉ダイアグラム及び第369図の珪藻ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは、それぞれの出現率を木本花粉を基数とする百分率で表した。木本花粉数が100に満たない場合には、出現した花粉化石の種類を\*で示した。珪藻ダイアグラムでは、それぞれの出現率を出現総数を基数とする百分率で表した。

### 4. 花粉分帯

No 3, 11地点では、全試料を通じて充分な量の花粉が含有されていなかったことから、分帯の対象から除いた。また、No 2 地点は井戸という特殊な環境下での堆積物であることから、他の地点とは別に分帯を行った。

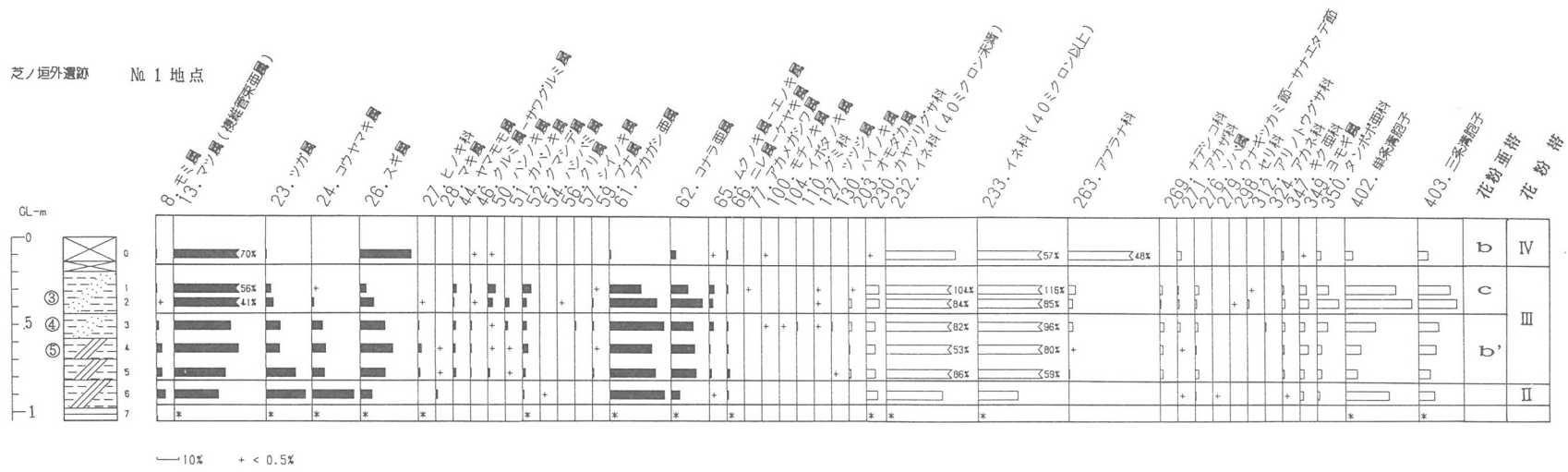
#### ①No 1, 4 ~ 10地点

I 帯 (No 4 地点試料No 8)

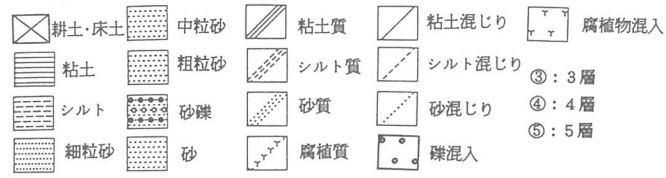
マツ属 (複維管束亜属) が優占し、スギ属を伴う。

II 帯 (No 1 地点試料No 6, No 6 地点試料No 6)

芝ノ垣外遺跡 No.1地点

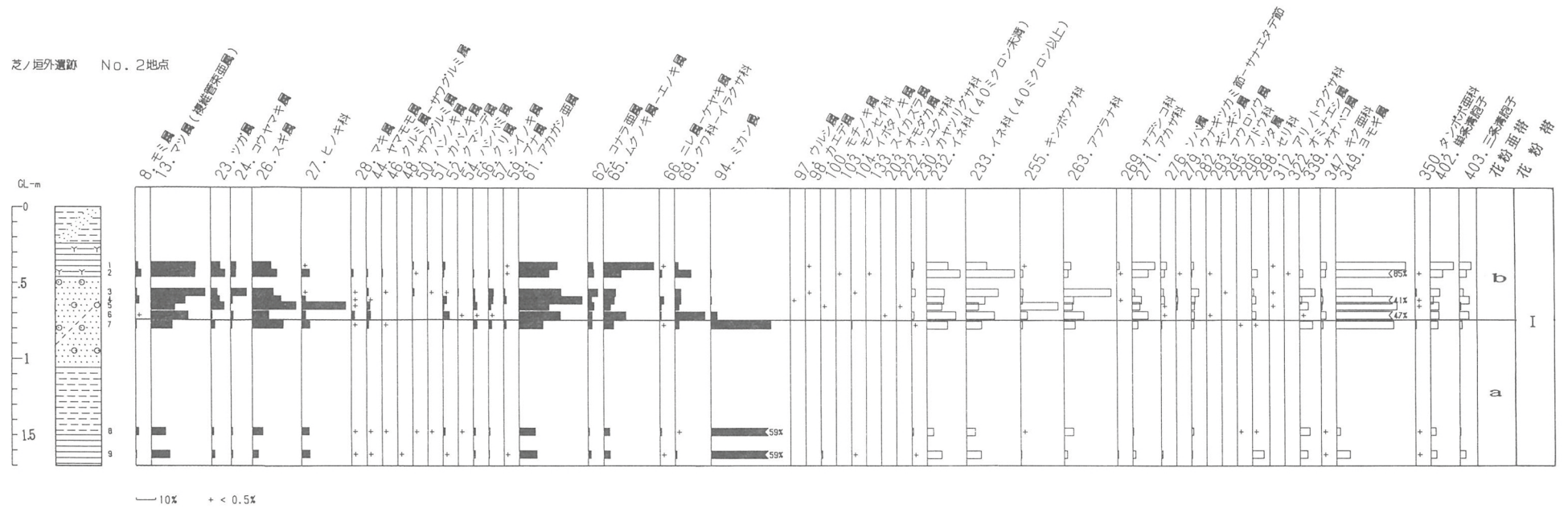


凡例



第358図 No.1地点花粉ダイアグラム

芝ノ垣外遺跡 No.2地点



第359図 No.2地点(井戸)花粉ダイアグラム